

No.4

1996

M

EDIANET

慶應義塾大学メディアネット

「ゲーテンベルク聖書」

掲出の大部な書物(404mm×293mm)は、いわゆる「ゲーテンベルク聖書」であり、1頁に42行印刷されているので、単に「42行聖書」とも呼ばれている。ドイツのマインツで、1455年頃ゲーテンベルク(1394?-1468)により刊行された世界最初期の活版印刷物である。42行聖書は上下2巻であるが、慶應義塾所蔵版は上巻(648頁)のみで、創世記より詩篇までを収める。下巻はいつの時代か紛失しその消息は判らない。

ゲーテンベルクは活版印刷の創始者として名高いが、ただに活版印刷術を発明したというだけでなく、自ら模範的な印刷物を世に送り出した人物として傑出している。時あたかも、千年続いた中世はようやく終焉を迎え、世情は新時代の息吹を予感しつつある時代であった。

活版印刷術以前、ヨーロッパの書物は写本であった。写本作業は主に修道士の仕事であり、多大の苦渋を伴うものの又それは修得の道へ通ずる行でもあった。書物の歴史からみると、ゲーテンベルクの活版印刷術はこうした写本作業を機械化し、手写を一挙に払拭するかに見えたが、この希代の職人もまた時代の子であった。いまだ中世の人でもあるゲーテンベルクは、活字印刷術をあえて誇示する様子もなく、頭文字や頁全体を手彩色で華麗に装飾し、却って写本であるかの如くに装っている。現代からみると、伝統と革新の抱き合わせのような、しかしそれだけに、時代の転換点の雰囲気を生に伝える所産となっている。



図版：慶應所蔵 ゲーテンベルク聖書の
第一頁「聖ヒエロニムスの書簡」

また、美観のみならず造本技術からみても「42行聖書」は印刷、装丁のすべてにわたり出色の出来栄であり、その上この本を生み出したメカニズムの原理は、後世の人が手を加える隙間がない、とまで称賛されている。実に“最初に完成品ありき”で、書物とはいかなるものたるかを今に教えてくれる。

この文化遺産でもある貴重書で、世界中に所在の確認されているもの46セット。日本では、慶應義塾所蔵となった1冊が、唯一の招来品である。

なお、福澤諭吉1862年(文久2年)の「西航手帳」に「1440年独逸にて出版/ラテン語の書此を/欧州第一の板本/なりと」の手記あり、一読ゲーテンベルク聖書を連想させる。「ラテン語の書」が何を意味するか、その確認が待たれるところである。

(ゲーテンベルクの業績については、なお考証の余地があるといわれるが、今は通説に従った。)

森園 繁

(理工学メディアセンター)
事務長

MediaNet 4

目 次

<巻頭言>

新副所長挨拶——全塾高度情報化に向けて——	所 真理雄 ……	3
新所長・副所長紹介		4

<特集> ネットワークを利用したサービスの展開

日吉メディアセンターホームページの作成について	宮崎 貞治ほか …	6
FirstSearch サービスの導入	廣田とし子	10
法図連・法資研・そして最近の法情報検索	上原 順子	13
電子図書館について	木下 和彦	16

<MediaNet レポート>

山中資料センターの利用状況	三田メディアセンター	村上篤太郎 ……	26
	日吉メディアセンター	小原 真弓 ……	27
	理工学メディアセンター	三谷三恵子 ……	28

基礎医学特論「医学文献情報概説」を担当して	市古みどりほか …	30
商学部でのネットワーク利用事例の紹介	神戸 和雄	36

Undergraduate 教育における図書館の役割		
——日吉メディアセンター勉強会から——	静谷裕美子, 河野江津子	41
医学メディアセンターにおける職員勉強会について	吉井由希子	47
分科会レポート——レファレンス研究分科会——	石原 智子	51

日吉メディアセンターにおける業務改革		
——テクニカル・サービスを中心に——	武 正恒	54

理工学メディアセンターの蔵書とその利用		
——蔵書・貸出統計から——	館 田鶴子	57

慶應義塾写真データベースについて	平尾 行蔵, 安形 輝	62
ロシア国立図書館及び		

ラトヴィア図書館との雑誌の交換について	角田 浩子	67
---------------------	-------	----

蔵書の形成	澁川 雅俊	69
-------	-------	----

<海外レポート>

米国の医学図書館におけるレファレンスサービス	市古みどり ……	74
変革期にあるアメリカの大学図書館システム	落合 啓一 ……	79

<スタッフルーム>

山田 雅子 24/杉山 良子 40/長谷川博子 53

<ティールーム>

戸瀬 信之 25/伊藤 公平 50/氷上 正 66

<資料>

メディアネット・メディアセンターに関する書誌	82
スタッフによる論文発表・研究発表	82
年次統計資料	85
グーテンベルク聖書	森園 繁…表紙裏
編集後記	94

<表紙> デザイン 石田恵子

<カット> 中村亜日香 五十嵐由美子

新副所長挨拶

—全塾高度情報化に向けて—

ところ まりお
所 真理雄
(メディアネット副所長)
理工学部教授



メディアネット副所長を
拝命したのが1995年10月で
あるから、就任して早一年
になる。この間の主たる仕
事は、1995年より始まった
全塾高度情報化に関するも
のであった。これは義塾の
研究、教育、事務の高度情
報化により研究教育の内容

の高度化をはかり、社会に対して開かれ、自己改革を続ける大学を目指そうとするものである。実施計画によれば西暦2000年の(第一次)高度情報化完成年度には利用者数3万5000名、塾設置によるパソコンならびにワークステーション1万台、個人所有のパソコン/ワークステーション4万台、情報コンセント6000個が見込まれており、このような利用者に対して超高速ネットワークによるマルチメディア情報サービスを提供する。上記の数値については早くも上方修正の要望が寄せられていることから、本事業に対する教職員、学生からの期待の高さが窺える。

これに応えるためメディアネットでは、1996年3月末までに大学各キャンパスの教室、研究室、事務室などへの通信ケーブルの敷設を行い、4月からは利用環境の整備すなわちファイルサーバ、メールサーバ、WWWサーバの設置・運用や、パソコンやワークステーション等の利用者端末の設置・運用を行ってきた。本年度末までに全ての希望者に対し、利用者アカウントの登録やIPアドレスの配布を行える見通しである。これに並行して諸学校への展開を始めており、来年度中には国内国外の全ての諸学校が慶應義塾情報スーパーハイウェイに接続され、利用環境の整備が行われる予定である。その他、パソコンやワークステーションの増設、情報コンセントの増設等も来年度

の事業計画に盛り込まれる。

全塾高度情報化の事業は、大学計算センターやメディアネットがこれまで行って来たものとは、技術的にも予算的にも、また、関係する組織の面からも異なるところが多い。これまでは計算サービスや情報サービスの拠点を構築することにその主眼があったのに対し、今回の事業は計算と情報サービスを一体化し、これによって面を構築することに対応する。すなわち、各学部、大学院、諸学校の教育、研究、ならびに事務に関連して利用者の間に一対一、一対多、多対多のマルチメディアコミュニケーションを多数同時に支援することになる。これは直接個々の利用者を対象としたサービスであり、その規模ならびに質においてこれまでとは比べものにならない。サービスにあたるメディアネットの教職員には自ずと高い技術水準が要求されることになる。

このような背景から、1996年4月にネットワークテクノロジーセンター(仮称)開設準備室がメディアネット内に発足し、慶應義塾情報スーパーハイウェイの設計、開発、設置、運用を行うとともに、1997年4月の正式発足を目指して今後の恒常的なサービスのための組織作りを検討している。そこでの主要な課題は利用者の要求の変化や技術の進歩に追従できる柔軟な組織を如何に作るかである。また、将来サービスの中心が情報インフラの整備から、情報コンテンツの作成支援へと移るであろうことも十分に留意する必要がある。さらには慶應義塾の高度情報化に関連したビジョンの策定もその重要な責務になるであろう。当然、情報メディアの導入ならびに基礎教育との関連も十分に考慮しておく必要があると考えている。

利用者に対してようやく電子メールとWWWアクセスのサービスが提供できる体制が整いつつあるが、真のマルチメディア高度情報化はこれからである。遠隔授業、遠隔テレビ会議、マルチメディアによる教育コンテンツの作成や環境整備などは全くこれからと言ってよい。コンピュータや通信という科学技術を研究教育に真に役立て、今後も利用者中心のサービスを行ってゆく所存である。皆様の御理解ならびに御協力を切にお願いする。

新所長・副所長紹介

この1年間に新しく各メディアセンターの所長・副所長になられた方々です。

【日吉メディアセンター】

<所長>

なが たもり 男
永田守男

(理工学部管理工学科教授)



<副所長>

すずき つね 男
鈴木恒男

(法学部助教授)



生年：1948年

学歴：慶應義塾大学大学院工学研究科管理工学専攻修士課程（1973年）

学位：工学博士（慶應義塾大学，1980年）

専門分野：情報科学，ソフトウェア工学

所属学会・団体：情報処理学会，電子情報通信学会，日本数式処理学会，ACM，IEEE Computer Society

生年：1950年

学歴：慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻修士課程（1977年）

主な前職：富士写真フィルム（株）足柄研究所

専門分野：知覚心理学（色彩心理学）

所属学会・団体：日本色彩学会，日本照明学会，応用物理学会，日本光学会，日本視覚学会

【医学メディアセンター】

<所長>

かね こ ちか 道
金子章道

(医学部教授)



<副所長>

あい も きた かず 和
相磯貞和

(医学部教授)



生年：1938年

学歴：慶應義塾大学医学部（1962年）

学位：医学博士（1968年）

専門分野：神経生理学

所属学会・団体：日本生理学会，日本神経科学学会，英国生理学会，米国神経科学協会，視覚・眼科学研究協会，国際脳研究機構

生年：1951年

学歴：慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程（内科学）（1980年）

学位：医学博士（1980年）

専門分野：解剖学一般（含む組織学・発生学），細胞生物学，免疫学

所属学会・団体：日本解剖学会，日本組織細胞化学会，日本電子顕微鏡学会，日本内科学会，日本消化器病学会，日本消化器内視鏡学会

【理工学メディアセンター】

〈所長〉

なか がわ まさ お
中 川 正 雄(理工学部情報工学科教授)
兼電気工学科教授

生年：1946年

学歴：慶應義塾大学大学院工学研究科電気工学専攻博士課程（1974年）

学位：工学博士（慶應義塾大学，1974年）

専門分野：無線通信，移動通信，スペクトル拡散通信，通信放送融合技術

所属学会・団体：電子情報通信学会，電気学会，
米国 IEEE，郵政省電気通信技術審議会専門委員

〈副所長〉

よし だ かず お
吉 田 和 夫(理工学部システムデザイン工
学科教授兼機械工学科教授)

生年：1949年

学歴：慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程（1978年）

学位：工学博士（慶應義塾大学，1978年）

専門分野：振動，制御，ロボティクス，システムダイナミクス，コントロールおよびロボティクス

所属学会・団体：日本機械学会，日本自動制御学会，計測自動制御学会，日本ロボット学会，自動車技術学会，日本建築学会

【湘南藤沢メディアセンター】

〈所長〉

うめ がき みち お
梅 垣 理 郎

(総合政策学部教授)



生年：1947年

学歴：慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程（1971年）

プリンストン大学大学院修士課程（1974年）

同 博士課程（1978年）

学位：政治学博士（プリンストン大学，1978年）

おもな前職：ジョージタウン大学政治学部助教授

専門分野：比較及び国際政治学

所属学会・団体：日本政治学会，アメリカ政治学会，アメリカ=アジア学会

〈副所長〉

とく だ ひで ゆき
徳 田 英 幸

(環境情報学部教授)



生年：1952年

学歴：慶應義塾大学大学院工学研究科修士課程（1977年）

ウォータールー大学大学院博士課程（1983年）

学位：Ph. D.（ウォータールー大学，1983年）

専門分野：計算機科学，分散システム，オペレーティングシステム，リアルタイムシステム，コンピュータネットワーク

所属学会・団体：ACM，IEEE，日本情報処理学会，日本ソフトウェア科学会

日吉メディアセンターホームページの作成について

みや	さき	てい	し
宮	崎	貞	治
たね	だ	あき	ひこ
種	田	昭	彦
きの	した	かず	ひこ
木	下	和	彦
ふり	はた	ゆかり	
降	旗		
いし	はら	とも	こ
石	原	智	子
とよ	だ	のり	こ
豊	田	紀	子

(日吉メディアセンター)

1. WWW 広報委員会発足の経緯

1995年2月、NTG (Network Technology Group) の尽力により日吉図書館内のネットワーク上に WWW サーバ (NCSA httpd) が立上り、一時的な日吉キャンパス、及び日吉図書館のホームページが作られたことにより、ホームページを作成する環境が整えられた。ちょうどこの頃、WW 上で日吉図書館の使い方を多くの人に紹介し、必要な時にすぐ参照できたら便利ではないだろうか、という発想により、日吉図書館の石原が、既に紙媒体で作成されている「日吉図書館利用ガイド」「図書館利用案内シリーズ」を原稿として html 化し、情報の項目毎に整理しリンクをはった利用案内 WWW 版を試作した。これはテキストと静止画像のみの単純な構造の利用ガイドであった。内容は塾生、教職員、通信教育部生、塾員など慶應義塾に所属する人に対し図書館のサービスと利用方法を紹介し、あわせて外部の利用者に対して日吉図書館での相互協力のルールを記述していた。同年3月に完成したこのページは、事務長の了承を得た後、6月に図書館ホームページ上で試験的に公開を開始した。

このようにして始まった図書館のページであるが、計算室を含めた「日吉メディアセンター」全体の情報を発信する必要性や、ページの維持管理

等の問題等からこれを組織的に運用してゆくことが日吉メディアセンター内で認識され、同年秋に日吉メディアセンター運営会議の決定により、WWW 広報委員会 (以下、委員会) が発足した。

その運営会議において、ホームページに載せる文章は必ず所属長がチェックすることや、実際の作業はプログラム相談員が暫定的に行なうが、本来業務に差障りのないよう配慮すること等が合わせて確認された。

現在、委員会のメンバーは図書館、計算室の各部署のスタッフで構成されている。

2. 委員会の活動

1995年11月に発足以来、1996年2月9日までに5回の会合を開き、活動方針、ホームページの構成・内容について検討を行い、以降、5月中旬まで、実際の作成作業が学生スタッフを中心に行われ、これに対し委員がチェック後、更に修正して、基本的な部分が一応出来上がった。次いで日吉メディアセンター運営会議の承認を得て、6月に正式公開した。(ただし、出来上がったものは主に図書館関係部門で、計算室関係部門は引き続き、7月まで細部の作成を行った。)

公開後は、月1回のペースで委員会の会合を開き、活動報告を行うと共に、内容、問題点の検討

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

を行っている。同時に、更改の必要な項目の継続作業、図書館のフロアマップのクリックابل化、資料の探しかたページの作成、図書館4階の教員用フロアの利用案内、英語ページの作成を順次行っている。

3. ホームページの内容・構成

3.1 日吉メディアセンター (図1参照)

a. 日吉メディアセンター所長挨拶

日吉メディアセンター永田守男所長による日吉メディアセンターの簡単な紹介と挨拶を掲載。

b. What's New

利用者に対するお知らせ等の情報を掲載。最新のものから順に並んでいる。

c. 日吉メディアセンターの沿革・組織

日吉メディアセンターの沿革と現状および組織図を掲載。

d. 計算室

計算室のトップページへリンク。

e. 図書館

図書館のトップページへリンク。

f. 日吉ギャラリー

図書館および計算室に展示してあるニューヨーク・メトロポリタン美術館ポスター29作品の目録を掲載。

g. アンケートにご協力ください

今後のページ作りのためのアンケートを実施。定期的に集計し、その結果をふまえて今後のページ作成の参考にする。

3.2 計算室 (図2参照)

a. 所在地

日吉キャンパスのマップ (一部) を掲載し、計算室の位置を示す。

b. 日吉計算室からのお知らせ

計算室の休室予定および計算機の稼働停止予定、ネットワーク (ワークステーション) 関連情報、大型汎用機関連情報、その他の情報を掲載。

c. 利用案内

計算室の利用資格、利用時間、利用できるコンピュータとその利用方法および利用申請、各種利用の手引き、プログラム相談コーナーや利用説明会などその他のサービスについて掲載。

d. フロアガイド

計算室 (第7校舎地下1階) のフロアマップを掲載。クリックابلになっていて、各部屋やコーナーを説明している。

e. 情報処理教育室

情報処理教育室の概要と情報処理教育関連開設科目の案内を掲載。

f. スタッフ

計算室 (情報システムサービス担当) および

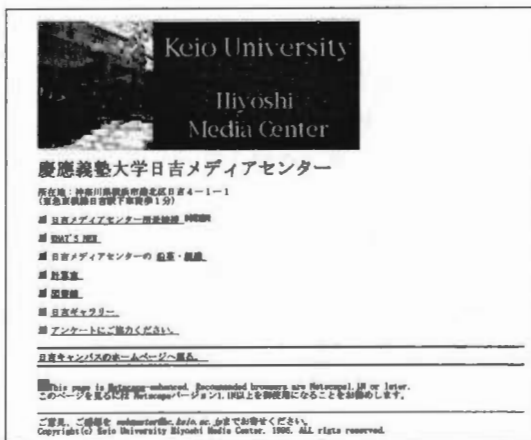


図 1



図 2

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

情報処理教育室のスタッフ紹介。

3.3 図書館(図3参照)

a. INFORMATION (お知らせ)

日吉図書館で毎月定期的に発行している「Information」(紙媒体)のWWW版。図書館で行なわれる催し物の日程や、展示企画、スタッフからのお知らせなどを掲載。バックナンバーも参照できる。更新頻度は紙媒体のものに合わ



図 3

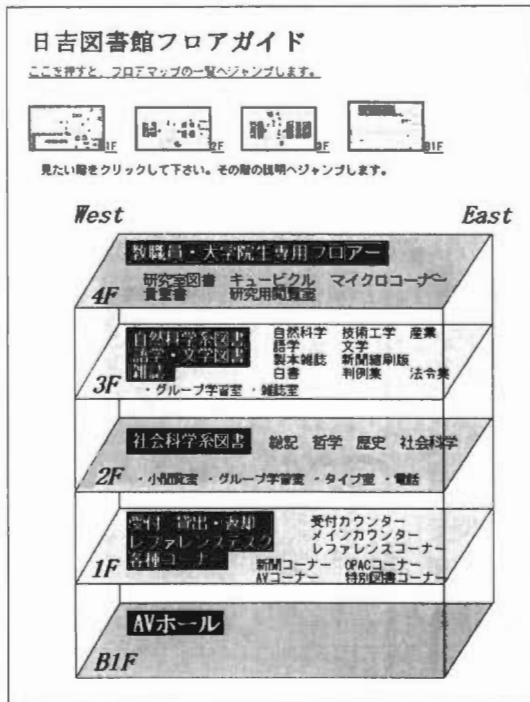


図 4

せて、月1回。

b. 利用案内(塾内用)

塾生と教職員を対象とした図書館利用案内。図書館資料の種類とその利用法、資料の貸出・返却、レファレンスサービス等の各種サービスについて案内している。構成は、これまで石原が試験的に作成していたホームページをそのまま採用し、内容を現状に即すよう訂正した。原稿は、閲覧業務関連は資料サービス担当に、レファレンス業務関連は情報メディアサービス担当にそれぞれ依頼した。

c. フロアガイド(図4参照)

フロア毎のコレクションや施設が一目で分かる館全体のフロアマップ。各フロアの図をクリックすると、より詳しい案内図が表示される。

d. 外部利用者の日吉図書館利用方法

幅広い層のネットワーク・ユーザを想定し、学外者向けの図書館利用案内の項目を設けた。
 ・公共図書館、大学図書館、各種研究所資料室等に勤務する利用者について…

日吉図書館と各図書館間での相互協ルールについて紹介。所蔵調査、文献複写依頼等のサービスの申込方法について記述している。

・一般の方の日吉図書館の利用について…

日吉図書館は、一定の条件の下で一般に対しても公開している。その主な対象である塾員(慶應義塾大学の卒業生等のこと)と、他大学等に在籍する研究者について、入館の手続き等について案内している。

e. 塾内の他のキャンパスの図書館

公開されている他キャンパスの図書館にリンクされていて、各々の図書館ホームページにアクセスできる。

3.4 レイアウト・構成

レイアウトの構築には、公開されている他の機関のホームページを参考にした。検討した結果、次のような点に留意することにした。

- ◎1ページの長さはなるべく短くし、端的に要点のみを記述すること。
- ◎テキスト主体の構成にすることにより、ネット

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

ワーク回線の転送速度が低くても、快適に利用できる画面作りをする。ただし、文字の羅列が続くと、読みにくく疲れてしまうため、写真や図表などを適宜入れ、説明をより分かりやすいものにする。

- ◎基本的に図書館と計算室のメニュー構成は同一のものとし、各々にばらつきが生じないようにする。ページの体裁もなるべく同じフォーマットで作成する。
- ◎外部へのポインタは他地区メディアセンターのみに留める。その他のサイトへのリンクは、今後検討することとなった。

4. 構築作業

実際のホームページ作成作業は、学生による作成スタッフを中心に行われた。作成スタッフは計算室のプログラム相談員の中から WWW に関心および知識があり、ページ完成後も継続して作成、修正にあたる学部生3名に依頼した。

委員会でページの構成、内容について検討された後、作成スタッフとの打ち合わせを行い、2月中旬より作業を開始した。作成スタッフは原則として計算室に出勤する体制をとった。

作成ページの委員によるチェック作業は3月下旬より開始し、修正等について電子メールにより連絡を取り合った。また、ページレイアウトや細かい修正など、直接指示した方が良い部分については委員と作成スタッフによる共同作業を行っている。

5月中旬、計算室で WWW サーバが立ち上がり、図書館のサーバから日吉キャンパスのページ、日吉メディアセンターのページを移行、計算室のページを載せ、基本部分が完成した。6月の正式公開後は毎月の INFORMATION 改変作業を作成スタッフが行っており、新サービスの開始等の必要な情報の追加が発生した時点では、作成スタッフまたは、委員がページの更新を行っている。今後の作業内容、作業量によって、作成スタッフの採用について検討していく。

5. 日吉ホームページの今後の展開

現時点でのホームページは、主に学部生を対象としたメディアセンターの利用に関する説明となっている。次のステップとしてまず第一にあげられるのは、教員や大学院生を対象とする研究者向けの利用案内の作成である。現実的な問題として、実際にネットワークを利用できる環境を持っているのは学部生よりも大学院生や教員である。そういう意味では、単なる利用案内にとどまらず、メディアセンターの情報をホームページを用いて研究者向けに発信していくことも重要な意味を持つと考えている。これには研究者専用のフロアである図書館4階部分の説明、ならびに研究者向けに行っているサービス、また研究室図書などの購入に関する説明など、多くのものが考えられる。

また、単に塾内向けの広報というだけでなく、世界に対して情報を発信できるのが、ホームページの大きな利点である。この利点を生かし、慶應義塾や日吉メディアセンターについて、海外へもアピールしていくことは、「世界の慶應義塾」を標榜していく上でも大事なことである。そのためには、英語版のホームページについても作成し、充実させていく必要があると考えている。

将来的には利用案内だけでなく、ホームページ上でもっと様々なサービス展開を行いたいと考えているが、塾内での WWW ブラウザが使用できる環境もまだ十全ではなく、今後のこのようなハード面、ソフト面の両方からの拡充に努力していかなければならないだろう。

日吉メディアセンターホームページ

<http://www.hc.keio.ac.jp/MC/index.ja.html>

日吉計算室トップページ

<http://www.hc.keio.ac.jp/MC/CC/index-jp.html>

日吉図書館トップページ

<http://www.lib.hc.keio.ac.jp/Library/Wel-come-j.html>

FirstSearch サービスの導入

ひろ た ことし
廣 田 とし子

(湘南藤沢メディアセンター課長)

1. はじめに

慶應義塾大学図書館におけるデータベース・サービスは、医学・理工学系の図書館におけるMEDLINEやJOISなどの導入から始まった。初期の頃は、特定の端末からモデムを介し、公衆回線を経由して外部業者のデータベースにアクセスするという形が一般的であった。料金体系が時間による従量制であり、コマンドも複雑であったため、熟練した係員が効果的な検索を代行で行い、かかった料金を利用者に課金するという形態でサービスが提供された。医学・理工学系で定着したこのサービスが人文・社会科学系のキャンパスでかなり遅れてスタートしたのは、利用に耐える廉価なデータベースがなかったためである。因みに三田で1988年に導入された最初のデータベースは、日経ニューステレコンとDIALOGだった。

1990年代に入ると、多くの主要な文献データベースがCD-ROMの形態で出版されるようになった。利用者自身が検索でき、しかも無料で利用できるCD-ROMのサービスは瞬く間に利用者間に定着していった。三田メディアセンターでは、昨年からは増加するCD-ROMの利用に対応するために、図書館内のLANを通じて、利用の多いCD-ROMをネットワーク環境で提供している。しかし、これはあくまで図書館内に限定されたサービスである。

世はネットワーク時代である。慶應義塾情報スーパーハイウェイの整備後、利用者が求めているのは、どこからでも(キャンパスのみならず自宅からでも)いつでも利用のできるデータベース・サービスである。もはや図書館内に限定さ

れたサービスでは古いのである。FirstSearchは、そのような状況下に現れた。本稿では、このFirstSearchの導入の経緯、運用の方法について簡単に紹介したい。

2. FirstSearch の概要

FirstSearchは図書目録データベースの作成で歴史のある米国のOCLC社が提供する総合データベースサービスである。このサービスには次のような特徴がある。

- ① OCLCが自身で構築している膨大な図書の書誌所蔵データベースに加え、MLA、MEDLINE、INSPEC等、約50種類の定評のある書誌索引データベースが含まれている。
- ② それらの異なるデータベースを同一の検索方式で検索することができ、初心者でもなじみやすいシステムになっている。
- ③ データベースは米国オハイオ州にあるOCLCのコンピュータに搭載されており、インターネットを経由してtelnetあるいはWWWを用いて接続し、利用することができる。
- ④ 従って、図書館側でデータベースの更新やシステムの更新などを行う必要がない。
- ⑤ CD-ROMで販売されるものよりも更新頻度が高く、より新しい情報を入手することができる。
- ⑥ インターネット経由で提供されるサービスであり、図書館外(研究室、自宅、パソコン室など)からのアクセスが可能である。また、同時に複数のアクセスが可能である。
- ⑦ サービス時間が非常に長い。(平日は一日23

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

時間サービスである。)

- ⑧ 検索した結果の文献を入手したい場合に参考になるような所蔵館情報（主に米国内）が見られる。また、民間の文献提供者（主に米国内）にその場でオンラインオーダーし、オンライン・FAX・郵送など望む形で原報を受け取ることがきる。

3. モニター

FirstSearch サービスが日本に上陸したのは1995年春のことである。その直後、国内エージェントである紀伊國屋書店は、キャンペーンのために一定期間に限り、サービスの無料提供を行った。三田メディアセンターではこの機会を利用して、エンドユーザからモニターを募り、反応を見ることにした。そして、約二か月間のモニター実施後、アンケート調査を行った。以下はその結果である。

- ① モニター期間：1995年5月20日～7月20日
 ② モニター人数：学部生12, 院生42, 教員21
 モニター募集はポスターと電子メールを利用して行った。また、モニター開始後メーリングリストを開設し、Q & Aなどに利用した。このメーリングリストは、FirstSearch 正式導入後の今も、サービス利用者へのニュースを配布する手段として利用し続けている。
 ③ モニター結果：利用者からは大きな手応えがあった。図書館外から利用できる、しかもほと

んど一日中利用できる、豊富な多数のデータベースを同一のインターフェースで利用できるという点で非常に評判が良かった。また、「無料で」「低価格で」提供してほしいという要望が圧倒的に多かった。このモニター結果をもとに正式導入のアクションをとることになった。

4. 正式導入

ほぼ同時期に塾内の3つのキャンパスでトライアルを行い、個別に正式契約へと動きだしていた。しかし、結果的には2つの理由から全塾で契約することになった。

第一に、これはインターネット経由のサービスであり、どこからでも自由に利用できるような仕組みをつくるためには一括契約しておいた方が便利であったこと。

第二の理由は費用の問題であった。FirstSearchの料金体系はデータベースの種類により、ブロック購入と年間購入に分かれている。ブロック購入とは回数券と同じで、あらかじめ購入した回数まで検索を行うことができる。年間購入は、年間固定料金であり、使えば使う程単価が安くなる。各地区で予想される利用状況とこれらの料金体系を考慮すると、1つのキャンパスで契約するよりも

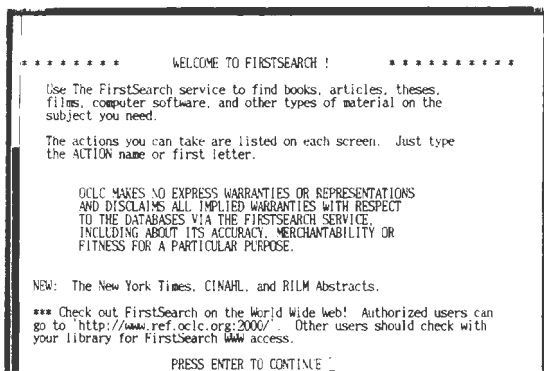


図1 FirstSearch 初期画面 (telnet 接続)

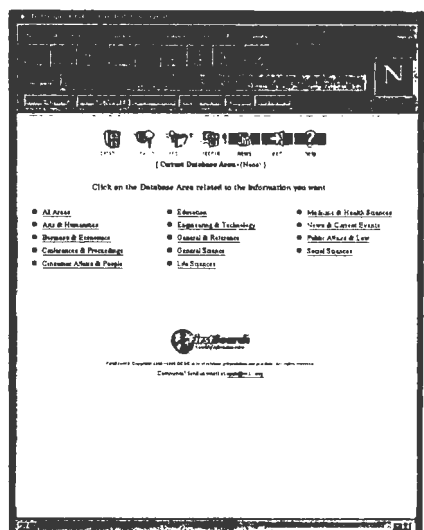


図2 FirstSearch 初期画面 (WWW版)

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

5つのキャンパスで契約した方が割安になるというメリットがあった。そこで、予算規模の大きい三田が多めに分担金を負担することによって、全塾的に見て効率よくかつ最大限のメリットが受けられるようにするという考えから一括契約することに落ち着いたのである。

5. 運用

正式契約後、各地区の窓口担当者によるワーキンググループが結成され、運用について以下のような申合せが行われた。

- ① FirstSearch にかかる経費はメディアセンターの負担とし、利用者に対して、検索料金の課金は行わない。
- ② 慶應義塾情報スーパーハイウェイ経由のサービスとし、塾内のワークステーションにアカウントを持っている者なら誰でも利用できる。
- ③ 利用者が、FirstSearch を利用するためのID、パスワードを知らなくても接続できるような仕組みを構築する。

正式契約後、ID とパスワードが付与されるが、FirstSearch 利用の際には認証のためにこれらの人力が求められる。しかし、多数の利用者にパスワードを明かすことはセキュリティ保持の観点から望ましくない。また、慶應の予算内で所属者に対して無料で提供されるサービスであるから、学外からの不法な利用は避けなければならない。一方、慶應の所属者ならばどこからでも利用できるという自由度は残したい。そこで、キャンパス内に学内のマシンからのログインのみを受け付けるゲートウェイマシンを設置し、そこにFirstSearchへの自動ログインの仕組みを持たせることにした。この仕組みによって慶應の所属者は世界中どこにいても、そこから慶應義塾内のワークステーションにtelnetすることによってFirstSearchのサービスを受けることができる。WWW版に対しても同様の仕組みが構築されている。そして、各図書館のホームページからこれらの仕組みへリンクが張られており、利用者はこのリンク

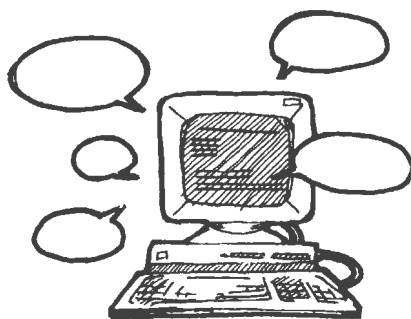
をたどるだけでFirstSearchのウェルカムスクリーン(図1, 図2)にたどり着くことができるようになっている。

本サービスの導入は、メーリングリストやホームページを通じて広報された。また、利用支援の一環として、紀伊國屋書店の協力により、講習会を実施するとともに、電子メールによる質問窓口も開設している。

6. 今後の課題

FirstSearchの導入によって、図書館に行かなくてもデータベース・サービスが受けられるようになった。研究室からでも自宅からでもネットワークを通じてサービスを受けることができる。FirstSearchに含まれるオンラインオーダーのサービスを利用して、利用者自身が自分で原報入手することもできるようになった。利用者は、FirstSearch一つでかなりサービスの幅が広がったように感じているようだ。

この一年でOPACのネットワークアクセスが実現し、FirstSearch, Current Contents, DIALOGなど、ネットワーク経由で利用できるデータベースサービスが始まった。また、各地区メディアセンターのホームページも立ち上がりつつある。ネットワークを利用した情報サービスは決して十分とは言えないが、どうにかスタートすることができたようだ。今後は、さらにデータベースメニューを充実させるとともに、Z39.50などのプロトコルに準拠した検索サービスの統合や、現物調達へのシステム構築が課題となろう。



法図連・法資研・そして最近の法情報検索

うえ はら じゅん こ
上 原 順 子

(三田メディアセンター係主任)

1. はじめに

三田メディアセンター・総合資料室に配属され、法学部図書委員会の事務局を担当するようになってから参加し始めた法律図書館連絡会。あれから早くも8年が過ぎようとしている。ごく一部の人々を除いては耳慣れないであろう「法律図書館連絡会」(略称=法図連、以下法図連と呼ぶ)について紹介するとともにプライベートな研究会である法律資料研究会、さらに最近の法情報検索にも簡単に触れてみたい。

2. 法律図書館連絡会とその活動

昭和30年に産声をあげた法図連の当初の名称は「法律関係資料連絡会」。法律資料を所蔵する図書館同士が業務上の連携共同をはかるとともに、関係分野における図書館技術の向上、法律図書館的機能の充実発展を期することを目的とする機関として発足した。参加館は法務図書館、国立国会図書館、最高裁図書館の3館であった。同年、内閣法制局図書館、衆議院法制局図書館、衆議院法制局図書館が加盟。翌年、東京大学法学部研究室が加盟した。

その後、アジア経済研究所、中央大学日本比較法研究所、明治大学法学部資料センター、早稲田大学比較法研究所、一橋大学法学部資料室、専修大学図書館神田分館等が続々と加盟。機関名を「法律図書館連絡会」と改めた昭和52年には、慶應義塾大学三田情報センター(当時)も法政大学法学部資料室、立教大学法学部図書室等とともに加盟している。

昭和57年には大阪地区の参加館が急増、その後も徐々に加盟する館が増加し、平成7年11月現在、62館もが加盟する大機関に至った。

この機関の特色としては、① 大学図書館、弁護士会図書館、最高裁図書館等、共通項は法律資料のみという業種を超えた図書館が集まった機関である。② 大学図書館の場合、法学部に所属する独立した資料室・図書室が多い。ということが挙げられるであろう。

ところで、その活動であるが、毎年開催される総会の他に研修会・講座関連では春にフレッシュマンを対象に行われる新人講座、秋にはより幅広く中級向けの法律資料に関する研修会が行われている。機関紙である「法図連通信」並びに「法図連ニューズレター」も発行されている。また、平成5年には日本法の資料に関する入門書の最新版ともいべき「法律図書館ユーザーズマニュアル」が発行された。今後は更に多様な、そしてきめ細かい研修会の開催や法学資料解題書の発行が望まれる。

3. 法律資料研究会

そして、法図連の会員のなかでより深く法律資料を知りたいという有志が定期的集まるようになったのが法律資料研究会(略称=法資研、以下法資研と呼ぶ)である。会員は東京近郊の大学図書館員、書店社員等が中心であり、プライベートな会のため、勤務時間外に毎月1回程度月例会を開催している。毎回の参加者は10名程度、年度が変わる毎にテーマを決めレファレンス事例を持ち寄り、日本法、外国法等の資料集を作成した

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

りしている。また、毎月会員のために「法資研ニュース」を発行するほか、これまでのまとまった成果としては日本法の第一次資料集である「日本法の第一次資料一覧——判例の調べかたを中心に」の作成・発行が挙げられる。

さて、最近法資研で取り上げられたテーマに「インターネットを利用した法情報の検索」があるが、次にその検索手段を代表的な検索例を挙げながら、主に米国のもを中心に紹介する。

4. 法情報をインターネットで

現在、法令や判例情報、政府情報、立法過程情報、国際機関情報、図書・雑誌などの電子出版物などの法情報がインターネット上でアクセスできる。ナビゲイトする手段としては、アクセス先のダイレクトリーである「イエローページ」と呼ばれる冊子体を利用する他に、インターネット上での検索システムである「サーチエンジン」機能を利用する方法がある。

法情報のイエローページとしてはまず、Heel, Erick の “*The Legal list : Internet desk reference, law-related resources on the Internet and elsewhere*” (Lawyers Pub.) が著名であるが、他に参考文献の(6)～(9)にも紹介したので参照して頂きたい。また、サーチエンジンでは URL: <http://www.yahoo.com> や URL: <http://www.lycos.com> また、URL: <http://www.findlaw.com> などがある。

4.1 法令情報(米国)

アメリカ合衆国の連邦法令は、インターネット上最も公開が進んだもののひとつである。しかし、現在有料の商業データベースを除き、インターネットで検索できる法令情報は現行法令のみで過去のある時点での法令情報の検索システムはないようである。議会での法案提出、その後の法案の動向、あるいは法案そのものや議事録等の議会情報を調査するものとしては、Legi-Slate や連邦議会下院のサイトなどがある。議会情報については有料のサービスが多いが、(Legi-Slate も一部

のメニューは有料) 無料で検索できるものとしては、上記の他に US Government Printing Office で提供されるサイトや議会図書館の THOMAS (URL: <http://thomas.loc.gov/>) などがある。図1は THOMAS にアクセスした例である。また、連邦の現行法律が各分野毎に編集された法律集に “U. S. Code” があるが、いくつかのサイト (例えば URL: <http://www.pls.com:8001/his/usc.html>) で検索でき、全文データファイルもある。

4.2 判例情報(米国)

現在、判例情報は米国においても量はわずかであるが、無料で公開されている。連邦レベルでは最高裁判例が HERMES によって検索できる。HERMES とは米国最高裁判例を非営利団体によって公開するプロジェクトである。このプロジェクトにより、最新の最高裁判決に関しては高価な商業データベースである “LEXIS” や “WESTLAW” に頼らずに判決日の数日後に知ることができるようになった。その他に、一部の巡回裁判所、州レベルの裁判所でも公開されているものがある。

4.3 国際機関

国際機関も国連や EU など主要な機関で各種の情報を提供しており、条約や協定の全文が入手できるものもある。図2は国連のサイト (URL: <http://www.undcp.org/unlinks.html>) からアクセスし、リンクしている国連の下部機関のひとつ、ILO の画面である。

4.4 図書、電子ジャーナル

図書については法律関係ではまだ数が少ないようだが、古い資料ではマグナカルタが大英図書館のサイト上で見ることができる。また、電子ジャーナルでは、“*Web Journal of Current Legal Issues*” や “*E Law (Murdoch University Electronic Journal of Law)*” などがある。

5. まとめ

以上、米国を中心にほんの一部を紹介したが、

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

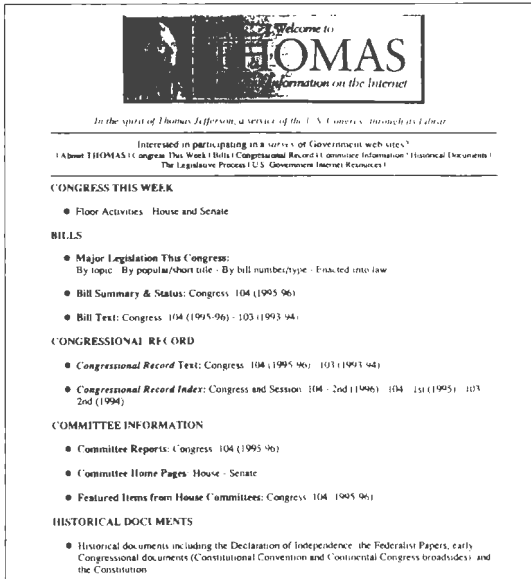


図1 Thomas のホームページ

他の国でもかなり公開されているものがある。また、日本においてもまだわずかであるが、総務庁が作成した有料のデータベース「現行法令データベース」などがあり、これは NACSIS-IR で検索できる。しかし、米国のように法案の審議経過か

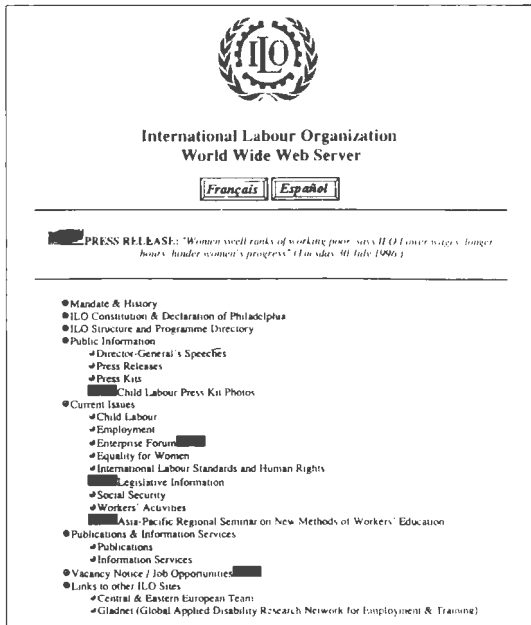


図2 ILO のホームページ

ら制定された法律、議事録なども即座に提供される状況とは程遠い現在、法制度の違いはあるにしても国レベルでの体制作りとシステムの構築が待たれる。

6. おわりに

日々めまぐるしく情報が氾濫し、情報化社会といわれるようになって久しいが、法情報の世界も例外ではない。これら法情報にアクセスするための環境作りとユーザーへの情報提供と共に、同時に既存の資料も同様に有効な手段で利用に供するのが我々図書館員の使命である。そのためには法図連の活動をより活性化し、個々の会員のレベルも上げる必要がある。また、個人的には日頃から法律図書館員同士の交流を図りつつ、有用な情報交換を行うため、法資研などに今後も積極的に参加していきたいと思う。

参考文献

- 1) “法律図書館連絡会 1991/92 年度活動報告 附: 法律図書館連絡会のあゆみ” 東京 (1992)
- 2) 指宿信. “インターネットにおける法情報の現状とその利用”. ①～⑤ 法律時報. Vol. 67, No. 9 p. 132-137 (1995), Vol. 67, No. 10 p. 112-116 (1995), Vol. 67, No. 11 p. 101-105 (1995), Vol. 67, No. 12 p. 96-101 (1995), Vol. 68, No. 1 p. 104-109 (1996)
- 3) 指宿信. “インターネットで外国法 第1回 ガイダンス: インターネットと法学”. 法学セミナー. no. 497, p. 122-125 (1996)
- 4) 田中規久雄. “インターネットで外国法 第2回 アメリカ法 (公法系)”. 法学セミナー. no. 498, p. 124-127 (1996)
- 5) 木下泰. “インターネットで外国法 第3回 アメリカ法 (私法系)”. 法学セミナー. no. 499, p. 122-125 (1996)
- 6) MacLeod, D. “The Internet guide for the legal researcher”. Infosources Pub. (1995)
- 7) Rosenfeld, L. “The Internet Compendium: Subject guides to social sciences, business and law resources” Neal-Schuman Pub. (1995)
- 8) Buegess, G. A. “The Lawyer's guide to the Internet” American Bar Association (1995)
- 9) Evans, James “Law on the net” Nolo Press (1995)

電子図書館について

きの した かず ひこ
木 下 和 彦

(日吉メディアセンター係主任)

1. はじめに

最近、「電子図書館」という言葉をあちこちで聞くようになってきた。電子図書館という発想自体は、1945年にヴァンネヴァー・ブッシュが唱えた Memex にまで遡ることができるほどであり、決して新しいものではない。しかし、アメリカのゴア副大統領による情報スーパーハイウェイ構想の提言や、ネットワーク上の情報流通システムである WWW を効果的に使うための Mosaic というブラウザが発表されたことに端を発するインターネットブームにより、この「電子図書館」という発想も、いまや現実のものとして受け止められるようになってきている。

現在では、国内外を問わず多くの組織や団体などにより電子図書館プロジェクトが行われているが、本稿では、そうした電子図書館プロジェクトのいくつかを紹介し、それらをもとに「電子図書館」とはどのようなものであるかを考察する。

2. 電子図書館に関する最近の状況

「電子図書館」を英語でいう場合、いくつかの呼び方がある。以前は“Electronic library”と呼ぶことが多かったが、最近では“Digital library”という呼び方をすることが多いようである（時には“Virtual library”という呼び方をしているものもある）。前者は日本でも英語そのままに「エレクトロニック・ライブラリー」という言い方をすることがあるが、これは主に従来の図書館業務が電子化された図書館を指していたのに対し、後者はむしろ、図書館の蔵書自体までもが電子化さ

れた図書館を指す。日本語で「電子図書館」という場合は、この両者のどちらの場合にも使われているが、最近では日本でも、後者を指す場合が多いようである。

その「電子図書館」をめぐる最近の状況について、表1に、非常におおまかであるが、代表的な電子図書館プロジェクトならびに関連事項を年代順に示した。

3. 国内における電子図書館

(1) 電子図書館 Ariadne

Ariadne は、電子図書館研究会（長尾眞ほか）が1990年から研究し、実際のシステム構築にあたっては富士通(株)が協力を行ったものである。その後、BBCC の B-ISDN 実験計画に組み込まれる形で1994年に公開実験が行われている。

Ariadne の前提になっている電子図書館の姿とは、以下のようなものである。

- テキスト自体が電子化されていること
- テキスト以外に映像や音楽などの情報をも電子化されていること
- これら電子化された情報は、すべてハイパーテキストの形で組織化されていること
- 利用者が知りたいことのみを検索し、知ることができるようになってきていること
- 付箋をつけたり、参考図書をそばに広げたりすることができるような、読書支援機能を備えていること
- コンピュータネットワークに結合されており、個人の端末から世界中のどこの図書館の情報でも区別なく利用できるようになってい

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

ること

実際に Ariadne が持っている機能は、以下のものである。

1. 図書・論文検索
2. 世界の図書館
3. 専門図書館

表1 電子図書館関連年表

1988	CMU (Carnegie Mellon University, USA) が Mercury Electronic Library プロジェクトを開始
1990.4	SFC (湘南藤沢キャンパス) 開設
1991?	EU (European Union) による Telematics for Libraries 計画開始
1991.3	Elsevier Science Publication が University of Michigan (USA) などと TULIP プロジェクトを開始
1992?	De Montfort University (UK) が Electronic Library プロジェクトを開始
1993	NCSA (National Center for Supercomputing Applications) が Mosaic を発表
1993.9	情報スーパーハイウェイ構想発表
1994.6	国内図書館 OPAC リスト ver.1.0 (インターネット上で利用できる OPAC のリスト) がインターネット上で公開される
1994.7	千葉大が WWW ベースの OPAC 公開
1994.7	BBCC (新世代通信網実験協議会) による B-ISDN アプリケーション実験開始 (電子図書館含む)
1994.8	デジタル図書館ワークショップ開催 (第1回 於図書館情報大学)
1994.9	NSF (National Science Foundation, USA) による電子図書館プロジェクト助成
1995.2	G7 による電子図書館プロジェクト開始
1995.2	学術情報センターが NACSIS-ELS 試行サービス開始
1995.5	奈良先端科学技術大学院大学が、電子図書館プロジェクトを開始 (曼陀羅図書館)
1995.9	IPA (情報処理振興事業協会) による電子図書館プロジェクト開始

4. 催し物案内

5. 大学案内

このうち、特筆すべきなのは検索機能である。Ariadne では検索機能として、書誌情報検索、ハイパーテキスト検索、キーワード検索、階層構造検索、質問文検索の5種類を提供することによって、様々な方法による検索が可能となっている。

なお、この Ariadne で用意した情報は以下の通りである。

- ・文字情報：図書8冊，論文2編
- ・画像情報：89枚（解説文つき）
- ・動画像：3点
- ・二次情報：書誌・目次情報1,500冊分
表紙データ300冊分

(2) NACSIS-ELS

NACSIS-ELS は、学術情報センターが1994年12月から試験サービスを公開しているものである。^{注1)}

NACSIS-ELS の前提は、学術情報流通のために一次文献の蓄積と提供機能を電子的に行うことである。これは学術情報センターが、従来から研究者のために大学図書館のネットワーク化や学術情報のデータベース形成をおこなってきたことの延長として位置づけることができる。

NACSIS-ELS の特徴は、文字情報をテキストとしてではなく、ページ情報（画像情報）としてとらえていることである。検索はテキストで行っても、結果としてたどりつく文献は、雑誌のページそのままのイメージ（画像）で見ることができる。これは過渡的な形態であると考えられるが、雑誌の表紙画像、あるいは目次情報から漠然と論文を眺めることもできるという点において、他の電子図書館システムと趣を異にする。また、学術情報（論文）のみを対象とすることから、従来図書館が行ってきた文献複写業務をこのシステム上で行うことが可能となるようにも考えられている。

NACSIS-ELS では、(社) 情報処理学会、(社) 電子情報通信学会、(社) 電気学会の出版物をデータベース化している。

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

(3) 曼陀羅図書館

曼陀羅図書館は、奈良先端科学技術大学院大学 (NAIST) が附属図書館という位置づけで、1995年から構築を開始した電子図書館プロジェクトである。

曼陀羅図書館のコンセプトとしては以下の3つがあげられている。

1. メディアセンター

図書、雑誌、CD-ROM、音声、画像など、資料の種別を意識することなく利用が可能なこと

2. 居ながら図書館

研究室や自宅など、自分の居る所から図書館の情報を利用できること

3. 24時間図書館

開館時間を気にせず、24時間いつでも図書館を利用できること

これらのコンセプトは、NAISTが大学院しか持たない大学であるため、研究者の日常的な活動を支援するために図書館が必然的にもつべき機能、という発想から出てきたものと考えられる。

具体的な曼陀羅図書館の機能としては、以下のものが考えられている。

- 一次情報の電子化
- 個人用ワークステーションからの検索・閲覧
- 外部データベースとの接続による文献検索
- 学術情報の外部への提供・情報発信
- 時代に適合した図書館機能の研究開発

曼陀羅図書館プロジェクトは1995年から3年計画で整備される予定であり、現在のところはまだ結果がでていない。一次情報の電子化の過程で著作権の問題などもあり、実現に向けては相当の困難が予想されるが、今後の進捗に注目したいプロジェクトである。

(4) IPA 電子図書館プロジェクト

IPAによる電子図書館プロジェクトは、その実施のためのセンターが湘南藤沢キャンパス内に設置され、また去る7月に Medianet 研究会で見学が行われるなど、慶應義塾大学と関係が深いプロジェクトである。

これは通産省の高度情報化プログラムの一環として、IPAが実施主体として1995年から3年間の予定で「パイロット電子図書館システム実証実験」として行われているものである。なお、これによる技術的成果は、国立国会図書館関西館(仮称)における電子図書館機能に継承される。

ここでの前提となる電子図書館の機能としては、次のようなものがあげられている。

- さまざまな形態の情報が容易に提供・利用可能となること
- 世界中に分散する情報への迅速なアクセスが可能となること
- 必要とする情報を用意かつ的確に入手できること
- 個人の知的活動を支援する知識ベースとして活用できること
- 高度な表示機能を有すること
- 個人からの容易な情報発信を可能とすること

実際のプロジェクトは総合蔵書目録ネットワーク実証実験と電子図書館システム実証実験の2つに分けられ、それぞれ次のような内容が盛り込まれている。

(i) 総合蔵書目録ネットワーク実証実験

これは、全国の図書館が持つ書誌データや所蔵データを統合し、統一的に利用可能とするためのプロジェクトである。大学図書館では学術情報センターがすでに同様のシステムを構築しているが、このプロジェクトは公立図書館を対象とし、国立国会図書館をはじめとして全国の25の図書館が参加している。

このプロジェクトには、学術情報センターなどの従来の総合目録ネットワークとは異なる点がある。その大きなものとして、参加館が各自使用している図書館システムやMARCデータを生かし、それを改造・変換することで総合目録を構築しようとするという点があげられる。

また、このプロジェクトの目標としては以下のものが掲げられている。

1. 書誌同定・書誌情報の統合のための効果的な手法の研究

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

2. 効果的な索引ファイルの構築方法の研究
3. 使いやすいユーザインタフェースの研究
4. 今後の図書館間の図書の相互貸借の仕組みの模索

すでに参加館からは、約700万件に及ぶ書誌データの提供を受けており、蓄積したデータを提供する実験も行われている。

(ii) 電子図書館システム実証実験

先のプロジェクトがどちらかといえば、図書館のネットワーク化の実験であるのに対し、こちらはその名前の通り、電子図書館の実現に伴う技術的な問題などを実験・研究するためのプロジェクトである。

本プロジェクトでは、電子図書館にとって必要となる大量・多様の情報の蓄積、分類、整理、および高度な情報検索・利用の技術の研究ならびに評価を行う。

実際には、国立国会図書館の所蔵資料で著作権の問題が発生しない資料、ならびに出版社から提供を受けた資料などを、その資料の特性にあった形でデータベース化し、また情報検索・提示の手段を提供する。ここで扱う資料の特性には下記のものがある。

1. 書誌情報
2. 目次・目録情報
3. 全文情報
4. 画像情報

またこのプロジェクトで行われる実験には、それぞれユーザレベル、ライブラリアンレベル、データレベル、設計レベル、要素技術レベルと、電子図書館に関わる様々な立場のレベルからの評価ポイントが示されており、多角的な評価を行うことができるようになっている。

4. 海外における電子図書館

先に掲げた年表を見てもわかる通り、海外、特に欧米諸国では日本よりも早くから電子図書館に対する取り組みがなされている。ここでは、その中でも特にその動向が注目されている、アメリカ

のNSF/ARPA/NASAによる電子図書館に関する研究助成について触れておく。

この研究助成は、1994年9月に発表されたもので、大学を中心とする6つの研究プロジェクトに対して、4年間で総額2,440万ドル（1ドル=100円としても24億4,000万円）が供給されるものである。以下に、提供される大学を中心に、それぞれのプロジェクトについて簡単に説明する。

(1) Carnegie Mellon University / Informedia Digital Video Library Project

これは、マルチメディアを用いた電子図書館のあり方について研究をおこなうプロジェクトである。実際には画像情報（ビデオ）を中心とし、その蓄積、検索技術の研究などが行われる。

(2) University of California, Berkeley / Electronic Environmental Library Project

ここでは環境計画や地理情報に関する電子図書館を構築する。環境や地理に関する情報は、地図や衛星からのデータ、写真など、テキスト以外にも様々な形態が存在するため、これを効率よく利用するための手法の研究が行われる。

(3) University of California, Santa Barbara / Alexandria Digital Library Project

これも地図・画像情報を扱うが、このプロジェクトでは、空間的に参照づけられた情報（Spatially-referenced information）に関する情報の扱い方について研究される。具体的には、図書館のすべての情報が、地球上の一つ以上の地域と関係づけられているような状況で、それを利用者が統合的に利用するための手法について研究される。

(4) University of Michigan / Digital Library Project

このプロジェクトでは、大規模化、かつ速いペースで変化していく電子図書館について、利用者にとって容易に、しかも的確に利用することができる環境を構築するための研究を行う。

(5) Stanford University / Integrated Digital Libraries Project

ここでは、共同利用性についての研究がテーマである。具体的には、さまざまなサービスや情報

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

資源を統一して利用することができるようにするための、“InfoBus”というプロトコルを用いたシステムについて研究される。

(6) University of Illinois / Digital Library Initiative Project

これは、インターネット上に多く存在する資源を、一つの統合された電子図書館として検索できるようにするための基盤構築に関する研究である。研究のための資源には科学文献が使用される。

5. 電子図書館の機能

電子図書館とひとくちに言っても、今回取り上げた事例を見ればわかるように、その目的はさまざまであり、そのためにアプローチの手法も多岐に渡っている。それでも、基本的な機能についてはある程度の共通性がみられる。ここでは、そうした機能について、現状の問題などにも触れながら説明を試みてみようと思う。

(1) 一次情報の電子的蓄積

電子図書館が存在するための大前提とでもいべき機能である。しかし何でもやみくもに蓄積すればよいというわけではなく、またそのためにクリアしなければならない問題も多い。現在問題となっている主要なものとしては、例えば以下のものがあげられる。

・利用を踏まえた蓄積方法の模索

文書をテキストとして扱うか、それとも画像として扱うか、といったことから、蓄積する情報をどのように関連付けて利用できるようにするか、といった問題まで、これだけでも様々な問題を抱えている。

・ネットワーク上に分散して蓄積された情報をいかにして扱うか

ネットワークに象徴されるように、現在でもデータは分散して蓄積することが当たり前になっているが、電子図書館ではこうした情報を一度に大量に扱うことになる。それを分散環境の中で効果的に統合して扱うためには

どのようにしたらよいかという問題は、レスポンスの向上とも関係するために、重要な問題である。

・著作権の問題

上に掲げた2点は技術的な問題であるのに対し、これは非常に現実的な問題である。電子図書館で扱われる情報は従来のものとは異なり、不特定多数の利用者が利用しやすく、またコピーしやすいという側面をもっている。そのため、著作権についても、従来とは異なった対応がせまられている。法整備の問題も含め、電子化、ネットワーク化が広まっていく中で著作権処理をどのように行うべきか、現時点ではほとんど解答がでていない。

・誰が、どのように情報を電子化するか

現在のプロジェクトでは、現在紙の形で存在する情報を電子化することが行われているが、このようにして情報を蓄積していく場合、大量な情報をいかに効率よく電子化していくかといったことも重要である。

最近では、特に学術雑誌の領域において、オンラインジャーナルを発行するところが増えてきているようである。電子図書館を構築する上では、このような情報の収集ならびに提供といったことも効果的な蓄積を行っていく上での第一歩といえるだろう。

(2) 多様な検索手段の提供

電子図書館においては、利用者のレベルや扱う情報の種類や形態にあった検索手段の提供が不可欠である。せっかく蓄積した情報も、探せなければ意味がない。現在研究されている検索手段には次のようなものがある。

- ・書誌からの検索
- ・本文からの検索
- ・目次からの検索
- ・画像からの検索
- ・ハイパーリンクによる検索

書誌や本文からの検索は、従来型の検索方法といえよう。これらはさらに、利用者のレベルに応じてメニュー方式とコマンド方式の2種類に分け

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

ることができる。目次からの検索や、画像からの検索は、検索対象を最初から限定せずに、得たい情報を画面に表示される目次情報や画像情報からたどって検索する方法である。ハイパーリンク検索は、WWW に代表されるように、関連づけられた情報を渡りあるくことで求める情報にたどりつく方法である。

このように検索手段が多様化する一方で、多数存在する電子図書館を統一的に利用しようという試みもなされている。その手法として現在主流になりつつあるのは、Z39.50 というプロトコルを用いたものである。これは、ネットワークにおける情報検索のための標準化されたプロトコルである。全ての電子図書館がこのような統一されたプロトコルを受け入れられるようにデザインされれば、利用者は一通りの検索方法を覚えるだけで、世界中の電子図書館を検索することができるようになる。現在の図書館システムでも、この Z39.50 を取り入れたものが増えてきている。

(3) 情報の効果的な提供

得られた情報をそのまま提供するだけでは、せっかくコンピュータを用いる意味も半減する。得られた情報を効果的に利用者に提供したり、また利用者の求めに応じて加工することができるような仕組みを持つことも、電子図書館に求められている。具体的な提供方法は、その電子図書館の目的や扱う情報などによって異なるため、様々な実験がおこなわれている状況である。将来的には、この機能をつきつめていくと、“個人用レファレンス・ライブラリアン”とでもいえるような、個人レベルでの電子図書館といったものが考えられるが、そこに到達するためには人工知能の技術が不可欠であり、実現には相当の時間を要するであろう。

(4) ネットワーク

現在でも OPAC をネットワーク上で公開するのが当たり前になってきているように、電子図書館もネットワークを通じて利用できなければならない。インターネットを用いるのが現在では一般的であり、この点については将来的にも変わらな

いと思われる。しかし、ネットワークに用いられる技術としては B-ISDN や ATM など、より大量に、より速く情報を送ることができるものが出現しており、これをシステムに組み込むための研究がなされている。

また、ネットワークを用いるということは、世界中からのアクセスが可能になるということでもあるが、その際、言語（文字）の壁をどうやって乗り越えるかという問題もある。海外の情報にアクセスする場合には英語を使えばよいが、こちらから情報発信をするためには、海外でも日本語が読めるような仕組みを作ることも必要になる。日本からの情報発進が世界中から求められる中、電子図書館においてはこういう点についても考慮しておく必要がある。

6. 電子図書館における「図書館」

電子図書館が現実のものとなったとき、図書館や、図書館員の役割といったものはどうなってしまうのだろうか。ここではそういった問題について触れておきたい。

図書館が情報の提供をすることはもちろんだが、公立図書館や大学図書館においては、勉強をする場所としての図書館という、もう一つの側面がある。研究者や学生が、全員自宅や研究室から電子図書館を利用できるような環境を持つことになるとは限らない。現在でも図書館の方が集中して勉強できるという人もいる。このような利用者のために、情報が電子化されても、それを利用するための場所としての図書館は必要になるであろう。

また、図書館員の役割という点では、電子図書館においても情報の収集・蓄積・整理・提供といった一連の手続きが必要である限り、これに関わる人員が必要となることはいうまでもない。しかし、現在でも図書館業務がシステム化されるに従ってコンピュータを使用する度合いが高まっているのと同じように、今後、図書館員にはコンピュータを使う技術がさらに必要とされるように

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

なるであろう。ただし、システムの内部（管理・運用）にまでどれだけ関わらなければならないか、という点については今後の電子化の状況に沿いながら検討していくべき課題となるだろう。

コンピュータが普及しはじめた時期に、「ペーパーレス社会」という言葉が持てはやされたのは裏腹に、実際には紙の消費量が増えた、という話がある。電子図書館になったら従来型の図書館は不要になる、と思われがちだが、それでも紙媒体の資料の重要性といったものは、将来的にも損なわれることはないのではないだろうか。しかし、「紙」には紙の、「電子」には電子の良さがることを図書館員が常に認識し、利用者が求める情報に応じた媒体の選択や、提供の方法といったことを、これからはもっと真剣に考えていかないと、電子図書館の波に飲まれてしまうことになるかもしれない。

7. 慶應義塾と電子図書館

電子図書館に対する取り組みは、今後も増加していくであろう。これを一朝一夕に構築することは困難であるが、現在行われているネットワークを用いたサービスなども、電子図書館への第一歩としてとらえることはできるのではないだろうか。そこで、蛇足ながら現在メディアセンターで行っている、こうしたサービスをまとめておく。

• FirstSearch サービス

インターネットを用いた二次情報の検索サービスである。実際にはアメリカの OCLC が提供しており、そちらに接続する必要があるが、慶應義塾内のワークステーションから接続しなければ利用することができないような仕組みになっている。

従来は DIALOG などのように、電話回線を用いて、一回の利用ごとに料金が課金されていたのに比べ、ネットワークを用い、その利用については包括的に扱うことで、料金の問題をクリアしていこうとする意味でも、このサービスは新しい試みの一例ということが

できるであろう。

• Current Contents サービス

前述の FirstSearch と同じようなものであるが、前者が外部のデータベースにアクセスするのに対し、こちらは塾内（理工学メディアセンター）に CD-ROM サーバを置いて利用に供するという意味で、仕組みが違うというレベルではあるが、もう一つの新しいサービスの形態ということができる。

• OPAC

いまや OPAC をネットワークを通じて提供するのとはごく当たり前のことである。KOSMOS のシステムとしての問題から、決して十分な利用ができるわけではないが、それでもネットワークを通じて OPAC を利用できるようになったことは、電子図書館への第一歩といえるだろう。

• オンラインジャーナル

利用者が自由にネットワークにアクセスするための環境が、塾内においては今だ不十分であるため、まだ一般的ではないが、理工学部や SFC ではオンラインジャーナルの購読をはじめている。これらは冊子体とセットでの提供が条件であるなど、まだ実験的要素が強いが、将来的に塾内のネットワーク環境が充実してくれば、オンラインジャーナルに対する利用の要望も増えてくることが予想される。

また、HUMI プロジェクトによって研究が開始されたばかりだが、稀観書分析装置も、一次情報の電子化ならびにマルチメディアを駆使した利用という点では、電子図書館の一形態として捉えることができるであろう。

8. おわりに

電子図書館については、今回取り上げたものが全てでなく、毎日のように新しい取り組みがなされているといっても過言ではない。国立大学でも、次期図書館システムについて電子図書館を視

特集 ネットワークを利用したサービスの展開

野に収めた検討が行われている。またこれからの教育・研究にネットワークは欠かせないものとなってくるが、その中で電子図書館の占める位置は重要なものとなるであろう。理想的な電子図書館が出現するまでには克服すべき問題も多く、まだまだ時間が必要だと感じているが、今後もこうした動きについては注目が必要である。

参考文献

2. 電子図書館における最近の状況
 - 1) 兼松芳之. “電子図書館どこへゆく?” 現代の図書館. vol.33, no. 4, p. 274-279 (1995)
 - 2) 林賢之. “国内 OPAC リストの作成と情報共有” 情報の科学と技術. vol. 46, no. 1, p. 53-56 (1995)
 - 3) 田畑孝一. “デジタル図書館とその研究動向” 現代の図書館. vol. 33, no. 4, p. 250-255 (1995)
 - 4) 永田治樹. “大学におけるデジタル図書館: 英国並びにオランダの大学図書館での試み” デジタル図書館. no. 5, p. 19-28 (1995)
3. 国内における電子図書館
 - (1) 電子図書館 Ariadne
 - 1) 長尾眞ほか. “電子図書館 Ariadne の開発(1): システム設計の方針” 情報管理. vol. 38, no. 3, p. 191-206 (1995)
 - 2) 古寺重実, 松本宏. “学研都市における B-ISDN 実験について” デジタル図書館. no. 3, p. 20-23 (1995)
 - 3) 石川徹也. “フルテキスト・データ検索機能の検討” デジタル図書館. no. 3, p. 24-34 (1995)
 - (2) NACSIS-ELS
 - 1) 安達淳. “電子図書館成立の条件” デジタル図書館. no. 1, p. 23-27 (1995)
 - 2) 安達淳. “電子図書館システムについて” 文部時報. no. 1421, p. 20-23 (1995)
 - (3) 曼陀羅図書館
 - 1) 今井正和. “曼陀羅図書館プロジェクトと奈良先端科学技術大学院大学附属電子図書館” 現代の図書館. vol. 33, no. 4, p. 256-263 (1995)
 - 2) 嵩忠雄. “電子図書館の構築一事例紹介” 教育と情報. no. 452, p. 43-47 (1996)
 - (4) IPA 電子図書館プロジェクト
 - 1) 堀口光. “「パイロット電子図書館システム事業」の概要” 図書館雑誌. vol. 89, no. 2, p. 109-112 (1995)
 - 2) 藤原達也, 田屋裕之. “パイロット電子図書館システム実証実験について” デジタル図書館. no. 5, p. 29-32 (1995)
- 3) 富川直毅. “パイロット電子図書館プロジェクトについて” 情報の科学と技術. vol. 46, no. 1, p. 41-50 (1996)
- 4) 田屋裕之. “パイロット電子図書館について” 図書館雑誌. vol. 90, no. 2, p. 105-108 (1996)
- 5) 田屋裕之. “パイロット電子図書館実証実験システム” 情報管理. vol. 38, no. 11, p. 986-995 (1996)
4. 海外における電子図書館
 - 1) Carnegie Mellon University-Informedia Digital Video Library Project.
<http://fuzine.mt.cs.cmu.edu/im/>
 - 2) University of California, Berkeley-Electronic Environmental Library Project.
<http://elib.cs.berkeley.edu/>
 - 3) University of California, Santa Barbara-Alexandria Project.
<http://alexandria.sdc.ucsb.edu/>
 - 4) University of Michigan-Digital Library Project.
<http://sil.sil.umich.edu/UMDL/HomePage.html>
 - 5) Stanford University-Integrated Digital Libraries Project.
<http://www.diglib.stanford.edu/diglib/>
 - 6) University of Illinois-Digital Library Initiative Project.
<http://www.grainger.uiuc.edu/dli/>
5. 電子図書館の機能
 - 1) 桂啓壯. “OPACの変容: 欧米の動向を中心に” 現代の図書館. vol. 33, no. 4, p. 264-273 (1995)
 - 2) 安齊宏幸. “Z39.50 の日本語による簡単なお案内”
<http://www-student.ulis.ac.jp/~anzai/z3950.html>
 - 3) Langner, Irene, 橋爪宏達. “インターネットによる学術情報出版と情報選択” デジタル図書館. no. 7, p. 60-89 (1996)
6. 電子図書館における「図書館」の問題
 - 1) Birdsall, William F. “電子図書館の神話” (根本彰ほか訳) 勁草書房 (1996)
 - 2) 山本毅雄. “電子図書館員の仕事とその道具” デジタル図書館. no. 1, p. 29-37 (1994)
8. おわりに
 - 1) 国立大学図書館協議会図書館情報システム特別委員会次期電算化システム専門委員会報告.
<http://www.libra.titech.ac.jp/next/>

注 1) 正式サービスが1997年4月から予定されている。

<スタッフルーム>

Thank you! 育児休業法

やま だ まさ こ
山 田 雅 子

「復帰はいつから?」「来年の秋の予定。」「元気な赤ちゃんを産んでくださいね。」そんな言葉に送られながらもまた一人の仲間が産休に入った。こんな会話を耳にするたびに私はふと、あの頃を思い出す。

1991年夏、私の産後休暇はあと半月ほどで終わろうとしていた。しかし体調はもどらず、また安心して子供を預けられる保育園もみつからないままだった。不安な気持ちでいっぱいだった。日頃の私とは別人のように、この時ばかりは毎日のようにしくしく泣いていた。絵に書いたようなマトニティーブルーであった。

そんなある日人事課からの突然の電話があった。「ご存知だと思いますが来年度から育児休業法が施行されることが正式に決まりました。塾でも検討しましたところ、現在すでに該当される方が何人かいらっしゃるので前倒しで取得できることにしました。山田さんはどうしますか?」

働く女性の子育てを支援する目的で「育児休業法」が制定されたのは1992年4月であった。それは私にとって初めての、生活に身近に関わる法律であった。

人事課からのありがたい申し出に、私は間髪をいれず「ぜひお願いします。」と答えた。心底救われる思いがした。それから約半年の間赤ん坊を抱きながら会う人ごとに「それが実はね、育児休業法のおかげでね……」と説明し、育休取得第一号として育児に専念する日々を送った。

こうして子供のいる生活にも慣れてきた。また家の近くの保育園も確保することができ一年後に仕事に戻ることができた。「予定外にこんなに長く休んでしまっただんなに迷惑をかけてしまったことか。」そんな気持ちで復帰した私を職場の仲間たちは「首を長くして待っていたわよ。」という温かい言葉で迎えてくれた。今でも本当に感謝している。一方で私より先に出産した人たちは誰もが8週間で復帰し

ていたという事実にあらためて頭の下がる思いがした。こうして私の育児休職期間は終わった。しかしこの育児休業法が私のその後の仕事にも思わぬ変化を与えてくれることになった。

当時勤務していた三田メディアセンター総合資料室は、ご存知の通り社会科学の専門資料室だ。「育児休業法」という関心テーマを持って向かう書架は新鮮に見えた。「六法全書には何年版から載るのか。」「法規集のルーズリーフはもう差し替えられているのだろうか。」「労働法関係の雑誌といえば……。」と次々と思いをめぐらせる。新しいCD-ROMを試してみる時のお決まりのキーワードにもなった。これまでも利用者のテーマに応じて文献を探すことは行っていたが、自分自身のテーマとなると関心の度合いがだいぶちがう。利用者を理解する早道は自分が利用者になってみる、という諸先輩のことばをようやく実感をもって経験した。これまでの自分の不熱心さを反省もせず、「好きな人ができるとすべてが輝いてみえるっていうけれど、好きな法律ができると資料も輝いて見えるのね。」と思いつながら仕事をしているのだからのん気なところは相変わらずだ。

このように育児休業法は私にとって身近な法律というばかりでなく、とても感慨深いものであり、制定にむけて尽力したであろう労働省の関係各位や法案を可決した議員の方々にお礼を言いたいぐらいなのだが、もしそういう機会があったらわがままな私としてはぜひつけ加えて申し上げたいことがある。育児休業法の条文によると、育児休業は「労働者が、この法律に定めるところにより、その一歳に満たない子を養育するためにする休業をいう。」と定義されている。この通りに休んだ私は満一歳の誕生日が復職の日となった。こどもの「初めての誕生日」はどの家庭にとって最も高く位置づけられる家族の記念日の一つであることはまちがいない。「初めての誕生日」が復職の日にならないようもう一日だけ追加してくれたら、さらに魅力ある法律になるのではなからうか。この文章を書きながらも「……ただし労働者の希望により一歳の誕生日当日を休業として追加することができる。」なんていうのはどうかな、などと思いをめぐらせている私は罰当たりだろうか。

(日吉メディアセンター係主任)

<ティールーム>

「容器は出来た、今度は中身だ」

とせのぶゆき
声瀬信之

慶應に着任して以来もう3年半が過ぎました。着任する前、SFCの噂がすごくて、きっと日吉キャンパスもネットワーク環境が充実していると期待していました。来て見てびっくり、計算センターには3台しかワークステーションがなくて、研究室にLANが張られるなど夢のまた夢でした。しかし、94年の夏には私の研究室にLANの配線が来て、自分のワークステーションがインターネットに接続でき、その後の塾内の情報関連の投資は皆さんご存じの通り、すべての研究室に情報コンセントが設置されるに至っております。塾外を見ても、この1年半くらい前から始まるインターネットの爆発的な浸透があり、最初のうちgopherで情報発信をしていたのが、今度はMosaicさらにはNetscapeという具合です。今度は、Javaですか。ちょっと、40近くのおじさん数学者にはついていけないですね？（そのうち、日吉で経済学部の学生と「自由研究セミナー」でJavaを勉強しようかな？と思っています。）この3年間のメディアセンター関係者のご苦労にここで感謝したいと思っています。技術的な蓄積、文化としての存在などすべてを総合した意味でのネットワーク社会は相当の時間を経て浸透すべきものであったと思います。実際、塾外では様々な経験のもとに現在に至っています。ところが、塾内では政策的に「ネットワーク構築」が急がれたために、様々な軋轢があったと想像します（私も、波風を立てた一人かもしれません）。

ネットワークが整備されたところで教育の本質は全く変わらないと確信しています。こう書くと非常に保守的な感じがしますね。でも、ネットワークを使うことによって、分野によっては非常に効果をあげることができると確信しております。例えば、経済学部では学生に様々なデータ分析をさせます。今までは、そのデータを紙で配って、プログラム電

卓、あるいはパソコンに打ち込ませていました（体力勝負の面があったかもしれません）、いまやUNIXのアカウントをもっている学生に対しては、コピーコマンド一発です。いずれ、学生すべてがWWWにアクセス可能になると、serverにデータ、プログラムをおけば、学生の自習、レポートの題材配布が可能になります。

計算機を教える場合も同様です。着任すぐに、awkの簡単なプログラムを学ぶ「自由研究」を経済学部で担当しました。そのころは、情けないことにサンプルプログラムを配布するのが印刷物で、学生がそれを打ち込んで解説したり、改変させたりしていました。次の年、perlを「自由研究」でとりあげましたが、UNIX上でやることができたので、様々な配布物を簡単に学生に与えることができ、より高度に時間を使ったと思います。3年目には、Cの講義をUNIXで教えました。今度は講義の要約をgopherに載せて復習に役立てることができました。数学でも、Mathematicaというソフトウェアがあって、グラフを描くとか、ミクロ経済の無差別曲線などを描画させることができます。それも、3次元的に。将来的には、数学の補助教材をMathematica、Gnuplotで作ってWWW上において学生の自習などにつかったり、塾の体制を整えば、授業中に学生に見せることができるようにしたいと思っています。

塾内のネットワークの骨組みは出来ました。インターネットにパソコンをつないでメールを出したり（最初みんなはまります）、Netscapeを使って世界の情報が自由に手に入る、わいわいという時期もそろそろ終えて、今後は学生のサービスにいかにかを使うかを真剣に考える時期にきていると思います。教員はネットワーク上に載る教材の準備ですが、これは相当の時間が必要となると思います。それと関連することですが、メディアセンターに課せられた課題の一つとして、研究、教育を支援するためのCD-ROM serverの整備があると思います。様々な辞書、辞典、indexなどのCD-ROMが提供されますので、それを全塾的に共有化する必要があると思います。いずれにしても、中身はこれから、みんなが時間をかけて試行錯誤を繰り返しながら入れていくことになります。

(経済学部助教授)

山中資料センターの利用状況

三田メディアセンター

むら かみ とくたろう
村上 篤太郎

(三田メディアセンター課長代理)

1. はじめに

平成6年8月から資料提供サービスを開始した山中資料センターが2年を経過した。この間に湘南藤沢地区を除く各地区メディアセンターから資料が移管され、第1棟分としての収容能力50万冊に達したのは、まだ間もない平成8年7月のことであった。この山中資料センターは、慶應義塾大学メディアネットの保存書庫として位置づけられており、すでに「MediaNet」No.2(1994)、No.3(1995)でもいくつか報告されている。本稿は、三田メディアセンター(以下、三田)におけるその利用状況について報告をする。

2. 運用状況

三田では山中資料センターが完成した平成6年7月に、1961年以前の洋図書を中心に約10万冊を第一次移管した。これらは1961年以前に図書館予算で購入した洋図書資料で、現在の分類ツールとして使用しているNDCと異なる分類体系を使用しているところから「旧分類」と呼ばれる資料であった。次いで平成8年3月に一部を除いて1959年以前の洋雑誌約3,000タイトル、7.5万冊を第二次移管した。

利用者がこれらの資料を取り寄せる方法は、2種類に大別される。一つは図書または雑誌の現物の取り寄せであり、もう一つは複写の取り寄せである。利用者はKOSMOS OPAC、あるいは目

録カードで検索した結果、山中資料センターに所蔵していることが判明した場合、メインカウンターに行って現物、あるいは複写取り寄せの所定の申込用紙に書誌事項などを記入し、申し込むことができる。あるいはレファレンスカウンターや雑誌カウンターにおいて山中資料センターにあることを教えてもらった場合などは、そのカウンターに備えてある所定の申込用紙に記入した後、メインカウンターに持参して申し込むことができる。メインカウンターでは、カウンター担当者が12時半と15時半とに複写申込を、14時半には現物申込をそれぞれ山中資料センターにFAXで依頼している。利用者は午前中に申し込んだ依頼は15時以降に、12時半から15時半までに申し込んだ依頼は翌日の10時以降に、15時半から閉館までに申し込んだ依頼は翌日の15時以降に、それぞれ料金と引き換え(1枚10円)で受け取ることができる。一方、現物申込の結果は、山中資料センターから宅配便で届く。利用者は14時半までに申し込んだ依頼は2日後の開館時以降に、14時半から閉館までに申し込んだ依頼は3日後の開館時以降に、それぞれ利用者が閲覧、あるいは貸出ができる。利用の終わった現物資料は、2週間に1度まとめて宅配便で返送している。なお、現物の取り寄せに関しては利用者に送料などの金銭的負担をかけていない。

こうした山中資料センターの利用実績は、昨年度1年間の現物取り寄せが533件/769冊であった。また今年度7月末までの現物取り寄せは312件/531冊であり、これは昨年の同時期と比較すると約1.4倍件/1.6倍冊に急増している。これは第二次移管の洋雑誌分に対する現物取り寄せが反映されているからである。さらに今年度から開始された複写取り寄せは7月末までに128件であり、現時点における利用状況全体からみれば約70%を現物取り寄せが占めている。

3. 今後の課題

情報にアクセスする際のアプローチとして、引

用文献、記事索引、主題目録などを利用して閲覧したい文献が判明している具体的な要求の場合と、ブラウジングを行いながら関連した文献を探したいといった漠然とした要求の場合とがある。山中資料センターへの資料アクセスは、現地に行つてのブラウジングはおよそ現実的ではないため、前者の要求に対応しなければならない。すなわち保存書庫への資料移管ということは、移管した資料へのアクセス整備が不可欠である。それは、資料のデジタル情報整備であり、基本としては書誌情報検索ができることである。三田ではこの整備が当面の課題の一つとして挙げられている。そしてその次の課題として、図書で言えば目次単位の情報、雑誌で言えば論文単位の情報、などのように検索対象単位の多様化の実現化である。こうして利用者の具体的な要求がさらに確定されれば、より一層 Document Delivery が活性化され、利用者にとって山中資料センターが、より身近な存在に感じられることになるだろう。

日吉メディアセンター

こ ばら ま ゆみ
小 原 真 弓

(日吉メディアセンター)

日吉メディアセンターでは、さる7月17日～19日に山中資料センターへの搬入作業を行い、作業終了直後の7月22日より、山中資料センターからの資料取り寄せサービスを開始した。

1. 山中資料センターへ移管した資料の内容

図書(和書) 約18,300冊

藤山記念図書館時代(～1985.3)から地下書庫に別置されていた、主として昭和40(1965)年以前の和書

図書(洋書) 約1,700冊

研究室所蔵のレファレンス・ブック

で、図書館4階から地下1階書庫に別置されていたもの

図書(和・洋書) 約200冊

生物学研究室から図書館に移管された図書のうち、同研究室の了承を得たもの

雑誌(和雑誌) 約3,500冊

4階に配置されていた研究室所蔵の和雑誌で、図書館所蔵分と重複している35タイトルについて、1995年発行分までのもの

※表示冊数は製本単位。ただし一部仮製本ならびに未製本のものを含む。

なお、図書についてはOPAC上で、山中資料センターに置かれていることがわかるようになっている。

2. 取り寄せサービスについて

図書館1階メインカウンターで、所定の手続きを取れば、貸出または館内閲覧ができる。

取り寄せのためにかかる時間

平日：午前8時45分～午後2時30分

土曜：午前8時45分～午後12時30分

の間に受け付けたもの

→翌開館日の午後から利用可能

上記の時間以降、閉館までに受け付けたもの

→翌々開館日の午後から利用可能

※ 教職員に限り、希望に応じて午後2時30分以降でも午後4時までの申込みなら、翌開館日の利用に間に合うように至急扱いをしている。但し、土曜日は至急扱いは受け付けていない。(その際、山中資料センターに電話をして間に合うかどうかを確認)

3. 運用状況

現物の取り寄せは宅急便で、翌日の午前中に届けられるので、午後には利用者が貸出・閲覧でき

MediaNet レポート

る。また、利用が終わった資料は月に1度（月初）まとめて宅急便で返送している。

複写サービスは、雑誌については、図書館所蔵の重複分のみを山中資料センターに移管しているため、現在でも図書館内で利用することができる。図書の複写依頼については、すべて現物を取り寄せてメディアセンターで複写・発送することになっている。従って、日吉から直接山中資料センターへの複写の依頼はない。尚、現在までで複写の依頼はまだない。

利用状況は、現物取り寄せサービスを開始してから約1ヵ月間で、48件54冊（内雑誌1件1冊）の申込みがあった。1日平均約1～2件である。

4. 終わりに

日吉は実際の利用は図書のみになるので、他地区と比べると利用頻度がずっと低いのではないだろうか。しかし、サービスの開始が学部生の前期末試験終了後で、夏休み開始と同時だったにもかかわらず、予想していたよりも利用が多かった。授業が始まるともう少し利用が増えることが予想される。

サービス開始からまだ日が浅いこともあり、利用者に対してのサービスの上での大きな問題は今のところ出ていない。利用者の信頼を得続けるためには、確実性を持って運用することが肝要である。今後の課題としては、今後何を山中資料センターへ移管するか、今回移管した後の地下書庫の空きスペースの活用方法等、山中資料センターを含む書庫管理と蔵書再編成の問題が挙げられる。



理工学メディアセンター

三 谷 三 恵 子
(理工学メディアセンター)

1. はじめに

理工学メディアセンター（以下、理工学 MC）は、1996年3月、山中資料センターに蔵書の一部を移管し、4月よりファクシミリと宅配便による資料の提供サービスを開始した。以下に、移管資料の選定から利用状況までを報告する。

2. 移管資料の選定

移管資料の選定にあたっては、山中資料センターの収容量を第1に考慮し、理工学 MC で種々検討した結果、1965年以前の一般雑誌、ロシア語雑誌、古い年代の図書を候補にあげた。その中で、矢上キャンパスに残す資料を選ぶために、教員にアンケートを実施し、雑誌171タイトル、図書53冊を残すことになった。

移管資料のうち、医学メディアセンターとの重複資料の調整を図るため、洋雑誌は「早慶欧文雑誌総合目録（1988）」、和雑誌は「慶応義塾大学和文雑誌総合リスト」をもとに、医学メディアセンターとの重複調査を行い、KOSMOSでも1冊ずつ重複調査を行い、さらに山中資料センターのスタッフが現物の重複チェックを行った。その結果、より状態の良い製本雑誌を残して重複本約2,200冊を廃棄した。この作業と同時に、医学メディアセンターで欠号となっている部分に、理工学 MC の製本雑誌を移管し、所蔵を完全巻にした。その結果、最終的に理工学 MC から山中資料センターに移管した資料は、1965年までに刊行された雑誌955タイトル、27,446冊、1993年までに刊行されたロシア語雑誌455タイトル、10,247冊、旧分類図書および藤山工業図書約4,400冊で

ある。

3. 運用方法

山中資料センターへ移管した資料の利用は、現物の取り寄せサービスと複写サービスとがあり、現物の取り寄せサービスを利用できるのは塾内の利用者のみで、配送には宅配便を利用しており、利用者の手元に届くまで1両日ほど要する。複写サービスは、塾外利用者も利用が可能であり、ファクシミリを利用しているので、原則的には利用者に当日のうちに提供できるようになっている。但し、午後の申込みの場合は翌日になることもある。

山中資料センターへの複写申込みは、以前は所有地区経由で申込みと複写物の送付を行っていたが、理工学 MC の資料移管後、見直しが行われ、手続きの煩雑さと処理の速さを考慮し、塾内各センターから直接やりとりができるようになった。

山中資料センターに移管した資料のうち約5割は、日本科学技術情報センター（以下 JICST、現在は科学技術振興事業団）から寄贈された雑誌であるため、JICST からの複写依頼については、移管後、JICST と山中資料センターの間で直接やりとりを行うようになった。

移管資料の検索は、図書、雑誌とも理工学 MC 内と同じ条件で整備している。和書、雑誌は OPAC で検索可能であり、洋書は、現在はカード目録だが KOSMOS の遡及入力の対象としているので、将来的には OPAC で検索できるようになる予定である。

4. 利用状況

1996年4月から7月までの利用状況を表1に示す。資料を移管してからわずか4ヵ月しか経っていないためデータとして見るには不十分ではあるが、理工学分野1965年以前の資料が思ったよりも利用されていることに驚いた。他大学・一般企業

の複写依頼件数は、月平均で理工学部所属者の約2倍の申込みがあり、JICST からは、月平均で理工学部所属者の約6倍の複写依頼があった。理工学 MC の資料は、広く塾外諸機関からも利用されていることが証明された。

5. おわりに

今回の資料移管作業を終えて感じたことは、KOSMOS 導入後、初めて雑誌の蔵書点検を行ったこともあり、予想以上にデータの入力ミスがあったり、データと資料との食い違いなどがあったことである。現在では、データの修正や未登録資料の新規登録などのデータの整備をほぼ完了した。今後は、データのメンテナンスを常に行い最良の状態を資料を利用者に提供できるようにしていきたい。

表1 山中資料センターへの依頼件数
(1996年4～7月)

依頼者	依頼内容	4月	5月	6月	7月	合計
理工学部 (教職員・ 学生)	複写	39	51	40	41	171
	現物取り寄せ	9	8	3	2	22
他大学・ 一般企業	複写	97	60	93	87	337
JICST	複写	273	225	301	292	1,091
合計		418	344	437	422	1,621



基礎医学特論「医学文献情報概説」を担当して

いちこ みどり
さか い ゆきこ
わだ た こういち
ひら おき かよこ
さとう 藤かず たか
佐藤 和 貴

(医学メディアセンター)

1. はじめに

医学メディアセンターでは従来からキャンパス内の医学部学生、看護短期大学学生の図書館利用に対して積極的にかかわりを持ってきた。例えば、医学部学生に対しては、信濃町キャンパスに進級した3年生のために、教務課が実施しているオリエンテーションの一環として図書館の利用法などの説明を行なっている。看護短期大学の新生生に対しても同様である。また、医学部を卒業して各科に配属されたフレッシュマンに対しては、希望に応じて、各種の索引誌、抄録誌の使い方や検索機器の使用法の指導を行なっている。

オリエンテーションや利用説明会から一歩踏み込んだ授業や講義については、看護短期大学の前身である医学部附属厚生女子学院時代に、「文献利用法」という講義の経験がある。この授業は、1973年から短大に昇格するまでの15年にわたり、特別講義として図書館職員が担当した。内容は、医学情報の特徴、文献検索のための図書館利用法、医学分野の主要な情報源、看護文献の探し方、論文の読み方と書き方、文献の整理の方法などが主なものであった。短大となってからも「看護研究」という授業の中で、図書館の利用法、文献収集についての講義を毎年2時間(90分を2回)の枠で行い、講師は看護短期大学図書室を担当した経験者が受け持つことになっている。

このような実績を積み重ねてきた一方、医学部の学生に対する授業という面では、なかなかその

チャンスを得ることができなかった。唯一、メディアセンター職員が医学部の授業に関わったものとしては、「EEP (Early Exposure Project = 早期体験学習)」という医学部1年生の必修科目への協力をあげることができる。¹⁾ このEEPの目的は、医学部や病院を支える職場を訪問し経験を共有するというものであったため、情報サービス担当業務に限らず、図書館を支える資料サービス担当や総務業務を含めた図書館全体の仕事の見学や説明を行っていた。したがって、今回のように、医学図書館員の知識や技術を生かして、職員が主体的に授業を計画し、行うということは初めての経験であった。

2. 授業を担当することになった経緯

1995年夏、基礎医学特論に関する小委員会委員長から授業の担当についての打診があり、11月に正式な依頼文書を受領した。この文書には、「画一的な知識と技術の詰め込みに偏りがちであった従来の医学部教育を反省」し、「人間性の豊かな、個性をもった学生を育てる最初の試みにしたい」といった授業への抱負が記され、さらに基本方針と方法を説明する資料がつけられていた。「基礎医学特論」は全部で31のテーマが設けられ(表1参照)、このうちの一つを担当することになったわけである。さらに、授業内容に関する3ページにわたる調査票を返送するように指示されていた。

表1 1996年度 基礎医学特論のテーマ

番号	テーマ
1	TOPICS IN MEDICAL ENGLISH
2	医学文献情報概説
3	インターネットによる情報解析入門
4	コンピュータ画像シュミレーション入門
5	科学する心ー発見の瞬間(1)
6	科学する心ー発見の瞬間(2)
7	実験形態学
8	細胞の文化、成熟、器官形成の分子メカニズムとその異常
9	シグナル伝達の分子機構と発癌
10	生化学・分子生化学研究の最近の動向
11	視覚生理学の古典を読む
12	神経生物化学
13	免疫学の転換点
14	ヒト免疫不全ウイルス感染症
15	ゲノム解析と遺伝子医学
16	遺伝子導入動物
17	International Healthー分子寄生虫学から国際医療協力まで
18	血管系に関連する最近の話題から
19	法医学の実際と研究
20	現代の環境と健康リスク
21	心と脳
22	心身の健康学
23	ライフステージとストレス状況
24	看護学入門
25	医療システムー入門編ー
26	医療システムー解析編ー
27	生命倫理学入門
28	社会福祉と医療
29	医療と文明(疫病と災害の人類史)
30	社会と医療危機(救急災害医療)
31	他の学部および本学部付設の研究所の設置する授業科目

調査票の内容は、担当者名、授業テーマ名の他に、1. 授業方法(講義, セミ, 演習, その他), 2. 授業場所, 3. 授業回数, 4. 受け入れられる学生数といった事務的な事柄と、授業スケジュール表(担当者, サブテーマを含む)およびシラバス原稿(750字程度)からなっていた。調査票提出の段階では、授業テーマ名を「医学文献情報概説」とし、1. 授業方法は講義と演習とすること、2. 教室は資料や機材の運搬に都合の良い図書館2階の第一会議室とすること、3. 授業回数は2コマ(180分)を5回とすること、4. 受講生の定員は20名とすることにした。授業スケジュールについては、新学期始めに授業を受けたほうがその後の学習に活かせるであろうと考え、4月から5月に設定した。サブテーマは、医学文献概論、医学文献収集法、医学文献検索法、医学文献整理法、応用医学文献論とし、毎回演習時間を設けることにした。

1996年の1月から、より具体的な内容の検討を

始めた。1月下旬には「基礎医学特論ガイドブック」²⁾が学生および担当者に配布され、同時に履修の受付も開始された。教授会資料によると、「医学特論に関する小委員会は2月8日に開催され、基礎医学特論については学生の履修申告の結果、履修希望が楽勝テーマに集中する傾向にある。」との報告があった。3月中旬に履修学生の決定および成績の報告についての文書を受領し、授業の終了した5月末に成績表を提出した。

3. 授業内容

3.1 準備

1996年1月中旬から具体的な授業内容の検討に入った。3時間の授業を講義と演習で毎回構成しようということだけは決まっていたが、学生の知識がどの程度なのか、担当者の知識・能力・技術の違い、授業に対する思い入れや理想などさまざまな要素が影響して、苦し紛れにたたき台を作り上げたのが2月の下旬であった。医療情報学を重視する担当者は、よりコンピュータ関連の内容に焦点を当てたいと考える一方、文献の専門家として自身を位置づけている担当者の考えは、図書館情報学という範疇で医学・医療情報をとらえていた。結局、各回の内容として、第1回は医学医療情報の概説、第2回は情報検索、第3回は文献情報の整理法、第4回はインターネット、第5回は医学医療情報のトレンドということになった。さらに細かい内容については、それぞれの担当者が責任をもって構成した。

授業の始めには、これまでのコンピュータ経験や図書館、OPAC、CD-ROMの利用経験などを問うアンケートを実施し、授業の参考にしようと考えた。また、終了時には、授業の評価をしてもらうことにより、反省および改善に結び付けようということになった。

3.2 構成

以下に第1回から第5回までの授業の構成を紹介する。

第1回 医学医療情報概説 4/10

(1) 担当講師全員の紹介

- (2) 受講理由, パソコン経験を含めた自己紹介
- (3) パソコン経験を詳細に把握するための記名式アンケートを実施

- (4) 医学・医療情報の特性である情報量の多さ, 速報性などについての講義

例) サリン事件

- (5) 古医書をはじめ様々な情報媒体を書画装置を使って解説

- (6) 情報発信の重要性についての講義

宿題: “医学生がなぜ医学・医療情報について学ばなければならないか” というテーマで一週間後にレポート提出

第2回 情報検索演習 4/17

- (1) 論文作成のプロセス, データベースの形態や種類, 引用文献の書き方についての講義

- (2) MEDLINE, 医学中央雑誌 CD-ROM の検索技法を演習

使用機器: デスクトップ型 DOS/V パソコン13台

宿題: 自由テーマで MEDLINE CD-ROM を検索し (英語および日本語に限定) 30件以内の結果を検索式付でプリントアウトおよびダウンロード (レビュー文献は別にプリントアウト)

必要な文献にチェックをし, その中から3件について引用文献の形に書き直し1週間後に提出

第3回 情報組織化演習 4/24

- (1) 表計算ソフト Excel を使って (予め既存データを記録したフロッピーディスクを配布) 起動, データ入力, 表・グラフ作成, 印刷, データベース機能, リストのクロス集計についての説明と演習

使用機器: デスクトップ型 DOS/V パソコン13台

宿題: 医学メディアセンターが所蔵する統計集のデータを使って表とグラフを作成し, それについて分析とコメントを書いて2週間後に提出

第4回 インターネット・ベーシックス 5/1

- (1) インターネットとは何か, 何ができるかについての講義

- (2) ネットスケープを使って一般的なサイトや医学関係のホームページを確認 (その後は自由にネットサーフィン)

- (3) ネットワーク社会の発展と問題点, 情報発信の必要性についての講義

使用機器: ノート型UNIX コンピュータ10台
宿題: “自分のホームページを作るとしたら, どのような情報を載せるか” についてレポート提出

第5回 医学医療情報をめぐるトレンド 5/8

- (1) インターネット経由で検索できるデータベースについて

- (2) 文献を整理するためのソフトウェアについて

- (3) HTML の書き方について

- (4) (1)(2)(3)の講義で興味をもったものを自由に演習

- (5) 第1回から第5回までの講評とまとめ

- (6) 習熟度を確認するためのアンケートを実施

使用機器: ノート型UNIX コンピュータ10台
ノート型 DOS/V パソコン 1台
マッキントッシュ 1台

3.3 変更点と問題点

授業の計画と実際に行われた授業の内容には, いくつか変更があった。当初実習には図書館のパソコンを使うことにしていたが, セミナールームの DOS-V 機が使えるようになったこと, NTC (Network Technology Center) 開設準備室の



方々の協力によりインターネットを使える環境が実現できたこと、また、受講生のほとんどがパソコンの使用経験が浅かったことなどによる。

たとえば、第3回の授業では、情報組織化演習ということで、Excel、Access、EndNoteと3つのソフトウェアを紹介しようと考えていたが、実際には、Excelの演習で終わってしまった。学生には好評であったが、この講義の意図としては、検索した文献を整理する方法の一つとして紹介することであった。すなわち、Excelという表計算ソフトが、文献の整理にも使えるという例を示したかったわけだが、パソコンの基本的な操作法にまず慣れる必要がある学生がほとんどであったため、内容の変更となった。

また、最終回には、トレンドということで、患者への情報提供、医学・医療情報の統合、デジタルライブラリー、電子ジャーナルなどについて第1回同様、講義を中心に行う予定であった。しかし、2コマ続きの3時間の講義は、講師にとっても、受講生にとっても集中力が欠けるということを省みて、第2回・第3回で紹介できなかったマルチメディア教材や、オンライン文献検索の演習を補足するという内容に変更した。授業内容を学生の興味にあわせることがよいのか、はじめから学生がついて来ないとわかっている内容を無理やり押し付けることがよいのか、経験の浅い担当者にとっては、苦渋の選択となった。

4. 授業中に実施したアンケートについて

この授業では、初回と最終回に、それぞれアンケート調査を実施した。³⁾ 初回は受講生のコンピュータ利用の調査、最終回は受講生によるこの授業の評価を調査した。初回の結果を基に2回目以降の授業の内容を調整した。コンピュータ利用、図書館での資料検索の経験が予想より低かったため、基本的な内容を重視する授業となった。

初回・最終回の授業とも、20人の受講生全員が出席しており、時間内に回収を行ったので、回収率は100%だった。従って、以下での母集団は、20人である。この20人が今年度の医学部3年生の平均とは必ずしも言えないが、逆に特殊な20人と

考える必要もないであろう。学生が授業選択の際に参考にする「基礎医学特論ガイドブック」¹⁾の授業のレジュメにも取り立ててコンピュータ技術などの特別な内容を謳っていない。

初回のアンケート結果の個々の項目について見ると、まず、図書館のOPACを使った回数が10回未満の受講生が、全体の80% (16人、うち全く使ったことがない受講生が2人)であった。図書館のCD-ROMを使ったことがない受講生が90% (18人)という結果であった。インターネットを見たことがないという受講生は8人、さらには、デモを見たことがあるだけという受講生まで含めると17人になる。インターネットが世の中で騒がれていても、学生個人ではその環境になく、また授業科目・内容、設備等を含めて日吉キャンパスでの環境も整っていないということだろう。

ゲーム以外の用途でパソコンを利用したことがある受講生は13人、うちワープロ以外を利用したことがあるのは、9人であった。パソコンを持っていると回答した13人のうち3人はワープロのみの利用であった。

最終回に行ったアンケート結果は図1～4の通りである。この結果を鵜呑みにできないとしても、授業は受講生に好評だったといつてよい。点数による評価(満点は100点)では、平均は78点、最低50点、最高96点であった。授業時間別に見ると、演習時間の多かった第2～4回の授業が、理解度・役に立つ度合い・おもしろさ・点数とも評価が高かった。実習なしの2コマ(3時間)という長丁場はつらいということだろう。

自由記入欄には、次のような意見があった。

- (1) コンピュータ、インターネットに触れられて、よかった
- (2) コンピュータに取り組むきっかけが得られた
- (3) 今すぐは役に立たないが、将来役に立つだろう
- (4) 内容が豊富なわりに授業時間が少ない
- (5) 情報の受信と発信についての認識を改めた
- (6) 用語をもう少し詳しく説明してほしい
- (7) 説明を少なく、演習を多くして、もっとスピーディな授業をしてほしい

(8) 1人1台のコンピュータを使いたい

これらの意見はこちらの予想に近いものであった。情報の受信から発信までの過程で資料の検索に必須の条件となる、コンピュータ或いはネットワーク利用の実体験が授業の大きな目的であったからである。短い時間で、しかも今回対象としたのが3年生であるということから、「こういうことができるんだ」ということをわかってもらえば

よいと考えた。それが、(1)から(4)の意見となったと考えられる。基本的な内容を重視する授業となったため、「既にそんなことは知っている」といった意見があることも予想したが、幸いなことにそうした意見は見当たらなかった。医学という主題が付け加わったこと、コンピュータのヘビーユーザーが受講していなかったことなどがその理由として考えられる。

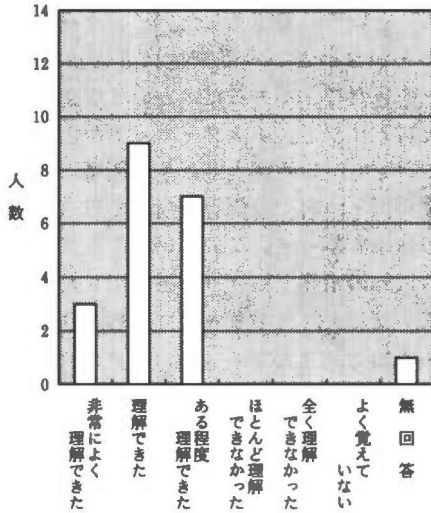


図1 授業の内容を理解できたか

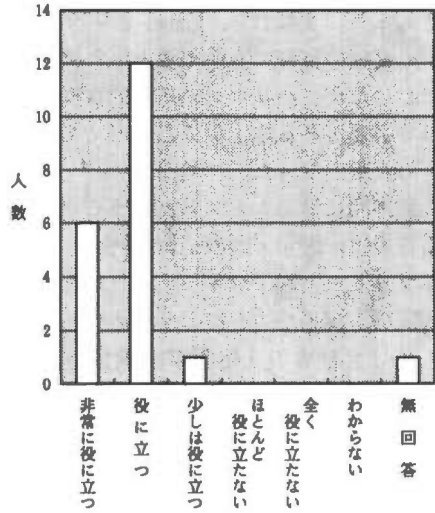


図2 今後、この授業は役に立つか

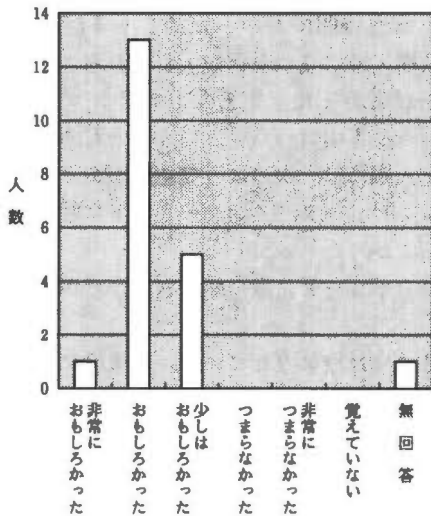


図3 授業はおもしろかったか

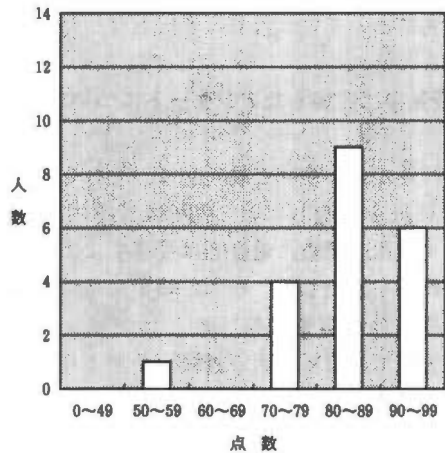


図4 点数による授業評価

(8)で指摘の通り、コンピュータ環境には改善の余地がある。当初予定した教室で用意できたコンピュータは10台である。急きょ教室を変更した第2回・第3回の授業は、コンピュータが16台常設された部屋で行われた。本来1人1台を割り当てるのが演習時間を多くするためにも望ましい。

5. おわりに

今年度は、情報環境が完全に整備されるまでの過渡期ということもあり、コンピュータ利用の経験が浅い学生が多かった。したがって、「医学情報」に完全に焦点を当てて授業を展開していくことはできなかった。基本的なコンピュータ操作や、用語の説明に必要以上の時間を割いたことも事実である。しかしながら、こうした経験が次のステップへと繋がっていることは明らかである。

全塾情報スーパーハイウェイの整備により、今後医学部学生に対する情報関係のカリキュラムは変更されるであろう。コンピュータの基本的知識を備えた学生が受講するという事を考えれば、今後この授業で行うべき内容を、より医学の専門的な内容へと変化させていく必要がある。たとえば、文献検索のテーマをより複雑な内容、あるいは臨床場面で直面しそうな内容を想定した演習問題を作成し、さまざまな限定を加えてより問題解決に必要な文献の選択を行うといった演習も必要であろう。

基礎医学特論「医学文献情報概説」の授業全5回が終わった日、担当者全員でビールを飲みながら互いの苦労を誉めたり、批評したり、慰めあったりした。医学図書館に働くものにとって、長年の夢であった学生の授業を担当することが実現したことは、さらなる医学メディアセンター前進への励みとなったことはいままでもない。図書館の仕事は一朝一夕に成し遂げられるものではない。この機会を与えられるに至るまでの、地道な努力によって医学メディアセンターの基礎を築き、支えてくださった方々に感謝し、この報告を終わりにしたい。ただし、夢が実現してしまって人間が抜け殻になってもいけないから、もう一つ欲ばって希望を追加しておくことにしよう。医学部の授業を図書館員が聴講できる日、これが、もう一つの夢である。

参考文献

- 1) 宮崎貞治. “医学情報センターにおける利用者教育”. KULIC. No. 22, p. 19-20 (1988. 11)
平吹佳世子. “MEDIANET レポート・利用者教育 [医学メディアセンター]”. MediaNet No. 2, p. 72-73 (1994. 11)
- 2) 基礎医学特論ガイドブック, 平成8年度. 慶應義塾大学医学部医学特論に関する小委員会 (1995. 12) 63p
- 3) “基礎医学特論医学文献情報概説—講義資料集成—”. きたさとニュース. No. 198, Suppl. (1996. 7)



商学部でのネットワーク利用事例の紹介

かん べ かず お
神 戸 和 雄

(商学部助手)

昨年の6月から商学部ネットワークの管理をするようになり、初めて UNIX システムを利用しました。なにかもが新しいことづくめでしたので、UNIX システムを長年にわたって利用されている方には当たり前のことも多々あるかと思いますが、簡単なものも含めて現在の利用について紹介したいと思います。なお、本稿で紹介したソフトは特に断りのない限り、フリーウェアないしは標準で OS に添付されているものです。

1. fml の利用

fml はメーリング・リスト・サーバ用のパッケージです。メーリング・リスト用パッケージとしては majordomo が有名ですが、日本語でのマニュアルがあること、さまざまな設定を細かくできることから fml を使用しております。現在のところ以下の機能を使っています。

- メーリングリスト毎に Subject に指定した文字列と通し番号を付加。例えば、商学部スタッフ用のメーリングリストでは [FBC:15] といったように Subject の先頭に付加され、メールの受け取り側で自動振り分け機能を使つての整理がしやすくなります。

- コマンドメールの利用。メール本文中に

```
# help      (help ファイルの取得)
# get 1     (1 番目のメールの取得)
# mget 1-5 d (1~5 番目のメール取得)
```

といったコマンドを使うことによりヘルプファイルや過去のメールを取り寄せることができます。また管理者用のコマンドもあるため、学部サーバにアカウントがない学部学生にも管理を任せることができます。

- www との連携

キーワードにもとづいて html 文書をインデックスとともに整理、作成します。www サーバの Form を利用したメールと併用すること、および上記のコマンドメールの利用によってメーリングリストと www のデータを同一に参照可能になります。将来的には news サーバとの連携も図る予定です。

この fml は他にもまとめ送りなど多くの機能がありますので、興味がある方は以下の URL をご覧ください。

<http://axion.phys.titech.ac.jp/uja/fml/>

2. ftpmirror

ftpmirror は mirror のためのパッケージです。mirror に関しては同名の mirror というパッケージが有名ですが、この ftpmirror は5 ページ程度の日本語マニュアルを読んだだけで設定ができるので重宝しています。

この ftpmirror を次に述べる cron と併用して 1 日 1 回、週に 1 回といったように特定の ftp サイトからファイルを自動取得、更新しています。また実行結果をメールで自分宛に送るようにしており、そのメールを読んでこれはというものがあれば商学部ホームページのアプリケーション集に登録しています。現在、バージョンアップの作業が進められており、mirror により近い設定が可能になるようです。URL は以下の通りです。

<ftp://ftp.intec.co.jp/pub/utills/>

3. cron と vacation

cron は UNIX 上でコマンドを自動実行するた

めのもので、`crontab -e` とすることで内容を編集し、時刻、曜日、時間間隔といった指定のもとプログラムを自動実行することができます。前述の `ftpmirror` といったように定期的に行うパッケージと組み合わせることで、効率的な運用が行えます。また、`vacation` は電子メールに自動応答するプログラムです。こちらも `slocal` 等と組み合わせることで非常に便利な使い方ができます。紙面の都合上、紹介だけにさせていただきますが、詳しくはワークステーションにアクセスしてから `man crontab` あるいは `man vacation` で表示されるヘルプファイルをご参照ください。

4. PC/NFS, Samba によるファイル共有

PC/NFS, Samba はワークステーションにインストールすることでワークステーションのディスクとプリンタを自分のマシンで利用可能とするものです。例えばワークステーション上のホームディレクトリを自分のパソコンの `h:` ドライブとして割り当てることができ、この `h:` ドライブはパソコンのドライブとまったく同じように扱うことができパソコン用パッケージのデータ形式でファイルの保存が可能となります。ワークステーション上で共通のディレクトリを設定し、複数のマシンから同一のディレクトリを参照することで、ファイルの共有が可能となります。現在の UNIX マシンとパソコンが混在したネットワークでは、ネットワーク機能を活用するために有用なものです。

PC/NFS を稼働するためには `pcnfsd` デーモンが必要になります。また、この他にサーバ側で、`/etc/fstab` に共有するディレクトリと利用可能なマシンの IP アドレスなどを記述する必要があります。この `pcnfsd` は各地の ftp サイトにありますので、`archie` で探してみてください。

PC/NFS は簡便にファイル共有を図ることができますが、上記の `/etc/fstab` の設定が必要なこととクライアント用のソフトが比較的高価なので、MS-DOS ベースに限定して利用しています。MS-DOS 用の PC/NFS クライアントとしては Tsoft's NFS driver が多くのネットワークイン

ターフェースに対応していることから実用的と思われる。教育機関および家庭用には \$25、ビジネス用には \$40 のシェアウェアで、ファイル名で日本語を扱えないという不便はありますが、日本語対応の PC/NFS クライアントはかなり高価なのでたくさんのマシンに導入する場合はリーズナブルな価格設定かと思います。Windows 3.1 に関してはこの Tsoft's NFS driver を DOS 上で動かし利用しています。URL は以下の通りです。

<http://www.tsoft.net/software/nfs/download.html>

Windows 95, Windows NT, OS/2 あるいは UNIX とのファイル、プリンタの共有をする場合は、Samba を利用しています。この Samba は UNIX 上で動作する LAN Manager (NetBIOS over TCP/IP) のサーバで、漢字のファイル名が利用可能であることや、OS に標準で添付されているブラウジング機能が使用できるため、一度設定すればサーバとの共有を迷うことなく行えます。Samba の共有設定は `smb.conf` に記述しますが、PC/NFS の `/etc/fstab` での設定に比べ柔軟な指定が可能であり、管理者側の編集の手間も省くことができます。また、Macintosh 用に CAP 等を導入することで機種を問わずファイル共有が可能になります。

具体的なインストールの概要は平野聡氏による「Samba の使い方—より進んだ PC ネットワーク—」を以下の URL で見るすることができます。

<ftp://etlport.etl.go.jp/pub/windows/knowhow/samba.txt>

細かい設定をしたい場合は、翻訳途中ですが、マニュアルの和訳が

<http://www.yk.rim.or.jp/~fumiya/Samba/> にあります。Samba 本体、英文のホームページは <http://lake.canberra.edu.au/pub/samba/> です。

5. パソコン同士の連携

現在、商学部で利用されているパソコンのほぼ 8 割が Windows 95 でありパソコン同士の連携

が取りやすい環境になっています。Windows 95 の場合、コントロールパネルのネットワーク設定で、ファイルないしプリンタの共有をチェックしますと Microsoft ネットワーク共有サービスがインストールされ、パソコンを簡易サーバとして利用することが可能になります。ドライブあるいはフォルダ毎に読み取り専用、フルなどといった許可するレベルとともにパスワード設定を行えるので、小規模の研究グループでのファイル共有には十分かと思われます。現在のところ利用範囲は限定的ですが、ワークステーションで共有すべきファイル、Windows 95 のネットワーク機能で共有すべきファイルを明確に区別することで、ワークステーション上に置かれる共有ファイルの容量を削減できればと考えています。

パソコン同士の連携を図る場合、利用可能なのが Timbuktu Pro というシェアウェアです。この Timbuktu Pro を利用することで、相手先のパソコン画面を自分のパソコンに表示させるとともに、操作することができます。PPP 接続であれば電話回線経由でも利用することができますので、自宅のパソコンから大学のパソコンを操作することが可能になります。サーバ上に置いた巨大ファイルを編集するといった場合、自宅からのアクセスではファイル自体が自宅のパソコンに転送されてしまい、ISDN 回線を使っても時間がかかります。それに対して、この方法をとった場合はファイルのやりとりはサーバと PC/NFS ないしは Samba によるやりとりであり、大学のパソコンと自宅のパソコンは画面データのやり取りだけになります。当然のことですが直接、マシンを操作する場合に比べ反応は遅くなりますが、研究室での仕事を自宅から継続する必要がある場合には有用な時もあるかと思えます。また、Macintosh 用もあるので、Windows 系のマシンと Macintosh をこの Timbuktu Pro で接続、操作すればマシンの違いを意識しないで済みます。Windows 系マシンと Macintosh を両方お使いの方にはおもしろいソフトかと思えます。URL は以下の通りです。

<http://www.farallon.com/>

6. WWW サーバ関連

商学部の www サーバ (httpd デモン) は CERN のものがインストールされており、日本語の解説書が少ないこともありかなり手こずりました。NCSA 他の httpd に変更することも検討しましたが、ファイルの名称毎にプロテクトをかけることができるなど細かい点で有用な部分もあるので、CERN の英文マニュアルを読みながら利用しています。

設定は/etc/httpd.conf に記述します。非常に多くの設定項目があり、説明しきれませんが、ここでは2点についてのみ簡単に説明します。

まず、プロテクトのかけ方についてです。/etc/httpd.conf に以下のように記述します。記述位置も意味を持ってきますが、既にある/etc/httpd.conf にコメント行としてサンプルが記載されている筈ですので、同じ位置に記述します。

```
Protection PASS-SETUP {
    AuthType      Basic
    ServerId      FBC_Server
    PasswordFile  /usr/local/xxx/xxx/passwd
    Get-Mask      All
}
DefProt /*      PASS-SETUP
DefProt /~*/~* PASS-SETUP
```

プロテクトの記述はいくつかの種類がありますが、この設定は Password ファイルと .www_acl ファイルを利用する方法です。簡単に説明しますと、まず、Protection 命令でテンプレート (PASS-SETUP) を宣言し、内容を記述します。AuthType Basic は認証方法の指定ですが現在のバージョンでは Basic しかありませんので、この書き方のみです。次の ServerId は User Name および Password を聞いてくるボックスに表示されるサーバの名称ですので、適当につけてください。PasswordFile にはパスワードを記録してあるファイルを絶対パスで指定してください。このパスワードファイルは htadm で作成することができます。形式は通常のパスワードファイルと同じですので、セキュリティ上、問題がなければ転

用も可能です。Get-Mask では許可するユーザ名、グループ名、ドメイン名、IP アドレスを記述しますが、ここでは .www_acl ファイルで指定することにしますので、All (予約語) を指定しています。最後の 2 行で実際にプロテクトをかけるディレクトリとテンプレートを関連づけています。/* はルートディレクトリ以下、/~*/ は個人ユーザの public_html ディレクトリ以下を表しています。

この記述を済ませ httpd デモンを restart すれば .www_acl ファイルがあるディレクトリにはパスワードでのプロテクト、.www_acl ファイルがないディレクトリはノン・プロテクトになります。

パスワードファイルを使わないプロテクトの場合、IP アドレス、ドメイン名などでプロテクトをかけることにはなりますが、プロバイダ経由からのアクセスを考えると現実には設定が不可能なのでこの形式をとっています。.www_acl の内容を

```
* : GET, POST : all
```

とすればパスワードのみによるユーザ認証になります。この .www_acl ではきめ細かい設定ができますが紙面の都合上省略させていただきます。詳しくは <http://www.w3.org/pub/WWW/Daemon/User/Admin.html> をご覧ください。

現在のところ、商学部サーバに学部学生はアカウントを持つことができません。ところがゼミのホームページを商学部サーバ上に持ちたいという要望もかなり多く、どうすべきか迷うところです。教員のアカウントを利用させるのはネットワークのモラルに反しますので、先頭ページからリンクを張るか redirect を利用することができます。/etc/httpd.conf に以下のように記述し httpd を restart すれば redirect 以下の 2 つのディレクトリは同一のものと見なされます。

```
Redirect /~kambe/* http://www.mita.keio.ac.jp/~kambe/*
```

<http://www.fbc.keio.ac.jp/~kambe> にアクセスすれば自動的に <http://www.mita.keio.ac.jp/~kambe> が表示されます。表示された結果は後者の URL になってしまうこともあり、検討中といったところです。なお、CERN の httpd

デーモンの restart は以下の通りです。

```
kill HUP httpd デーモンのプロセス ID
/etc/httpd.conf のあるパス/httpd -r /etc/httpd.conf
-restart
```

• getstats によるアクセス集計

www サーバへのアクセスを集計するプログラムとしては集計方法を指定する html の Form があらかじめ付属してくることから getstats を利用しています。時間別、日毎、週毎などなどさまざまな集計を行うことができます。下に示したのはどのようなドメインからアクセスがあったかの稼働当初から 9 月 28 日分までの集計の抜粋です。

```
reqs : # uniq : Domain
.....
102453 : 4398 : Japan (.jp)
62311 : 1772 : (numerical domains)
4931 : 424 : US Commercial (.com)
2565 : 246 : US Educational (.edu)
1806 : 218 : Network (.net)
791 : 59 : Australia (.au)
708 : 12 : Non-Profit (.org)
636 : 57 : Canada (.ca)
557 : 24 : South Korea (.kr)
480 : 33 : United Kingdom (.uk)
331 : 16 : France (.fr)
```

getstats の URL は以下の通りです。

```
http://www.eit.com/software/getstats/getstats.html
```

他にもアクセス集計のプログラムはグラフィックで表示をするものなど多くの種類がありますので、Yahoo などで探してみてください。好みに合うものがきっと見つかることと思います。

紙面の都合もあり、一部を紹介するだけになってしまいましたが、ネットワーク利用上のヒントにでもなれば幸いです。

＜スタッフルーム＞

育児とわたし

すぎ やま よし こ
杉 山 良 子

ふと気がつくと、いつの間にかメディアセンターでも Working mother が多くなっている。図書館が、女性が多く働く職場であることを考えれば当たり前前のことではあるが、私が勤めはじめた当時には考えられないことであった。これは、社会的傾向でもあり、時代の流れであろうか。

ともあれ、私も後輩たちに遅れをとりながらもその一人となった。

その娘もはや4歳。あっという間に一人前の子どもになってしまったという気がする。街で赤ちゃんを見かけると、あんな頃もあったんだなと感慨深く思えるほど遠い昔のことに思える。

赤ちゃん時代をいつまでと考えるかは判断がむずかしいところだが、一人で歩き、一人で食事するなど、基本的な生活を自分でできるようになった時、子育ての第一難関を越えた気がした。それまでは、子どもは親（保護者）がいなければ生きていけないと思えることも多く、ひたすら奉仕の日々であった。しかしそれも、今思えば絶対の信頼関係にあった貴重な時間だったのかもしれない。

子どものいる生活で一番大変なのは自分の時間がなくなることである。特に赤ちゃん時代がそうである。それまで、すべてが自分の時間であったのに、自分のペース、予定など全く無意味になり、完全に振り回されてしまうのだからたまったものではない。以後、予定はなるべくいれないようにした。

しかし一方で「育児と仕事の両立」というテーマは女性雑誌でも良く取り上げられるが“案ずるより産むが易い”で、当事者になってしまうと、意外とすんなりといってしまう気もする。

とはいっても、私の場合、毎朝娘を実家に連れていき、預かってもらっているということであまり大きなことは言えないのが真実で、内心では両親は毎日さぞ大変なことだろうと、感謝感謝の日々であ

る。

確かに朝・夕はかなりの忙しさではあるが、仕事の時間と家庭の時間を切り離すことで、気分転換、ストレス解消になっている。そして、子どもにとって何よりなのは、日中一緒にいられない負い目があるから、一緒にいる時間、優しくしてやれることであろうか。

もちろん十人十色で、他の人のことは全くわからないが、私個人を思えばずっと昔から子どもと一緒にやってきたと思えるくらい、ごくあたりまえの生活を送っている気がする。今では、以前より時間を気にしないようになったし、ゆとりを持てるようになった。

さて、4歳の娘について少々。本が好きで本屋に勤めるか図書館に勤めたいと思っていた私に似て、彼女は本が大好きである。「本は極力増やさない」という方針であるから、日曜日には電車に乗って、公共図書館に通う。図書館で本を借り、帰りには本屋で本を立ち読み、おもちゃで遊び、最後はドーナツを食べて帰るのがお決まりのコース。

最近では好きな本は返したくないということで結局は買う羽目になり、何のために図書館に通うのかと考えてしまう。家では、書棚から本を出してきては、図書館ごっこをして遊ぶ。貸出カウンターに本を出し、本をなぞって「ピッ」と声を出して、貸出の真似をする。

「大きくなったら何になりたい？」と聞かれ、「本屋さん」と答える娘を見て、うれしく思う反面、これからは自我の目覚めた彼女と真剣にやりあっていかねば、と心をひきしめる思いである。

(湘南藤沢メディアセンター係主任)



Undergraduate 教育における図書館の役割

—— 日吉メディアセンター勉強会から ——

しづ や ゆみこ
静 谷 裕美子

(日吉メディアセンター)

こう の えつこ
河 野 江津子

(三田メディアセンター)

1. はじめに

日吉メディアセンター（以下、日吉 MC）では、今年度、日吉 MC 勉強会として年 3 回勉強会を行うことになっている。本稿では、その勉強会発足の経緯と今年度の内容、及びその第 1 回勉強会から、学部学生用図書館の役割について、アメリカの事例を紹介するものである。併せて、日吉 MC についての現状、及び今後の課題について若干の考察を加えたい。

2. 日吉 MC 勉強会発足の経緯

かねてより、日吉 MC でも何らかの自発的な研究会をもってはという声内外からあがっていた。しかしながら、主題分野がはっきりしている他キャンパスのメディアセンターと異なり、日吉 MC のサービス対象が文・経・法・商・医・理工の各学部と広いため、いざ何から着手してよいのか漠然としていた。

そこで、1995年5月に日吉 MC スタッフにアンケート調査を行い各人の意向をきいてみた。アンケート票配付数18、回収数10であった（紙面の制約から、ここでは詳しい結果は割愛する）。

その結果、各人がどのようなものを求めているのかということはわかった。だが、先にも述べた通り、主題分野が広範なためもあり、いま一つ焦点を定めることができなかった。しかしながら、とにかく何かを始めなければ進展しないという感もあった。

そんな折、メディアネットの職員コンピュータ研修の一環で、CD-ROM の運用というテーマで日吉の石原がパソコン研修の講義を担当することになった。参加したい気持ちはあっても、参加できる人数には制約があり、また先年度の研修に参加したために参加しにくいという人もあり、日吉のスタッフの中で、参加したいのにできないという人が大勢でた。

そこで、各スタッフが共通して興味をもっているこのテーマで、日吉 MC の勉強会を開いたらよいのではないかとということになった。講師の負担という点からも、石原に発表を依頼すればコンピュータ研修のために既に準備をしておき、さほど重たくならないうということもあった。

このような経緯で1995年11月22日に「CD-ROM の運用」というテーマで勉強会をおこない、15名の参加者を得た。

3. 今年度の計画

年度内にあと1回は開催したかったが、実現せぬまま年度末を迎えた。次年度の計画を検討している過程で *Library Trends* 誌 Vol. 44 No. 2 (Fall 1995) で *The Library and Undergraduate Education* という特集を組んでいることが判明した。このテーマであれば、皆が共通して興味を持つるとともに、図書館サービスの向上にもつなげることができるのではないかとということになった。

当初は、特集号のいくつかの論文を紹介する抄

読会形式を考えたが、限られたスタッフに過度の負担がかかることを考慮し、別の切り口を検討することにした。

その結果、以下の3つの観点で勉強会を開催することに決定した。

- ① 米国大学図書館ガイドラインの紹介
- ② 大学設置基準大綱化の日吉の実情
- ③ 日吉における情報処理教育の現状と課題

このような流れで、1996年度第1回(通算第2回)の勉強会を1996年5月21日に実施した。発表者は河野である。

発表のために河野が雑誌記事を訳したが、本稿の終わりにその要旨を抜粋したので参照されたい。

4. 勉強会の結果及び考察

この勉強会の参加者は15名であった。河野の発表の後、意見、感想を述べあった。主なものを以下に列記する。

- ・ 図書館側が授業に直接に関与するよう、積極的に働きかけるのが望ましい。
- ・ 授業で課題が出されて学生がカウンターに何人も同じ質問にやってきて、初めてどういう課題が出されたかを知るのが実情。メインカウンターでは、スタッフがローテーションで入れ替るため把握しにくい。レファレンスデスクなら把握はしやすいが、それより予め課題を図書館に伝えてもらうなど、教員との協力が必要ではないか。
- ・ 各窓口で得た情報は、相互に連絡しあって伝えるのが望ましい。
- ・ 教員側で図書館、図書館資料を使うように出した課題が、図書館資料を使うという観点からは的外れのこともあるので、図書館側からもっと発言する場があれば、より有効な成果が得られるだろう。
- ・ 図書館の側からも、各窓口でもっと図書館の姿勢のようなものを伝えるよう努めたほうがよい。
- ・ 授業で求めているものがわかれば、それを選書

にも活かせる。

- ・ 高校の先生から、350名に論文を書かせるために、高校図書室の資料だけでは不十分なので、メディアセンターを使わせてほしいという申し出があった。ライブラリー・オリエンテーションも行ってほしいとのこと。予めこういう指導を受けたことのある学生が増えれば、図書館の利用指導ももっと深いものへ変えていくことができるのではないか。
- ・ 教員に対する利用実態調査をアンケートをとって行ったが、学生に対しても行うべき。その際、図書館に来た人を対象にするのではなく学生全体を母集団としてあまねくアンケートをとるべき。
- ・ 図書館がアンケートをとるのではなく、学生総合センターに働きかけて、全体のことをきくなかで図書館のことも尋ねた方が、本音が出やすいだろう。
- ・ 需要があるから供給するというのではなく、供給することで需要を増大させていくという姿勢が大切。
- ・ 図書館側が積極的に働きかけ、こういう便利にすることができる、こういう資料があるということを利用者に教えてあげるべき。潜在的な需要を引き出して行きたい。
- ・ 高校を卒業してすぐの利用者は我々が当然と思っていることでも知らないことがあり、それを教えることで役に立つ場合が結構多いのではないか。

皆が一堂に会して意見・感想を述べあうということは日頃なかなかない機会なので、それ自体、意義のあることだったと思う。そして、日吉 MC の現状を振り返り、また、向かうべき方向性のようなものを確認できたことが、今回の収穫であった。

次の段階として、それをどのように実現していくかということになろう。

日吉 MC は、学生が大学に入学して最初に利用する図書館である。やはり、この初めの段階で図書館の使い方、資料の探索法をしっかりと身につけてほしい。

ライブラリー・オリエンテーションに関しては、今年度から教務のガイダンス日程に組み込んでもらい実施した結果、前年度に比べ1,040人増（前年度比427%）という格段の増加を得た。今後も引き続きこれを維持、増加させるとともに、OPAC セミナーとそれに続くビブリオグラフィック・インストラクションを質、量ともに充実させることが重要な課題だと思われる。そのためには、意見・感想のところで紹介したように教員との連携を様々な形で強化していく必要がある。

また、評価の基準に関して抄訳でも言及しているように、日吉 MC でもこの図書館サービスの評価という点に着眼し、何らかの形で進んでいくのが望ましい。館員皆がサービスの向上を目指し個々のサービスを行っているが、その有効性、質を客観的に評価するという点で、残念ながら弱く感じる。

抽象性、概念性を極力排した具体的な項目を明文化して、図書館及び図書館サービスを点検・評価し活動を見直すことは、きわめて重要なことだと思う。その端緒として、さきの基準を踏まえつつ例えば、早慶図書館員合同合宿研修での成果として挙げられた自己点検項目¹⁾などを参考にしながら、日吉なりにアレンジするということが考えられよう。初めから完璧をめざすのではなく、とにかく少しずつでも始めるという姿勢が必要なのではないか。

5. おわりに

第2回勉強会は、7月11日に実施した。図書館という枠より一段広い観点から、大学設置基準の大綱化にともない慶應義塾大学がそれをどのように体系化してきたかを、教務部の紀野日吉支部長にお話ししていただいた。参加者は他部署からの参加3名を含め、22名であった。

第3回目は10月に白石情報システムサービス担当課長（兼大学情報処理教育室事務主任）より、情報処理教育に関して、日吉の現状と課題について発表していただく予定になっている。

なお、第3回目まで終了した段階で、Under-

graduate 教育と図書館をテーマとして全体のまとめを発表する予定である。

現時点では、お膳立てしたものをこなしていくという段階である。今後は、この勉強会を根づかせるためにも、スタッフ、特に若手スタッフの中から自然発生的にテーマが湧きだしてくるのが理想的だと思う。来年度以降も、この勉強会が続くことを切に望む。

学部学生用図書館のためのガイドライン：草案²⁾

はじめに

このガイドラインは、米国大学研究図書館協会（ACRL：Association of College and Research Libraries）の学部学生用図書館ディスカッション・グループ（UGL：Undergraduate Librarians Discussion Group）によって、1995年に発表されたものである。

UGL は1979年に学部学生用図書館で求められるニーズを反映するサービス哲学を育てようという意図のもと、「学部学生用図書館の役割声明」³⁾を発表し、1987年に改訂を行った。⁴⁾

以下に抄訳したガイドラインは、この役割声明がベースになっている。

なお、抄訳に際しては、中川真紀氏の「学部学生用図書館のガイドライン」⁵⁾を参考にさせていただいた。

本文

学部学生用図書館は、大規模な大学に在籍する学部学生の情報ニーズと図書館を結びつけることを第一の役割として設置されている。このガイドラインでは、学部学生用図書館のサービス及びコレクションの発展と維持のために影響力を持つ主要なファクターを明らかにし、これによって学部学生用図書館に求められるものを判断し、またその活動を評価する上での助けとしたい。

キャンパスの環境

大規模大学における総合図書館や分館のコレクションは、ある特定分野や学問領域におけるリサーチ・レベルでのニーズへの対応に集中しがち

であり、多くの学部学生の図書館利用を脅かす環境を作り上げている。

よって学部学生用図書館では、初歩的な参考資料の使い方、研究プロセスの指導などに力を入れていくべきである。

主要なサービス対象である新入生の図書館利用の経験や情報検索技術のレベルは様々であり、以下のような特性を持っていることを考慮に入れる必要がある。

- 1) リサーチ・ライブラリーでの情報収集に必要な研究調査のための技術を習得し始めている。
- 2) 必要な援助が受けられ、気軽に質問ができるユーザー・フレンドリーな環境を求めている。
- 3) ライブラリー・インストラクションを通して、大学図書館で得られるサービスや情報資源などへのアプローチの方法を学ぶ必要がある。
- 4) 多くが、短期間に集中的に図書館を利用する必要がある課題を課す講座を受講している。

その他、教職員はもちろん、地域社会の人々もサービス対象に含まれるので、その指導や情報ニーズに応えることも考えなければならない。

コミュニケーション

以下のようなコミュニケーション手段を通して、すべての利用者に効果的な図書館サービスの提供を心がける必要がある。

- a) 図書館サービスやその利用法について知らしめたり、指導したりするようなコミュニケーション——すなわち、パブリック・アウェアネスやライブラリー・インストラクション。
- b) 直接的に情報を提供するようなコミュニケーション——すなわち、レファレンス・サービス。

プログラム

以下にあげるようなプログラムを提供し、利用者が情報リテラシーの技術を身に付けられるよう手助けする。学部学生用図書館は、学生が卒業後も様々な目的のために情報源を上手に利用できるようにするため、いわばすべての未来の図書館へのゲートウェイとして役に立つものでなければならない。

レファレンス及びレフェラル・サービス：

特定の質問に回答するに止まらず、必要な図書館資料を見極め、検索する方法の指導に及ぶ。データベースや書誌類の提供、その他図書館内の資料やその資料を見つける上での助けとなるガイドの紹介などにも重点をおくべきである。

オリエンテーション：

学部学生に図書館システムの施設やサービスについて知らせるための活動である。マップやガイド類の配布、ツアーの企画なども含まれる。

ビブリオグラフィック・インストラクション：

図書館のコレクションやサービスやスタッフを上手に利用できるよう、学生の能力を向上させるようなプログラムが求められる。

資源

職員：

効果的な運営や、サービス、コレクションの利用の便を保証するに足る知識や能力が求められる。様々なタイプの利用者に、その場に合った方法でフレンドリーに対応する能力、また指導の際のマナーなどは、図書館員に欠くことはできない。

また、利用者の教育あるいは学習上のニーズにかなうような多様な知識背景、及び次のような能力が必要とされる。教えるための能力、指導のための方法と学習のスタイルに関する知識；優れたコミュニケーション能力；情報探索技術の理解とその専門知識などである。柔軟性を持ち、リスクを恐れず、進取的なプログラムを開発する努力を厭わないことも必要である。

また、図書館のサービスに影響を及ぼすような問題に常に関心を抱けるよう、適切な専門機関に所属すべきである。

コレクション：

学部学生用図書館のコレクションの価値は、その質や量と同様いかに使いやすいかという点で測られる。コレクション・ポリシーでは、以下のような点を考慮に入れるべきである。

- 1) 需要の多い資料のリザーブ・コレクションや複本の購入などを通して、カリキュラムをサポートすることが求められる。

2) レファレンス・コレクションでは、よりスタンダードで学際的なインデックスやソースを集中的に集めるべきである。そして、これらのインデックスにカバーされているような幅広い分野の逐次刊行物のコレクションを構築すべきである。

3) 学部学生用図書館のコレクションでは、幅広い学問分野をカバーし、より専門的で高度な要求は、キャンパスの他の専門図書館へ照会する。

4) 学部学生は個人的関心にそった情報要求をよくする。学生が毎日の生活の一部として気軽に図書館を利用できるよう、カレントなイベントや文化的関心、就職情報、娯楽的な読み物などへのアクセスをも考慮に入れるべきである。

効果的な学習環境：

すべての利用者のために、効果的な情報資源へのアクセスと利用を促進するような施設を有すべきである。電子的フォーマットの資料の利用も可能であり、適当な座席を有した安全で快適で明るく清潔なスペースが提供されなければならない。

また、主要な利用者のニーズに合わせて、開館時間、貸出規則、その他の規則を設定しなければならない。

評価

業務活動評価：

学部学生用図書館を開設、維持している大学組織、あるいは学部学生用図書館サービスを提供している大学組織は、「大学図書館の規準：業務活動評価」⁶⁾に記述されている基本原則を適用すべきである。

学部学生用図書館の評価基準には以下のようなものがある（主なもののみ抜粋して紹介する）。

1) サービス

- 提供されているサービスは、学部学生や教員、スタッフの情報ニーズに適うものであるか。
- 利用者調査や統計、その他サービスの質を測れるようなデータが収集され、そして効果的に役立てられているか。
- 図書館の利用指導のプログラムが行われている

か。そしてコースワークをサポートするために十分に組み立てられているか。

- スタッフは十分にトレーニングされ、相当の報酬を得ているか。スタッフの研修が奨励され、サポートされているか。
- 利用者に対するパブリック・サービス・スタッフの割合はどうか。それは適切な割合か。
- 利用者が求めているであろう新しいサービスを予期し、先んじて実施しているか。 など

2) コレクションとアクセス

- コレクションは学部学生のカリキュラムを十分にサポートするような内容を持っているか。
- コレクションのサイズと深度は学部学生人口のサイズとニーズに対応しうるものか。
- コレクションはわかりやすく目録に収載されているか。書誌的アクセスの基準は他の図書館システムのものに比肩しうるか。
- コレクションは能率的かつ効果的に配置され、配列されているか。
- コレクションはすべての利用者が手に取り、利用できるものか。貸出規則は利用者のためになるアクセスを可能にしているか。
- コレクションの維持のために必要とされる除籍のポリシーが存在し、実践されているか。
- 学部学生のために図書館間貸出やその他のドキュメント・デリバリー・サービスが提供されているか。
- 学部学生は情報入手のためにネットワークにアクセスする手段を擁しているか。 など

3) 環境

- 施設は安全で環境管理されているか。
- 資料は亡失や切り取り、盗難などのダメージから保護されているか。
- 機械設備とその技術的サポートは十分か。
- 適切な座席と利用スペースが整っているか。
- グループでの利用や利用指導の場としても考慮され、学習や研究、情報テクノロジーの使用にも配慮したスペース配置になっているか。 など

4) 予算

- 予算は同じレベルの他大学の学部学生用図書館に引けを取らないものか。
- 予算はスタッフのレベルを支えるのに十分か。

- 予算はコレクション・ポリシーを十分に支持し、それによって学部学生のニーズに合った資料、また資料へのアクセス手段を提供しうるものか。
- 予算は新しいテクノロジーを取り入れたり、利用指導のプログラムを企画したりといった改革をサポートできるような、柔軟性を持ったものか。
- 学部学生用図書館の職員は予算に関して裁量やコントロールを働かせる権利を持っているか。
- スタッフと予算の割り当ては長期的な展望を持って行われているか。など

活動の見直し

学部学生用図書館の活動は定期的に公式評価を受けるべきであり、また、その作業は継続的に行っていかなければならない。

評価からわかったことは、学生や教職員なども巻き込んで広く知らせ、議論されるべきである。評価結果から、学部学生用図書館にとってのゴール、目標は見直しが必要である。現実的なゴール、そして将来のサービスの可能性は、止まらず、より発展させていかなければならない。こ

のプロセスによって、大学、その図書館システム、そして学部学生用図書館は、その資源と役割のバランスを維持していかなければならない。

参考文献

- 1) 藤原秀之・長島敏樹他 “大学図書館における自己点検・自己評価：早慶図書館員合同合宿研修報告” 大学図書館研究. No. 42, p. 69-76 (1993)
- 2) “Guidelines for university undergraduate libraries : a draft” *College & Research Libraries News*. Vol. 56, No. 5 p. 338-341 (1995)
- 3) “The mission of an undergraduate library (model statement)” *College & Research Libraries News*. Vol. 40, No. 6 p. 317-319 (1979)
- 4) “The mission of a university undergraduate library : model statement” *College & Research Libraries News*. Vol. 48, No. 9 p. 542-544 (1987)
- 5) 中川真紀 “学部生用図書館のガイドライン” *カレントアウェアネス* No. 198, p. 6-7 (1996)
- 6) “Standards for university libraries : evaluation of performance” *College & Research Libraries News*. Vol. 50, No. 8 p. 679-691 (1989)

三田図書館・情報学会月例研究会

第84回月例研究会 (平成7年9月30日)

「ネットワーク環境下の図書館サービスにおける著作権問題について」

発表者 苗村 賢司

(慶應義塾大学環境情報学部)

第85回月例研究会 (平成8年1月20日)

「電子メディアと書誌コントロール」

発表者 根本 彰

(東京大学教育学研究科)

特別月例研究会 (平成8年3月28日)

「情報技術の進展と図書館：図書館の将来」

発表者 マイケル・バックランド

(カリフォルニア大学)

第86回月例研究会 (平成8年4月27日)

「ヨーロッパにおける情報サービスの現状」

発表者 ピータ・イングベルセン(デン

マーク王立図書館学校主任教授)

第87回月例研究会 (平成8年9月29日)

[Research Libraries and Digital Information]

発表者 Sul H. Lee

(オクラホマ州立大学)

Maureen Donovan

(オハイオ州立大学図書館)

第88回月例研究会 (平成8年8月30日)

「全文データベースに対する情報検索」

発表者 大山 敬三

(学術情報センター助教授)

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年2回刊の機関誌 *library and Information Science* は、個人会費 (年額¥3,000)、機関会費 (年額¥5,000) を支払った会員に送付される。

学会への入会、機関誌等に関する問い合わせは、慶應義塾大学内、三田図書館・情報学会事務局 (Tel. 03-3453-4511 内 3147) で受付けている。

医学メディアセンターにおける職員勉強会について

よし い ゆき こ
吉 井 由希子

(医学メディアセンター)

1. はじめに

医学メディアセンター（以下、当センター）では職員の勉強会として研究会を行っている。これは1990年に当時の事務長天野善雄が発起人となり、その年の6月に始まったものである。表1は、過去2年の開催記録である。

ここでは、“医学メディアセンター研究会”の全般的な内容および昨年テーマとなったものの一つである雑誌 *Library trends* の抄読会について紹介する。

2. 概要

医学メディアセンター研究会（以下、研究会）は、基本的に月1回、4時30分から6時まで、当センターの建物内の第一会議室にて行われている。勤務時間外ではあるが、自主的な勉強会であること、職員全員が参加できることなどを考えるとこの時間が適当であると思われる。参加対象者は正職員全員であるが特に枠を設けてはいないため、テーマによっては学生嘱託や臨時職員も参加するほか、外部の参加を呼びかけることもある。ただし勤務時間外でもあるため、正職員も強制ではなく、参加は各自の自主性に任せられている。

研究会は、1回にだいたい2つほどのテーマをとりあげて担当者が発表し、皆で討論するといった形式で行っている。発表者は当センター内の職員の他、他の部署や医学部の教員の方などに講師を依頼することもある。

3. 研究会の内容

研究会の内容については、幹事が中心となって年度初めに1年分の計画を立てる。現在、幹事は3名おり、筆者は昨年よりその1人となっている。規模の小さな研究会であるため、内容的にはかなり融通がきき、皆の希望を反映させることができる。

取り上げたテーマは、それぞれの業務の担当者の話、研修会やセミナーなどの参加者の発表、各メディアセンターで話題になっていること、抄読会などであるが、日常業務に直接関わるものからそうでないものまで幅広い。また、通常の研究会の他に、医学部ならではの“医学の知識コース”という連続形式の講義も行っている。

この“医学の知識コース”は1992年に始めたもので、医学部の教員に講師を依頼し、年に一度3～5回連続で、医学分野に関する講義を集中的に受けるというものである。これによって、図書館以外の部分に目を向ける機会になるとともに、普段扱っている資料の内容を理解する手助けになれば、より良いサービスの向上にもつながっていくのである。

4. *Library trends* 抄読会

研究会では、1993年度末から1995年度にかけて、雑誌 *Library trends* の抄読会を行った。*Library trends* Vol.42 No.1 (1993) に“Library and information services in the health sciences”の特集が組まれている。*Library trends* Vol.23 No.1 (1974) でも“Health sciences libraries”という特集を組んでいるが、その後の変化ふまえ

表1 医学メディアセンター研究会開催記録(1994—1995年度)

回	日時	内容	発表者
第44回	1994. 4. 14	私立大学医学図書館評価尺度利用者満足度(修士論文)	村上篤太郎
第45回	5. 12	著作権関係の動向 Uncover サービス Library Trends 抄訳	田中知之 平吹佳世子 吉井由希子
第46回	6. 16	担当者的話—カウンター編— —レファレンス編— Library Trends 抄訳	山田直美 田中知之 市古みどり 平吹佳世子
第47回	10. 20	Internet の話 Library Trends 抄訳	酒井由紀子 市古みどり
第48回	12. 6	Long Range Plan を中心とした NLM の活動と MeSH の改訂	広橋公子
第49回	1995. 1. 12	医学の知識コース 看護学一般	長沼真理子
第50回	1. 19	“ “	内藤寿善子*
第51回	1. 26	“ “	関戸好子*
第52回	2. 28	北里記念医学図書館と私	藤村龍子*
第53回	3. 16	医学分野における日本語図書館の書誌データベース構築 Library Trends 抄訳	窪田よし 酒井由起子 和田幸一
第54回	6. 29	第7回国際医学図書館会議参加報告	酒井由紀子 佐久間公子 佐藤和貴
第55回	7. 19	ネットワーク社会と情報発信 Reference and information services in health sciences libraries 抄訳	市古みどり 和田幸一 角家永
第56回	9. 14	担当者的話—雑誌係— Reference and information services in health sciences libraries 抄訳	五十嵐由美子 平吹佳世子
第57回	10. 12	卒業論文紹介	角家永 岡野純子
第58回	11. 15	Library Trends 抄訳 情報スーパーハイウェイの話 JMLA 基礎研修会参加報告 Library Trends 抄訳	吉井由希子 佐藤和貴 吉井由希子 岡野純子
第59回	1996. 1. 17	'96 MeSH レビュー	岡野純子 吉井由希子
第60回	2. 15	図書館とプライバシー ピッツバーグでの3ヵ月 Library Trends 抄訳	和田幸一 市古みどり 広橋公子

* 看護短期大学教授

て、これからのヘルスサイエンス分野の図書館員の指針や刺激になることを目的として再び組み立てたものである。当センターではこれを読んでみようということになり、研究会で1993年度末から1994年度にかけて取り上げ、論文ごとに分担を割り振った。研究会では、抄読会として毎月1論文ずつ担当者が発表し、また研究会で取り上げなかった論文に関しても、年度末までに担当者全員が抄訳した。

1995年度は引き続き *Library trends* Vol.43 No.4 (1995) (特集: Networked scholarly publishing) と *Current practice in health sciences librarianship* Vol.1 (1994) (特集: Reference

and information services in health science librarianship) の一部を取り上げて抄読会を行った。(表2)

5. おわりに

業務上の疑問点や興味のあることについて人の意見を聞いたり、担当以外の業務について話を聞いたりすることは必要であるが、仕事にそのための時間をとることは難しい。研究会は“勉強会”であると同時に“意見交換の場”ともなり得る。さらに他の部署についてや医学そのものに関する話を聞くことで、メディアセンターという枠

表2 医学メディアセンター研究会にて抄訳した論題および担当者

論 題 / 著 者	担 当 者
「Library and information services in the health sciences」 <i>Library trends</i> vol. 42. no. 1 (1993)	
1. Introduction / Prudence W. Dalrymple	佐藤 和貴
2. Developments in health sciences libraries since 1974 : from physical entity to the virtual library / Frieda O. Weise	佐藤 和貴
3. Shaping medical library education / Fred W. Roper, M. Kent Mayfield	田中 知之
4. The educational role of health sciences librarians / Jocelyn A. Rankin, Jean Williams Sayre	平吹佳世子
5. Library services and health care administration / Holly Shipp Buchanan	佐久間公子
6. Issues in clinical information delivery / Joanne G. Marshall	五十嵐由美子
7. Dissemination of medical information : organizational and technological issues in health sciences libraries / Nancy K. Roderer	広橋 公子
8. Access to biomedical information : the unified medical language system / Stephen J. Squires	市古みどり
9. The status of health information delivery in the United States : the role of libraries in the complex health care environment / Karen Hackleman Dahlen	吉井由希子 山田 直美
10. The development of specialized biomedical information / David S. Ginn	酒井由紀子
11. The health sciences librarian as knowledge worker / Valerie Florance, Nina W. Matheson	和田 幸一
「Networked scholarly publishing」 <i>Library trends</i> vol. 43. no. 4 (1995) より	
1. The evolution of electronic publishing / F. W. Lancaster	岡野 純子
2. Present and future capabilities of the online journal / Thomas B. Hickey	吉井由希子
3. Attitudes in academia toward feasibility and desirability of networked scholarly publishing / F. W. Lancaster	広橋 公子
「Reference and information services in health sciences libraries」 <i>Current practice in health science librarianship</i> vol. 1 (1994) より	
1. General reference services / Nancy Calabretta	平吹佳世子
2. Information technologies : now and futures / Karen A. Butter	角家 永

を越えた広い視野をもてる良い機会となる。また、普段はまだ発表する場の少ない若手も発表者となるため、若手にとっては話を聞くだけでなく発表の場を経験するなど、研究会の利点をあげることができる。

業務の活性化のためにもこうした“勉強会”の時間をもてることは貴重である。研究会は、勤務時間外ではあるが当センターにおいてはすでに公

的なものとなっているため、自己研修と職場研修との両面を持つ。両方の良い面を活かせるよう、皆の意見を反映した内容を取り上げ、すべての職員が何らかの形で参加できるよう工夫し、この研究会の時間を有効に活用しなければならない。

<ティールーム>

山本リンダさん、お元気ですか？

伊藤 公平

山本リンダと聞くと、あのウララーで一世を風靡したホットパンツ歌手を想像されるかもしれない。しかし、ここで紹介するのは、私が UC Berkeley 大学院留学中に知り合った日系2世米国人の Linda Yamamoto である。彼女は私と同じ材料科学科に所属しながら Library and Information Studies (図書館 & 情報) 学科で博士号を目指していたユニークな人だ。1991年に学部生授業の TA を一緒にして知り合った。ウララー山本の派手さを一方の極とすれば、Linda は洒落化をこれ以上省けないほど地味な人であった。牛乳瓶の底ほど厚い眼鏡が彼女の顔そのものである。勿論、大変な勉強家であった。

Linda の話をまとめると図書館学とは長い歴史をもつ由緒正しき学問である。そもそも図書館とは本を提供するのみの場ではなく、町の人々が集会を開き、情報交換を行い、男女が会おう？ 社会生活の中心であった。図書館学ではこの様な図書館でどの様な本を揃えれば人々の生活が豊かになるのかを社会学、政治学、文化人類学、言語学、歴史学等の要素を踏まえて考察する。勿論、図書館運営法や本の分類法についても研究する。素晴らしい学問であるが、この説明では何か今の時代にそぐわない雰囲気も否めない。私は学校の図書館以外の集会に出席したことがないし、今や相当量の情報がテレビやインターネットを通して入ってくる。「“町の図書館”に親しみがない私がいけないのか？」とリンダに尋ねると「いえ、あなたは典型的な現代人です」と答が返ってきた。案の定、古典的図書館学に興味をもつ大学院生達は研究テーマ選別に大苦労だったようだ。いっそ時代にあわせたマルチメディア指向を徹

底すればよいと思うのだが、その様な事に興味を持つ学生達は放送文化、通信、ジャーナリズム等の学科へ進んでしまう。純図書館学の保守的伝統を変えるのは難しいようであった。Linda もはっきりとした研究テーマも決まらないまま高度なコンピュータ・プログラミングの授業を次から次へと受講していた。図書館のデータベース・ネットワーク化、効率的な図書分類のアルゴリズムの開発のために不可欠な技術を取得する。しかし、一般のコンピュータ技師が余りに高給取りのため、自分達の知識で安上がりでコンピュータ化を済ませることも目的のひとつと Linda は教えてくれた。こうなると博士号に相応しい学問というより professional school 的要素が強くなる。

Linda との最後の会話から数年たった昨年、UC Berkeley の Library and Information 学科が廃止された。一部の教員は新設されたデータベース工学・マルチメディア通信中心の Information Management and Systems 学科へ移ったらしい。しかし古典的図書館学関係の教員とスタッフはほとんどがクビと聞き、相変わらずアメリカは厳しいと感じた。私としてはせめて学科廃止前に Linda が学位を取得した事を祈っている。今頃、立派な librarian, Dr. Linda Yamamoto として活躍していると良いのだが...

しかし、あの UC Berkeley の立派な図書館システムを確立した学科なのだから、もう少し現状を踏まえた学問展開をしていれば廃止は免れただろうに、残念だ。今後は、ますますデータベース、オンライン・カタログ等の充実が期待される図書館だが、なんでも知っている“本の博士”みたいな librarian がいなくなるのはやっぱり寂しい。先端技術と古き良き図書館のバランスを考えた融合を各大学図書館では進めて頂きたい。

さて、一部の方々から Berkeley の図書館システムに関する感想を聞かせてほしいとの意見を頂いたが、私の感じたよい点・悪い点は MediaNet 第3号、14頁の磯部徹彦氏の Vanderbilt 大学図書館に関する感想とほぼ一致する。興味のある方はそちらを参考にして頂きたい。(理工学部助手)

分科会レポート

—— レファレンス研究分科会 ——

いし はら とも こ
石 原 智 子

(日吉メディアセンター)

レファレンス研究分科会（以下、分科会）では、「大学図書館におけるレファレンス・サービス」を基本テーマとして研究活動を行っている。今回、1期（平成6年度から7年度の2年間）参加する機会を得たので、その様子を簡単ではあるが紹介してみようと思う。

1. 概要

分科会の会員数は約33名と例年になく大所帯で、顔と大学名を覚えるのも一苦勞であった。図書館勤務の経験年数も長い人が多い。この分科会に何期も継続している人や、他の分科会を経験してきた会員も多かった。レファレンス業務に携わっている者が会員であろうという私の思い込みに対して、閲覧や目録作成を日常業務とするがこの分科会に参加する人もおり、この点は意外に感じた。慶應からは梁瀬氏（三田メディアセンター）と私の2名が参加した。

分科会の主な活動として毎月半日の例会があり、1年目はレファレンス・サービスに関する基本的な課題が取り上げられた。今期は会員数が多く、図書館業務の経験年数も会員により異なっているため、初回はレファレンス・サービスの歴史を概観し、その後は毎月1人～2人の発表者を決め、会員の研究発表を聞くというスタイルで例会が行われた。発表されたテーマの例として、「レファレンスインタビュー」「留学生の為の図書館サービス」「現物貸借」「データベースとレファレンス業務」「電子図書館」等がある。私は「利用者教育の現状と課題」というテーマで複数の大学間でのパネルディスカッションに参加し、意見を交換した。

また分科会では夏期の例会に合宿研修を行っており、平成6年度は「利用者教育」をテーマとして主題分野や利用者層などの観点から数人が発表し、それに対して討議した。平成7年度は「データベース」についてグループ研究及び発表を行った。私が参加したグループでは、新聞記事データベースを主題に、媒体・タイトル別に収録範囲や操作性等について比較研究を行った。合宿研修はまとまった時間を作り研究することができ、会員の親睦も深まるように思える。研究テーマによっては日常業務にも効果的なものであると思う。この合宿研修がベースになり「データベースとレファレンス業務」というテーマで12月に研究部会で発表を行った。

2. 見学会について

分科会では年に1回、見学会を行っており、以下の図書館を見学した。

静嘉堂文庫（平成6年度）

主に和漢書の貴重書が大切に保存されている文庫で、数点の貴重書を特別に閲覧する機会を得た。館員の話によれば「図書も人と同様に息をしており、気象条件や人目にさらされることによって疲労してしまう」らしい。実際に本に触れるということにはなかったが、入室前に手をきれいに洗ったことが印象に残っている。

British Council 図書館（平成7年度）

British Council とは英国政府の非営利団体で、飯田橋にあるこの図書館では英国に関する図書・雑誌・ビデオ・CD-ROM など英国に関する資料を収集している。外国人の利用も多く、少ない職員数ながら親身になってサービスしている専門図

書館であった。

また、各例会で会場校となる大学図書館を見学する機会もある。日頃、他大学の図書館をじっくり見る機会がない私にとっては、とても参考になった。レファレンス・ブックの構成や配置場所、図書館の施設と使い勝手、サービスの内容など、各大学の事情により文字どおり十人十色である。驚いたり考えさせられることもしばしば。日吉メディアセンターが例会の会場になった折にも図書館を見学してもらった。その際には、展示及び日吉ギャラリー、デジタル資料やネットワークを利用したサービスなどが見学者に好評であった。レファレンスデスクが独立しているということも私にとっては当然だと思っていたが「羨ましい」という声があり、驚いた。

3. レファレンス業務とインターネット

世間でインターネットという言葉が一般的になった頃でもあり、平成7年度の研究テーマとして「レファレンス業務とインターネット」という主題で取り上げられる例会が多かった。例えば、戸田慎一氏（東洋大学助教授）の講演を聞いたり、パソコンを使い実体験したりしたのだが、まだこの分野では（少なくとも分科会に参加していた図書館は）世の中から大きく遅れをとっている感が否めなかった。それは、インターネットという言葉を知ったことはあるが、実際どんなことができるのか知らない会員がほとんどで、必然的に基本的な話を中心に、知識の浅い私でさえ教える機会の方が多かったように思うからである。メンバーの話から他大学のネットワーク化の状況も伺うことができた。例えばネットワークの基盤環境を整えることに対して組織の理解が全くない、あるいは予算も計画もないので仕方なく自宅から自分のパソコンで利用している、という会員の話など。これらの人達にとって、分科会は情報交換の場でもあったようだ。「ネットワーク環境を持つものと持たざるものの差が、レファレンス業務にも差をつけてしまう」という会員の言葉が特に印象的であった。そのような苦境にありながら一生懸命にサービスをしようと努力している姿

を見ると、メディアセンターの職員はインフラや技術的な側面においては非常に恵まれ、安定した環境にあることを再認識する。しかし図書館ではようやくサービスを開始したばかりであり、今後ユーザに対してどのようなインターネット経由のサービスを行うべきか考える契機となった。

2年目には会員の中からメーリングリストを開設しようという話が出た。現在では、図書館員用とレファレンス担当者用の2つのリストが存在している。投稿メールの数は少ないが、分科会を終えても横のつながりが保てる点で心強いものである。

4. 分科会を終えて

日吉メディアセンターのレファレンス担当では、「レファレンス」や「レファレンスブック」という言葉を知らない新入生や学部生に対し、参考図書やレファレンスサービスの存在を教えることから始まる点において、塾内の他の図書館と役割を異にしている。そして、特定の主題にかたよらない幅広い分野の質問に答えていかなければならない。ごく基本的な図書館の使い方の利用指導に始まり、効率よく文献を探し出すことができるようになるまで教えるこのサービスの本質は、純粋な「人的援助」業務であることを改めて実感している。対面の場合でも、電子メールでも、レファレンス業務の鍵はコミュニケーションではないだろうか。今回の研修の機会を与えてくださったことに感謝しつつ、培った人脈と経験を生かして、今後もより良いサービスを展開してゆければと考えている。



<スタッフルーム>

子育てと仕事

はせがわ ひろこ
長谷川 博子

我が家の一人娘はこの夏で8歳になった。出産当時は育児休職制が導入されていなかったため、産前6週・産後8週の休暇をとった。ちょうど、ソウルオリンピックが開催されていて、鈴木大地の金メダルに沸き返っていた頃だ。産休明けの10月末には、助産院に子どもを預け仕事に復帰した。まだ首もすわらぬ子どもを、他人に任せることへの不安と後ろめたさはあったが、その反面、また仕事ができるうれしさもあった。洋服を新調し、緊張して理工学情報センター（現在は理工学メディアセンター）に出動したことを覚えている。

それから娘は、教会の保育園で6年余りの楽しい日々を過ごした。活発で元気すぎる娘は、ほとんど病気はしなかったが、夜泣きは豪快で2か月くらいは睡眠不足に悩まされた。また、怪我は何度もあった。椅子の上ののってバランスをくずしそのままひっくり返り、テーブルに後頭部をぶつけて切っちゃったり（女の子なのに後髪を剃られて、傷を固定するテープをはられてしまった）、プールで走ってころんで膝を4針めったり、花火をふりまわし火の粉が飛んで鼻に火傷をしたり、走っている自転車の後輪に足を入れたり（どうなるのか試しにやってみたらしい）……。そのたびに親は真っ青になる。どれも大事にはいたらなかったが、とにかくいろいろやっては心配させる。

小学校に入学してからは、毎週日曜には教会礼拝を欠かさず敬虔なクリスチャン(?)になって少々おしとやかになってきた。まだまだ手はかかるが、私の話し相手になり、いろいろ助言・忠告もしてくれる。それに、母親の仕事に興味を持って、何かと質問してくる。学校の図書室が好きで、読みたい本のところに自分の代本板を入れ、貸出票に記入して

毎日1冊借りてくる。国語の授業の中で、週1度「図書」という時間があり自由に読めるらしい。『まじょシリーズ』（ポプラ社、現在17巻）『かいぞくポケット』（あかね書房、現在15巻）などは全巻読んでいる。図書室に通うにつれて、本の背に貼ってあるラベルに気がつくようになった。「913の本ってみんなおもしろそう」と言うので、「今度はほかの番号のところも見てごらん」と言うのと、日本の歴史や諺や星座の絵本なども借りてきた。今では本の分類を聞かれ、毎日テストされるようになってしまった。勉強は自分からすすんではやらないが、本好きになってくれたのはうれしいことである。

就職して10数年、職場は三田、矢上、日吉、医学と移り4地区を経験した。子どもが生まれてからは無我夢中だった。祖父母が近くにいないため応援は頼めない、夫の仕事は不規則で帰りは遅い、夫婦とも遠距離通勤と仕事を続けるには不利な条件ばかりだ。さらに、去年は夫の神戸への単身赴任までであった。でも、どうにかなるものだ。今の職場（偶然にも看護短大図書室も今年で8歳）に移って、早いものでもう3年目になる。病院はいつもたくさんの患者さんであふれている。仕事でも、他のメディアセンターではほとんど手にしない医学や看護の本を目の当たりにすると、改めて健康のありがたさを痛感する。娘と同じくらいの年の子どもが、点滴をされ車椅子を押されているのを見かけると胸が痛くなる。わが子も他の人の痛みが分かるようになってほしいと思う。健康に育ったことに感謝をし、子どもに多くを望んではいけないと思うのだが、家に帰ると「宿題は済んだの？ 漢字書き取りは？ ピアノは？ 早く勉強しなさい！」とせきたてて、教育ママに変身してしまう（反省、反省）。

子育ても仕事も余裕がなく、決して充分とは言えないが、ここまでできたのは職場の方々の理解と夫と娘の協力のお蔭だと思って、今日も働いている私である。
(医学メディアセンター)

日吉メディアセンターにおける業務改革

—— テクニカル・サービスを中心に ——

たけ まさ つね
武 正 恒

(日吉メディアセンター課長)

1. はじめに

日吉メディアセンターでは、三田メディアセンターの全面的な協力のもとにテクニカル・サービス部門(資料マネジメント担当)のリエンジニアリング(業務の根本的な革新)を、約1年半の準備期間を経て1996年6月より本格的に実施し、整理滞貨の解消及び新たな滞貨を発生させない業務体制の確立、パブリック・サービス部門のサービス拡充に充てる人員を生み出す等の成果を得た。以下にその経緯を報告する。

2. 日吉の状況

日吉メディアセンターでは、センター発足後1年半を経過した1994年10月、既存のサービスを見直し新たなサービスの展開を探ることを目的として、日吉地区の全専任教員を対象に「利用実態調査」を行い、翌年1月にその結果を発表した(回答率18.6%)。この調査によると、メディアセンターに対する教員の期待として、レファレンスサービスの充実、ネットワーク・パソコン環境の整備及びそれに付随する利用支援があげられているが、その一方で「利用実態調査」への低い回答率は、センターへの不信もしくは無関心の現れとも解釈でき、教員を対象としたサービスの改善、新サービスの開発が日吉メディアセンターにとって大きな課題であることが認識された。

加えて整理業務の遅れ(滞貨)は、日吉においても慢性的なものとなり、資料が到着してから実際に利用に供されるまでの期間が和書三ヶ月、洋書十ヶ月という実態は、利用者、特に教員の不信を招き、また整理担当者にとっても業務の展望が

見だしにくく、ともすると無力感に捕らえられかねない状況であった。

義塾は、これらの問題解決のための増員を安易に許す状況になく、日吉メディアセンターはまさに「業務の根本的な革新」が必要とされていたのである。

3. 三田の新方針への同調

三田メディアセンターは、2ヵ年計画で約7万冊の整理滞貨を解消し、選書・収書・整理業務を一層効率的に連携させるべく、資料情報管理部門に

1. 生産管理意識の導入(担当者の意識改革)
2. コンピュータ処理の拡充(必要なシステムを開発)
3. 外部資源の徹底利用(人、データ、システムの利用)

を柱とした新方針を導入し、これに基づく組織改革及びシステム開発を行うことを1994年10月に発表した。三田とは規模こそ違え、類似の状況下でその打開策を模索していた日吉では、これらの方針を慎重に検討し三田とも協議を重ねた結果、下記の5点で日吉にとっても有効な計画であることを認め、日吉での新システム稼働目標を1995年9月として三田のシステム開発に全面的に参加することとした。

1. 整理滞貨図書約7,000冊を一掃した上で新たな滞貨の発生を防ぎ、新規受入図書を早急に利用に供することが可能な体制を確立できる。
2. テクニカル・サービス業務を扱うシステムを、KOSMOS に比べより効率的な外部シ

システムや新規開発のシステムに置き換え、KOSMOSを書誌・所蔵データベースとして利用する。これにより、発注・受入・支払・目録という一連の業務効率を大きく向上させることが期待できる。

3. 資料マネジメント部門の一連の業務を判断・指示を行う部分と、それに基づくデータの作成、修正等の定型的な業務に分割、整理し、前者は専任者、後者は非専任者に担当させ、専任者の負担を軽減する。
4. 上記2、3により生み出した専任者の労働力を、パブリック・サービス部門に転出、既存サービスの拡充、新サービスの開発にあたらせる等、より合理的な業務配分を確立する。
5. 定型的な業務を担当する非専任者を確保するため、労働者（人材）派遣事業会社より人員の派遣を受ける方向で、関係部署と協議する。

4. 日吉における新体制確立

新たなシステムの導入（開発）にあたってその目標を、慶應（日吉、三田）及び書店側に於ける作業工程の重複を出来るだけ省き、より効率的なシステムとすることにおいた。それには、データ（発注・支払い情報、書誌等）と現物（資料）の流れを可能な限り一本化することが必要である。しかし、それぞれに独自の予算をもち、自己完結型の業務を長年行ってきたものを統合し、両地区合わせて年間予算約8億7千万円、5万7千冊（単行書）を扱う体制を新たに作り上げるには、取引書店への協力依頼や担当者同士の打合せを重ねる等の地道な準備作業と、従来の業務の方式にこだわらない柔軟な発想が必要であった。

三田及び関係部署と協議の上で最終的にまとめられた構想は、

1. 三田と統合して行う業務は、原則として雑誌を除いた図書にかかわる部分とする。
2. 選書から目録までの業務の内、日吉は選書、予算管理及び請求記号付与等の統合が困難な業務を、発注、受入、支払、書誌調達及

びその修整などの統合が可能で、かつその効果が期待できる業務は三田が担当する。

3. 両地区の予算を合わせた大量の資料の発注、受入、目録業務を滞りなく行うため、三田は毎日一定量の業務が無理なく流れるよう業務ラインを設定する。日吉は、選書の遅れによって発注・受入が偏らぬよう定期的な選書を行い、これに協力する。
 4. 日吉では、新システムがスムーズに稼働できるよう、事前に整理滞貨を一掃する（これにより、新たな滞貨の発生を防ぐことが出来る）。
 5. 基幹システムとして、丸善㈱の「ちょいす君」を改修したシステムを採用し、塾内ネットワークを通じて日吉にも接続する。また、支払い管理などの周辺業務を支援するサブシステムを新たに開発する。
 6. 資料マネジメント担当職員の退職者1名が不補充であったが、その人件費相当分を、人材派遣費及び書誌調達の委託費予算額とみなし、これに見合う予算措置を行う。
 7. この業務改革により生み出された専任者は、日吉のパブリックサービス向上に必要な要員に充てる。
 8. ただし、KOSMOS データベース改修要員を全て負担する三田を支援するため、日吉は上記要員の内、2名を三田に送る。データベース改修後の2名枠の配属先は、本部の裁量に委ねる。
- というものである。

新システム導入の準備作業として、まず、整理滞貨解消が必要である。これには、1995年11月から翌年3月までの予定で、人材派遣会社より3人/日の派遣を得て事業を開始し、三田の整理協力を得たこともあって予定どおり計画を終了することが出来た。並行して、業務統合の試行措置として、受入係（和書担当）を1996年1月より、同じく洋書担当を4月から三田に派遣、日吉予算の発注・受入、目録業務を三田において行い、具体的な問題点の発掘とその解決に努めた。

この他書店との連絡調整、新年度からの通常業務に対する人材派遣契約の締結（3人/日→2人

/日)、支払い管理の三田集中に伴う打合せ、「ちょいす君」端末の日吉設置等々の諸準備を経て、本年6月より、日吉・三田が共同してテクニカル・サービス業務を行う新しい体制を、正式に発足させることが出来たのである。

5. 今後に残された問題

新しいシステムの試行を開始して約半年、正式業務として発足させて2ヶ月が経過した本年8月現在、データや現物の連絡、遣り取りに時に行き違いがあっても、両地区担当者間の密接な連絡・調整の努力によって解決をみている。これから年度末が近づくと、年間平均処理冊数から割り出した月間処理目標数が、ラインから溢れないか、これまでと異なるシステムで動く予算管理が順調に処理できるか、など不安は残るが、仮にトラブルが発生しても、お互いの協力のもとに速やかな解決が可能であろう。

しかし、いかに十分な準備期間を費やしても日吉、三田で業務を一本化出来ない、あるいは解決を将来に持ち越さざるを得ない問題が若干残ったのも事実である。

雑誌：この度の業務改革では、図書業務を主要な対象としたため、雑誌業務の機械化、雑誌データの週及入力、今後の解決すべき問題として残されている。

ちょいす君：「ちょいす君」がすべてを処理しているわけではない。非図書、中国語、ロシア語図書等は日吉で発注・受入、目録の業務を行い、支払データは、雑誌と同様に「ちょいす君」とは別に開発したシステムを通じて三田に送る。

書店：三田が全ての窓口となることを原則とするが、例外として雑誌、「ちょいす君」が扱えない資料、見計り納品は、日吉が窓口である。なお、日吉の教員、メディアセンターに対する営業活動は、これまで通りである。

選書情報サービス：丸善の商用データベースを検索しても、ネットワーク不備のためプリントアウトが出来ない。このため、教員に対する選書情報サービスの開始が、次年度に持ち

越されている。

請求記号：目録業務統合の目標を、請求記号決定、装備としていたが、日吉の書架目録をデータベース化するにいたらず、書誌確定までの作業を三田で行い、請求記号決定、装備は日吉の担当にとどまっている。

6. おわりに

資料マネジメント業務のリエンジニアリングによって、冒頭に触れた懸案事項の内、整理滞貨を解消し、新規受入図書も迅速に利用に供する体制を確立した上で、専任者を9名から3名に減員、6名の人員を生み出すことができた。

この内1名分は2人/日の人材派遣費及び書誌検索委託費に相当させ、2名はデータベース改修に伴う要員として三田に派遣、3名を日吉のパブリックサービスの要員として活用することになる。

この3名枠を活用して生み出されるサービスは、「教員アンケート」に示されたレファレンスサービスの充実、パソコン・ネットワーク整備に伴う支援サービスの強化はもとより、これまで実態のなかったデジタルメディアサービス、教材作成サービスなどを通じた「教員サービスの拡充」を目指すことになる。

さらに、サービス拠点として教員フロアである図書館棟4階を活用するため、4階で行われていた雑誌業務を1階の資料マネジメントに統合することが、予定されている。

三田との協力、連携から始まった業務改革は、ようやく日吉独自の改革の段階となり、これからその力量が試されることとなる。



理工学メディアセンターの蔵書とその利用

—— 蔵書・貸出統計から ——

たち 館 たづみ
 田鶴子

(理工学メディアセンター課長代理)

1. はじめに

理工学メディアセンターの蔵書は、雑誌や会議録を中心とする一方、学生に必要な学習用単行書への需要も大きく、共に大切な情報源である。自然科学系図書館の場合、雑誌、特に外国雑誌に対して図書予算の多くが当てられるため、為替変動の影響を受けやすく、単行書の購入は予算執行上クッションの役割を果たしている。従って、単行書は短期的な収集計画の連続で終わってしまう傾向にあり、本来の蔵書構成はどうあるべきかを中期・長期に検討しがたい要因がある。しかしながら、数年先を見越した配慮をもって収集していくことは工夫次第で可能であるし、そうあるべきと思う。

当センターの全所蔵冊数は、1996年3月時点で約26万冊であり、これを利用対象者数（3年生以上の学生及び教職員）3,565人で割ると73冊となり、昭和46年に理工学部が矢上台に移転してきた当時の一人当たり32冊と比較して2.3倍になっている。歴史的に振り返れば、日本科学技術情報センター（JICST、現在は科学技術振興事業団）からの寄贈雑誌と理工学部の学科増設に伴う特別予算によって購入された資料によって、当センターの蔵書は増強されてきたといえよう^{1,2)}。そして、理工学部は1996年4月から従来の8学科を改組し、有機的な関連性をもった10学科組織となり今日に至っている。実際に新学科の学部生が理工学部の矢上キャンパスにあがってくるのは2年後だが、今からそのことを射程に入れて収集計画を立てていきたい。今年4月の学科再編成によって新たにできた学科は、電子工学科、物理情報工学科、システムデザイン工学科、情報工学科であ

る。今回の改組では図書の特別予算はついていないが、図書館としては従来の予算枠のなかで、いかに時代に即応した蔵書構成を構築するかが問われている。そこで、最初のステップとして現蔵書の構成を数字で知ることが必要と思われた。また、ここ数年来情報・通信関連の和書を増強する努力を微力ながらしてきたことが利用者にとどのよう受け止められているのかを知るためにも、以下のようなデータを収集し、現状把握を試みたのでここに報告する。

2. 単行書の蔵書構成と貸出統計

図書館コレクションの利用実態を知る方法は様々あると思うが、比較的容易にデータが抽出できるものに貸出統計がある。勿論、貸出冊数のみで利用状況が把握できるわけではないことは議論されてきたところである。自然科学系図書館蔵書の大部分を占める雑誌は貸出をしていない図書館が多く、利用実態を掴みにくいし、単行書でも会議録のようなものは必要な箇所を館内コピーすることで要求が満たされることも多い。しかしながら、蔵書構成を利用状況と関連づけて客観的に把握するために、貸出冊数から分野ごとの利用傾向を知ることが、それなりの意味があると判断した。

2.1 日本十進分類法別集計と貸出冊数の関係

蔵書構成と貸出冊数の関連をみるために、全塾統合図書館システム（以下、KOSMOS）のデータベースから当センターの単行書所蔵のうち、一般図書と図書館学関係図書を日本十進分類法（以下、NDC）別に集計し、グラフ化したのが図1である（1996年7月29日現在）。参考図書は貸出

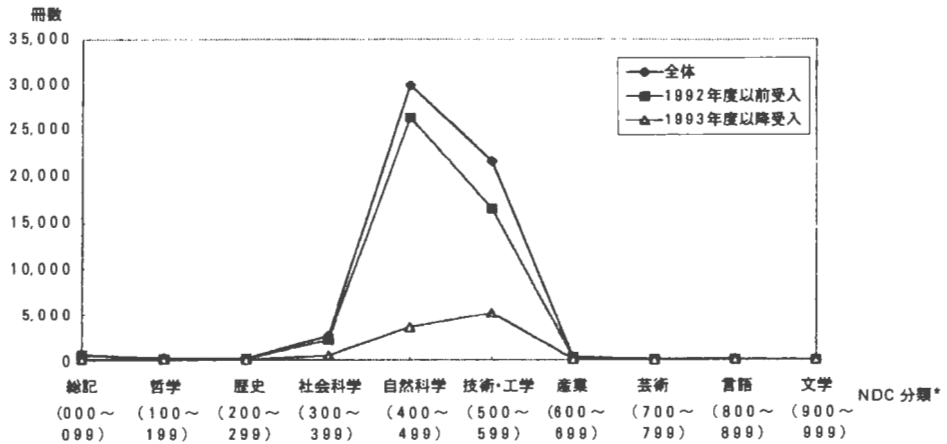


図1 蔵書構成

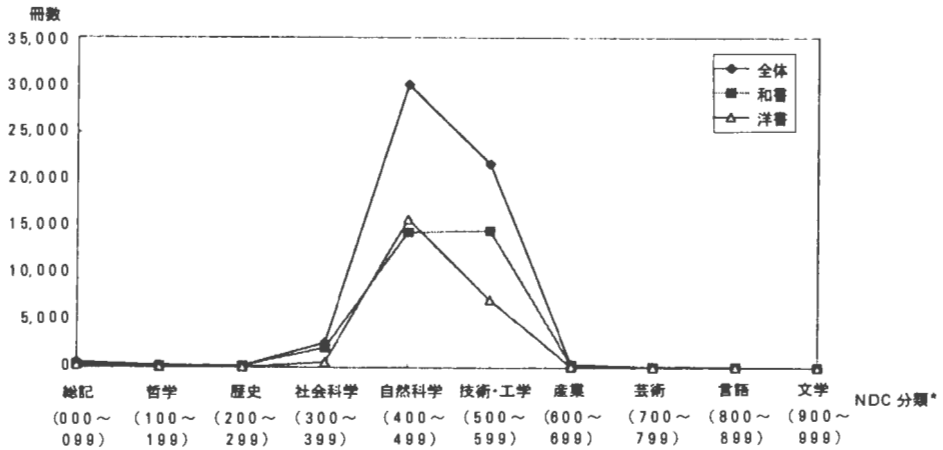


図2 和洋別蔵書構成

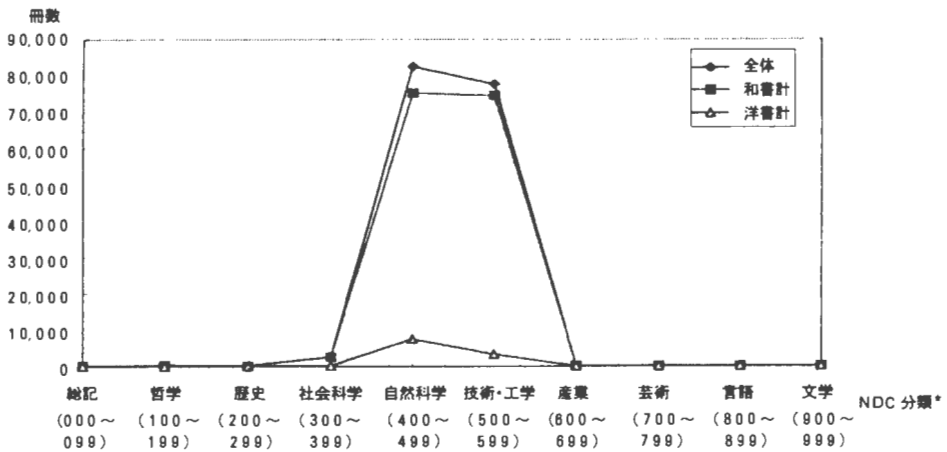


図3 貸出冊数 (1993.4.1~1996.7.29)

* 図1~3のNDC分類中、007(情報科学)は、540台(電気・通信・情報工学)に組み入れた。

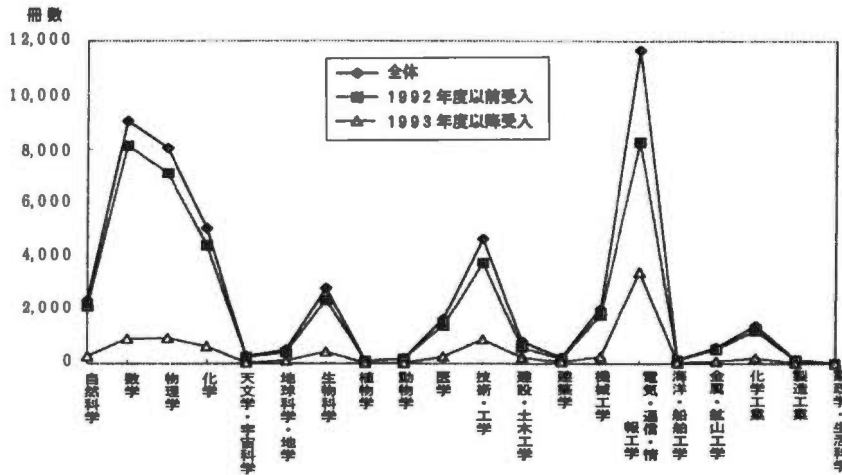


図 4 自然科学・技術分野蔵書構成

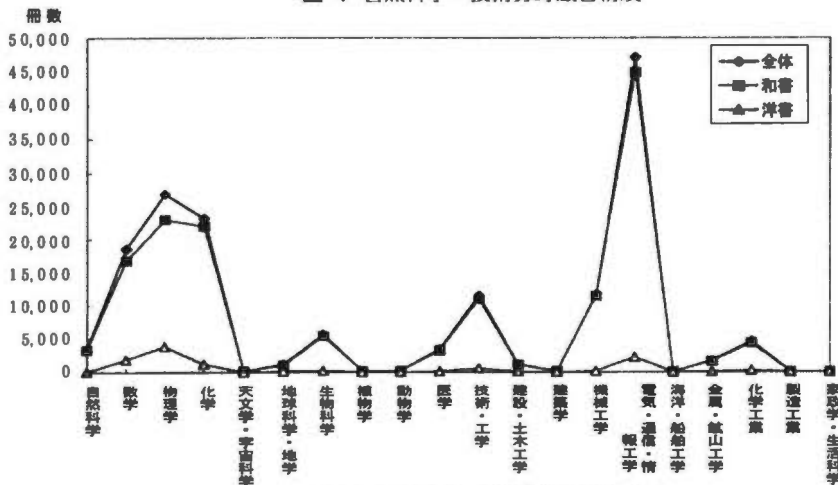


図 5 自然科学・技術分野貸出冊数
(1993.4.1~1996.7.29)

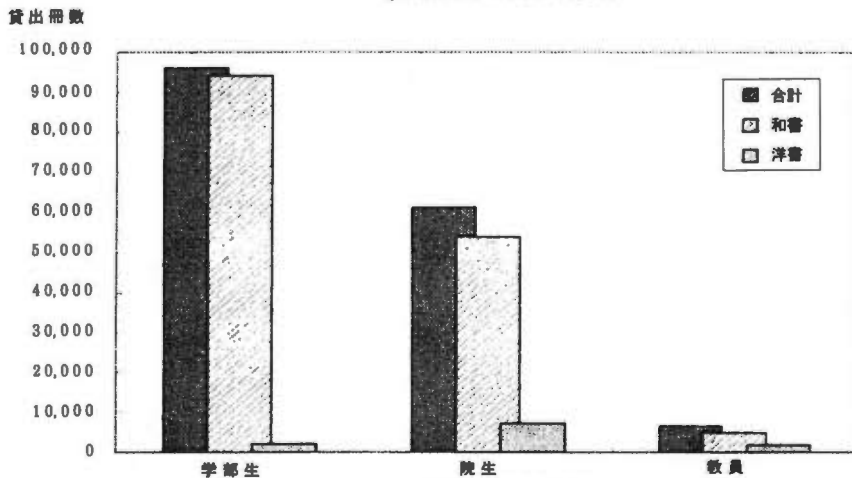


図 6 利用者別貸出冊数

対象にならないことから除外した。図2はその和洋別集計結果である。また、図3は1993年4月1日より1996年7月29日までの40ヵ月分のNDC別貸出統計をKOSMOS貸出記録から抽出したものである。NDC分類では改定8版より情報科学が007(総記の一部)となっているが、ここでは、それと関連の深い電気・通信・情報工学である540台に組み入れた。通信・情報工学(含情報科学)の図書にはフロッピーディスクやCD-ROMの付録がついているものが多く、それも別登録されているため蔵書数、貸出冊数に反映されている。その分、いくらか差し引いてグラフを読む必要はある。

これらの図から、つぎのことがわかる。

- a. 蔵書は、自然科学(NDC 400台)と技術・工学(NDC 500台)に集中している。
- b. 1993年度以降の収集傾向は、自然科学よりも技術・工学に増加が見られ、その誘因となっているのは和書である。
- c. 蔵書数では和書は洋書の35%増し程度だが貸出冊数の大部分は和書である。

2.2 自然科学及び技術・工学分野の蔵書構成と貸出冊数の関係

NDC分類の自然科学と技術・工学だけを、さらに細分類して展開した結果が図4と図5である。この二つの図からは、つぎのことがわかる。

- a. 技術・工学のなかで蔵書数の最も多いのは電気・通信・情報工学(含情報科学)であり、特に1993年度以降の増加が顕著である。
- b. 貸出冊数が最も多いのは、電気・通信・情報工学(含情報科学)、特に和書である。
- c. 自然科学のなかで蔵書数が多い順は、数学、物理学、化学、生物科学であるが、貸出数でみると物理学、化学、数学、生物科学の順となっている。

2.3 利用者別貸出冊数

和洋別貸出冊数を利用者の身分別に集計した結果が図6である。これから、単行書の貸出の大部分が学生であり、和書が圧倒的に多いことがわかる。洋書については、大学院生への貸出が多い。教員の単行書の利用頻度は低い。これは研究室で

必要な図書を購入していることが一因と思われる。

2.4 その他の結果

以下は紙面の関係で表にできないが、結果のみ報告する。

期間中の全貸出冊数を利用対象者数で割った一人当たりの平均貸出冊数は46.7冊となった。年平均一人14冊を貸し出したことになる。さらに、学位論文の貸出総数が2,223冊(1ヵ月平均56冊)あったことも理工学メディアセンターの利用の特徴といえよう。

貸出回数が多いトップ100件を重複図書の処理をした上でリストしたところ、授業に関連した図書(例えば実験の手引き、演習、基本的な教科書など)に利用が集中していた。出版年をみると決して新しいとは限らず、1970年代の図書も多く貸し出されていることがわかった。

3. 考察と課題

蔵書構成と貸出冊数を統計的に処理したことで普段、肌感覚で掴んでいる実態を裏付けることができた。これらの結果から得られたものをまとめながら、これを踏まえて今後の課題を以下にあげる。

- a. 近年、情報・通信関連図書の収集に力を入れたことが、ある程度利用につながっている。また、収集方法として、1994年度以降、自然科学系図書(和書)の見計らいを導入し、それによってより迅速な選書が、内容を確認しながらできるようになったため、動きの速い、出版点数の多い分野では特に有効であったといえよう。
- b. 洋書の収集については全く今後の検討課題である。教員への推薦リスト記入のお願い、カウンターでの購入希望、そして若干の選書による注文だけでは、基本的な教科書さえ落ちてしまう。所蔵している洋書量に比しても利用が少ないのは蔵書に魅力がないことも一因と思われる。提供側だけの問題とはいえない面もあるが、予算運用の難しい時代を迎えているだけに収集方法に工夫が必要であ

る。

- c. 自然科学及び技術・工学分野に蔵書が集中しているのは当センターが理工学専門課程の学生と研究者を主な利用対象者としていることによるが（学部の1～2年生は日吉キャンパスですぐず）、学科の改組に伴って、学際領域の資料を収集するために今後はもう少し幅のある選書をしていかなければならないだろう。収集すべき分野をさらに詳細にみていく必要がある。また、カリキュラムに沿った形で、日吉メディアセンターとの協力も益々重要となろう。現に日吉メディアセンターを利用する理工学部学生はかなりの数に及び、その協力関係に負うところは大きい。
- d. 自然科学のなかで、蔵書数に比して数学の利用がいくらか低かったのは、数理科学科で図書室を持っているためと思われる。しかしながら、数学は様々な分野の基礎として共通に必要な学問であるだけに、図書館としても充実させる意味があろう。
- e. 授業との関連で貸出の多い単行書は決して最近の出版物とは限らない。そのように年代は古くても利用の集中する図書はさらに複本が必要か、検討の余地がある。また、履修案内に出てくる教科書・参考書以外に授業で紹介される図書も多いので、その調査も必要である。

利用者がどんな資料を求めているのかを利用から知るもう一つの目安は相互貸借の申込みである。今年度4月～7月間にどんな単行書を他地区に借用依頼したかを集計したところ、洋書の申込みが多かった。分野で見ると、ここでも電気・通信・情報工学（含 情報科学）が最も件数が多い。その申込み先は主に湘南藤沢メディアセンターである。次に件数の多い経済学、数学は主として三田メディアセンターへ、医学は医学メディアセンターへ申し込んでいる。どこまで資源共有の観点から捉えるべきか、検討の余地があろう。資料によっては理工で揃えるべきものもあり、ケースバイケースで判断する必要がある。

以上、単行書蔵書構成とその利用実態を見てき

たが、冒頭に書いたように、理工学メディアセンター蔵書の中核をなすのは雑誌コレクションであり、そこで、単行書と並行して購読洋雑誌の分野ごとの構成を知るために、基礎データ作りを始めた。昨年来の円安基調が進むなかで、図書予算を効率よく使いながら、蔵書の活性化が失われないよう、新規雑誌を購読し続けるために、本当に必要な資料は何かを追求しなくてはならない。

最後に、メディアセンターはその名称が示すように、メディアに関わらず、利用者である教職員及び学生に必要な資源を用意し、それを容易に利用できる仕組みを構築する使命を持っている。従って、求められる資料が、ライセンス契約によって維持される学術的なデータベースであろうと、あるいは1960年代の古い資料であろうと、多様な要求に対応できるような基盤作りが期待されている。蔵書構成とサービスは表裏の関係にある。より良いサービスにつながるような蔵書を作っていきたい。

この報告をまとめるに当り、KOSMOS の関連ファイルから必要なデータを集計するために、快くプログラムを書いてくださった長島敏樹氏（理工学メディアセンター情報メディアサービス担当）に紙面を借りて深く感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) 小川治之. “理工学情報センターの1つの役割”. KULIC. No. 10, p. 14-18 (1977)
- 2) 森園繁. “理工学情報センターの蔵書を作る：理工学部50周年を中心に”. KULIC. No.23, p. 41-44 (1989)



慶應義塾写真データベースについて

ひら お ころ せう
平 尾 行 蔵

(日吉メディアセンター課長)

あ がた てん
安 形 輝

(三田メディアセンター)

1. はじめに

大学図書館は情報の発信基地であるといわれて久しい。世に公刊される各種の出版物に関する情報を、図書「館」という施設内で作成して利用者に提供する従来型のサービスも広義では発信の名に値するであろうが、ことば本来の意味での発信と呼ぶにはいささかためらいがある。その組織に固有の情報を世に送り出すという肝心のポイントが欠けているからである。

慶應義塾写真データベース検索システムは、私どもの図書館(=メディアセンター)にとって、慶應義塾固有の情報発信という試みの嚆矢である。

慶應義塾の公式的な記録写真は、1970年までは塾史資料室(現福澤研究センター)に、それ以降は広報課に保存されている。スナップ写真ということになれば、各部署に数多く残されているはずである。公式写真を手始めにこれらをデジタル化しインターネット上に載せて広く見ていただこうと考えた。一方、そうすることにより、原写真は、資料利用による劣化から守られ、写真の内容は Photo CD の形で半永久的に保存される。

写真は「……個人の生活だけでなく……集団にまつわる事物、事象、人物などの画像記録である。……写真の一瞥は文章の百読に勝る。……現実には消滅してしまった過去の一瞬の状況を情報として伝える。人は、その情報から画像の意味をその刹那の再現として汲み取ると同時に、それをてがかりに、ときどき画像にはあらわれていない情報を記憶の中から再生し、本来の意味を拡張す

ることもできる。」¹⁾

この着想を実現可能にしたのは高度情報化社会の到来と新しいメディアであった。システム構築可能性の調査は1994年春に行われ、塾内での協議提案承認を経て、1995年度予算化された。当初より株式会社日立製作所との共同研究という形で始められた。同社公共情報営業本部のご協力に感謝したい。

2. 慶應義塾写真データベースシステム

本システムは、インターネット上における WWW (World Wide Web) のホームページとして試験的に公開されている。ホームページとして公開することで、インターネットにさえ接続されていれば世界中のどこからでも、Netscape 社の Netscape Navigator や Microsoft 社の Internet Explorer 等の WWW ブラウザを使うことで簡単にアクセスすることが可能となっている。

2.1 収録されている写真データ

現在このデータベースに収録されているのは、以下の部署が所蔵・所管している総数約1,700枚の写真である(含予定)。

福澤研究センター	約 500枚
医学部史料委員会	約 200枚
三田メディアセンター	約 1,000枚

写真データは、所蔵されている写真を再撮影し、Photo CD 化することによってデジタル化を行っている。その後、Photo CD 形式のデータ中から必要な大きさの画像のみ、WWW 上での画像形式である JPEG、GIF の画像形式に変換し

- 主観的な記述・属性について(レベル3については省略)
- ①福澤諭吉関係
 - 1. 福澤諭吉
 - 2. 福澤関係人物
 - 3. 福澤諭吉資料・福澤諭吉関係資料
 - 4. 福澤諭吉関係行事
 - 5. 福澤諭吉邸・生家
 - ②人物
 - 1. 福澤諭吉関係 (→①)
 - 2. 教職員・塾員
 - 3. 塾生(慶應義塾の生徒)
 - 4. 塾関係人物
 - 5. 三田会
 - 6. その他
 - ③建物・風景
 - 1. 建造物・施設
 - 2. 風景
 - ④行事・スポーツ
 - 1. 行事
 - 2. スポーツ
 - ⑤慶應義塾史料・古地図・旧キャンパス図・その他
 - 1. 慶應義塾史料
 - 2. 古地図
 - 3. 旧キャンパス図
 - 4. その他
 - ⑥年代
 - 1. 幕末・明治・大正(1925年以前)
 - 2. 昭和以後(1925年以後)
 - ⑦地域(キャンパス)
 - 1. 三田(綱町含む) [文学部・商学部・法学部・経済学部]
 - 2. 日吉(日吉台含む) [一般教養課程]
 - 3. 矢上 [理工学部]
 - 4. 信濃町 [医学部・看護短期大学]
 - 5. 湘南藤沢 [環境情報学部・総合政策学部]
 - 6. 短期大学・高等学校
 - 7. 普通部・中等部・幼稚舎
 - 8. 旧キャンパス・旧跡学校
 - 9. 慶應義塾旧跡
 - 10. その他の地域(山中山荘等を含む)

図 1

ている。写真に関する書誌的データについては、以下のような項目についてのデータを作成し、付与している。タイトル、撮影者、撮影日時、大きさ、色彩(カラー、モノクロ)、所蔵者、旧蔵者、使用条件、解説文。

2.2 本システムにおける検索

本システムにおいて検索方法は、大きく「分類による検索」と「言葉による検索」との二つに分



図 3

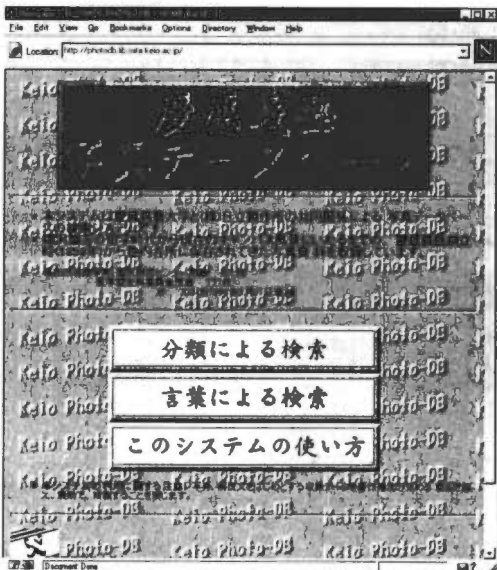


図 2



図 4

けられる。ただし、現在はデータ登録、ユーザーインターフェース等の問題から「分類による検索」は実現されていない。このサービスは来年以降、開始する予定である。「分類による検索」は、どちらかと言えば対象を非専門家としており、言葉を入れずとも分類を選択しながら辿っていけば検索が行えるというものである。簡単な操作によって複雑な検索を行うことができるという点で、このシステムの売りの一つである。「分類による検索」では以下のような7つの観点から検索が行うことができる。福澤論吉関係、人物、建物・風景、行事・スポーツ、史料、年代、地域。この7つの観点を相互に組み合わせることで複雑な検索を可能としている(図1参照)。

「言葉による検索」は、入力された言葉をキーとして写真タイトル、解説文中の全文検索を行うものである。これは「分類による検索」と比較して、あらかじめ検索する言葉が明らかでないと検索が行えないため、研究者などの専門家を対象としていると言える。

3. 検索例

ここでは「言葉による検索」を使って、故小泉信三塾長の肖像を検索してみる。実際のシステムでは、より複雑な検索を行うことができるが、ここでは流れを示すため単純化している。

図2はメニュー画面であり、このシステムの概要と用意されているサービスがあげられている。ここで「言葉による検索」を選択する。すると図3のような検索画面になる。ここでは最初のスロットに語「小泉」をキーボードによって入力する。複数の語を入力する場合にはそれらの語の組み合わせ方(AND, OR)を必要とするが、一語なのでそのまま「検索」ボタンを押す。図示していないが検索結果は7件と出る。ここではどのような写真があるのかを見てから、どの写真を見るか決めることにして、「画像一覧」ボタンを押す。図4のように7件の小さな写真が出てくるので、求める肖像写真を選択すると、図5のようになる。ここでさらに写真の部分を選択するとさらに一回り大きな写真を得ることができる。

4. 今後の課題

インターネットを利用した情報提供サービスである本システムは、試験的な公開が始まったばかりで、まだまだ解決すべき課題が多く残っている。今後は、現在の試験的な運用によって得られるであろう各方面から意見を踏まえ、より利用されるシステムとしてのあるべき姿を模索していく必要がある。

4.1 データベースの拡充

多くのアクセス(利用)数を獲得する魅力的なホームページを作成するためには、内容的な充実が重要である。現在収録済あるいは収録予定のデータは、慶應義塾所蔵の写真全体の中では、ほんの一部にすぎない。データベースシステムは一般的に規模が大きくなればなるほど魅力的になる。そこで、塾内で所蔵されている写真を調査し、データの一層の拡充をはかっていくことができるかと考えている。

4.2 運用管理体制

本システムの開発、データ作成、運用管理の直接担当部署は現在のところ三田メディアセンター情報メディアサービス担当である。この部署は、情報サービス(レファレンス)、デジタルメディアサービス、情報処理支援の3つの機能から成



図 5

る。4年前に情報センターがメディアセンターと組織変更された際には未だ内実のなかったデジタルメディアサービスの2つ目の仕事である(最初の仕事は、学術情報センターの目次速報データベースへの入力業務)。とはいうものの安定的に人材を確保できているとはいいがたく、この面での配慮が今後必要である。

4.3 新技術への対応

アクセス数の多い魅力的なページを作るには、内容的な充実が必要なことは当然であるが、それと同時に、原則的には受動的なサービスであるWWWでは外見のアピールも非常に重要な要因である。世界中に無数にあるホームページの中から本システムのページを選択させるためには、あえて先進技術を取り入れ派手な演出をすることも必要と考えられる。現在のシステムは、技術的にはCGIとHTML 2.0のみを利用しているが、将来的には、HTML 3.2, JAVA, Active X, GIF-Animationなどの技術に対応し、より充実したユーザーインターフェースを持つシステムとしていく予定である。

5. おわりに

本システムがどのようなものであるかを理解していただくのに、もっとも良い方法は実際に観てもらうことである。現在、試験公開中であるが、インターネットに接続できWWWブラウザを持っているのであれば是非ともアクセスをしていただけるとありがたい。現在は慶應義塾のホームページからのリンクははられていないが、将来的にはそこからジャンプして来ることができるようリンクをさせる予定である。現時点での本システムのURLは、

“http://photodb.lib.mita.keio.ac.jp/index.html”である。

また、原写真についてのお問い合わせは、直接所蔵部署にお願いしたい。

参 考 文 献

- 1) 瀧川雅俊. “情報資源化する慶應義塾写真”. 三田評論. 第977号, p. 109 (1996)

メディアネット研究会

平成7年度

- 第4回(平成7年9月25日)
於 三田メディアセンター)
報告者 澤木敏郎「ネットワーク型 CD-ROM サービスについて」
- 第5回(平成7年10月13日)
於 三田大学院校舎)
報告者 鶴野公郎「知のメディアの転換」
- 第6回(平成7年11月13日)
於 三田メディアセンター)
報告者 瀧川雅俊、酒井由紀子
「慶應義塾写真データベース検索システム共同開発報告」
- 第7回(平成7年12月11日)
於 三田メディアセンター)
報告者 松本和子「コレクション・マネジメント——レファレンス・コレクションを中心に——」
- 第8回(平成8年1月29日)
於 日吉メディアセンター)
報告者 平尾行蔵、長島敏樹「これからのOPACを考える——KOSMOS-OPAC 運用調整ワーキンググ

ループ最終報告を中心に」

- 第9回(平成8年3月11日)
於 三田メディアセンター)
報告者 池田真朗「生涯教育と図書館」
- 第10回(平成8年3月27日)
於 三田大学院校舎)
報告者 瀧川雅俊「Living With Books
——大いなる流れの中で——」

平成8年度

- 第1回(平成8年5月27日)
於 三田メディアセンター)
報告者 広田とし子「大学図書館における利用者教育：電子情報源を中心に
して(修士論文報告)」
市古みどり「ピッツバーグでの3
か月：海外図書館中期研修」
- 第2回(平成8年7月15日)
於 湘南藤沢情報基盤センター)
報告者 田屋裕之「プロジェクト電子図書館
について」
見学先 情報基盤センター(湘南藤沢)

書籍とともに

ひ かみ ただし
氷 上 正

大学時代、神戸に下宿をしていた。もう二十年も前のことだ。古い二階建てアパートの四畳半一間の部屋であった。金はないが時間はあるという時期である。三ノ宮周辺の古本屋によく行った。何か欲しい本があって行くというのではなく、入口前の箱に入れてある三冊50円とか100円の本をその時の興味の赴くままに買うためである。原価に比べて何十分の一以下の値段で手に入れるだけで何か得した気持ちになり、その日一日それらの古本をながめているだけで幸せな気分であいられた。

ただ困ったことに、私の居住空間は古本によって次第に狭められ、かつ古い普請なのでドアの開閉も困難になりだしてきた。部屋は二階にあったのでなんだか傾いてきたようでもあった。友人が訪ねてきては、もし地震でもおきたら大変だぞとなかば脅かすように言った。別に本気にした訳ではなかったが、少々不安にもなり、また丁度その頃読んで中島敦の小説「文字禍」にも影響されて、古本をなるべく買い控えることに努めた。

その後、大学院の関係で東京に転居した。これがまずかった。名にし負う古書店の町、神保町が控えていた。元の木阿弥である。新たな居住空間も狭くなり、傾斜ははじめてきた。なんとかしなくてはと思案している時、丁度うまい具合に中国への留学が決まり、これ幸いにと部屋を書庫がわりにして、中国へと旅立った。留守中不用心なので、部屋をたまに見に行ってくれないかと、友人に頼んでいたが、一度見に行くと部屋に閉じ込められそうになったとかで、その後は誰も私の部屋に近付かなかったようである。

中国での留学生活は帰国後のことさえ考えなけれ

ば快適であった。二人部屋に一人で住んだので居住空間は十分であった。中国の書籍は日本の一割近くの値段で購入できた。条件は整った。書店の店員が顔を見ただけで書庫に通してくれるほど日参した。二人部屋が一人で丁度という頃に帰国となった。1.5 m立方の木箱二箱殆どが書籍で一杯になった。予想通り、帰国後はまさに足の踏場もないほどとなり、仕方なく二間の部屋に引っ越した。ただ多くの書籍はダンボール箱に入ったままの状態であった。頭を抱えている時に、ここ慶應義塾大学 SFC（湘南藤沢キャンパス）に職を定めることができた。なにより嬉しかったのは、個人研究室を持てることであった。ダンボール箱は直ちに研究室送りとなった。居住空間はややさっぱりしたが、研究室は災難である。空間はすでに机の回りの数十センチ四方を残すのみとなってきた。学生も危険を察知してかあまり近付かない。

足元のタイルは浮き上がり、徐々にではあるが剥がれてきている。脳裏を過ぎるのは、かつて読んだ中島敦の「文字禍」の中に描かれる老博士の最後の姿である。書籍を必要とする以上、私が生き残る手段は、より大きな空間である場所を利用するしかない。私がメディアセンターに書籍のリクエストを頻繁にだすのはこうした理由からである。ことに昨年の神戸大地震の後にはできるだけそうすることにした。聞くところによれば、私が下宿していた周辺も大きな被害を受けたそうである。

(総合政策学部助教授)



ロシア国立図書館及びラトヴィア図書館との 雑誌の交換について

かく だ ひろ こ
角 田 浩 子

(理工学メディアセンター)

1. 雑誌交換の始まり

現在、日常業務の一部となっているロシアとの雑誌交換。いったいつから始まったのか現場でははっきりと知るものは居なかった。

それは今から30年前の昭和42年へさかのぼる。当時、理工学部の前身である工学部がまだ小金井市にあり、図書館は「図書館小金井分室」から「図書館小金井分館」に昇格して1年半のことである¹⁾。保存書庫としての機能から「情報センター」への道を踏みだすべく、利用者に対する各種のサービスと共に文献収集には特に力を入れ1967年度からモスクワのロシア国立図書館（当時：レーニン図書館）との間で20種以上に及ぶ学術雑誌の交換が行われることになった²⁾。またロシア国立図書館の他にも15～16ある共和国の科学アカデミーに交換を依頼し、そのなかのラトヴィア共和国科学アカデミー図書館（以下：ラトヴィア図書館）には、日本語のできる図書館員がいたことから、ここともかなりの数の雑誌を交換することになったようだ³⁾。

2. 交換雑誌の種類

ロシア国立図書館、ラトヴィア図書館とはお互いにタイトルをリクエストして雑誌交換をしていた。当方からは①ナウカ書店のカatalog②科学技術系図書館に揃えておくべき基本的資料の参考書③American Chemical Society, American Society of Mechanical Engineers, Institute of Electrical and Electronics Engineers といった主要学会から発行された雑誌や、Chemical Abstracts（化学系主要抄録索引誌）にある論文に引用文献

としてあげられている雑誌、これらの3つから理工系の各分野について、交換で受け入れたいタイトルを選んだ。ロシア国立図書館、ラトヴィア図書館からのリクエストも理工系が主であったが、なかには「太陽」「旅」といった一般誌も含まれている。これらの雑誌は理工学メディアセンターで交換用として購入している。

現在、理工学メディアセンターで受け入れているタイトル数は、ロシア国立図書館から32タイトル、ラトヴィア図書館から57タイトルである。また、当方から送っているタイトル数はロシア国立図書館へ33タイトル、ラトヴィア図書館へ52タイトルとなっている。

ちなみに、早稲田大学では約24年前から、ロシア国立図書館とILL業務を行なっている。雑誌交換も行われており、ロシア国立図書館から送られてくる雑誌は約20タイトルということである⁴⁾。

3. 交換雑誌の受入れ状況

ロシア国立図書館、ラトヴィア図書館からの受入れ状況は平均半年遅れで、中には一年遅れでまとめて届く場合もある。当センターからも荷物をまとめて1年間に3回程度の発送をしているので、その遅れもいたしかたないと思われる。また、1991年の政変による着荷の混乱はあまり見られなかったものの、ソ連邦崩壊後は誌名中の組織名が変わったため誌名変更が相次いだ。欠号が目立つのは最近の'93～'94にかけてである。財政難等何らかの影響が出ているのだろうか。

4. 交換雑誌の整理方法

当センターでは一般雑誌は誌名のアルファベット順に配架しているが、ロシア語雑誌は「R 001」や「R 015 KO」等の誌名ごとに決められている「R 番号」を与え、その番号順に一般雑誌とは別に書架に並べている。従って、利用の際には書架に入る前に「R 番号」を調べなければならない。この「R 番号」はJICST（日本科学技術情報センター、現在は科学技術振興事業団）から移管されたロシア語雑誌にふられていたものにならったものである⁶⁾。これは誌名のアルファベット順や分類番号とは関係のない単なる整理番号である。

誌名をたよりに「R 番号」を調べるには1984年発行の冊子体の雑誌目録が使える。館内のカウンター上などに置いてあるこの目録には、数年前までは誌名変更を追記していたので、誌名変更があっても調べることが出来た。しかし、最近はKOSMOSへのオンラインによるデータ入力主流となった。そのため、冊子体目録では旧誌名しか載っていない場合がある。またOPACで探すときにはISSNを使うことができるが、ISSNがわからない場合には、ロシア語誌名のスペルを間違えなく入力しなければならず、少々困難な作業である。

受入れはISSNと「R 番号」の対応表を使って行っている。そのため、ISSNが変わらずに誌名変更したものは、誌名変更を見落としがちである。製本依頼も「R 番号」で処理しているため、こまめに誌名をチェックしないと、後に背文字訂正をしなければならないケースもあり、要注意点となっている。

5. おわりに

1991年12月3日、国立レーニン図書館は資金不足で一旦閉館が決定された⁶⁾が、翌年1月27日ロシア大統領令により「ロシア国立図書館」に改称された⁷⁾。また最近では、財源不足から管理が行き届かず壊滅的な状況に追い込まれているとも報じられている⁸⁾。ロシアの財政難はニュース等でも耳にするが、このモスクワ名所の大図書館に何

とかこの危機を乗り越えて、その歴史とともに3千万冊ともいわれる蔵書⁹⁾を後世に残し、役立ててほしいと願うものである。

今回この原稿を書くに当たって、30年間に渡って続いてきたロシア国立図書館、ラトヴィア図書館との交流のエピソードなどを少しでも知ることができ、今まで以上に雑誌交換業務に関心をもてるきっかけになりました。

最後になりましたが、貴重なお話をいただきました大澤充氏、中島紘一氏、高木理久夫氏に謝意を表したいと存じます。

註・参考文献

- 1) “理工学情報センターへの努力”. 慶應義塾大学工学部報. No. 16, p. 21 (1967. 11. 16)
- 2) “図書館小金井分室が分館に昇格”. 慶應義塾大学工学部報. Vol. 4, No. 4, p. 20 (1965. 10. 1)
- 3) 交換雑誌を始めた当時の経緯やエピソード等のお話を大澤充氏、中島紘一氏に承ることができました。
- 4) 高木理久夫. “ロシア国立図書館との相互協力について”. 早稲田大学図書館報「ふみくら」. No. 38, p. 8-9 (1992. 12. 5)
尚、早稲田大学図書館の高木理久夫氏に直接お話を伺い、リストをいただきました。
- 5) 理工学メディアセンターは1971年より数年に渡りJICST所蔵の雑誌バックナンバーの寄贈をうけた。小川治之. “理工学情報センターの1つの役割”. KULIC. No. 10, p. 14-18 (1977. 10)
- 6) 毎日新聞. 1991. 12. 4, 夕刊, 5面
- 7) 朝日新聞. 1992. 1. 28, 夕刊, 10面
- 8) 朝日新聞. 1995. 7. 11, 夕刊, 9面
- 9) 亀田進久. “世界の国立図書館(7) レーニン図書館”. 国立国会図書館月報. No. 290, p. 22-25 (1985. 5)

蔵書の形成

しほ かわ まさ とし
澁川 雅 俊

(環境情報学部教授)

1. 'フロンティア'

義塾創立50年記念の慶應義塾図書館(旧館)の開館を近代大学図書館の発祥とすれば、84年の時の流れのここ34年間は、激動と言うにふさわしい。激動の様相はまず図書館施設の拡張の経過に表象されようが、最も象徴的な変化は、70年の図書館から情報センターへ、そして93年の情報センターからメディアセンターへの展開であろう。こうした展開は、教育研究支援のひとつとしての図書館サービスに内外在するさまざまな要因がうまくかみ合った結果だとしても、多少メタフォリクな言い方をするならば、「山の彼方」に行ってみようとする義塾図書館専門職たちの夢がインセンティブとなっていたことも忘れてはならない。さらに敷衍するならばわが国大学図書館のフロンティアを開こうとした旧館開設以来のこの人たちの強い意思が言わず語らずのうちに発動された結果でもある。

'フロンティア'、それは、これまでに先人たちが十二分に開拓、開発し確立された世界で、私たちが慣れ親しんだ地域の結界の外周を意味する。三田キャンパスにおいて利用者は、丑寅の隅に位置する図書館に足を運び、今は封鎖されているドライエリアの通用口から入館し¹⁾、一階正面玄関ホールに配置された目録で資料を検索し、「図書請求票」に必要事項を記入し、二階大閲覧室の出納台(法廷の判事席のようなしつらえ)にそれを提出する。いくばくかの時間の後利用者は名前が呼ばれ、出納台の係員(出納手)から資料が交付される。利用者はその資料を大閲覧室(約250席)内で閲読することが許される。これが当時の図書館利用の基本型であった。

このサービスは、当時学問上の明確な理由で来館した利用者に対する資料の供与(館内閲覧)の唯一のメニューであった。その後これは手続の一部が変更されて国立国会図書館など特定の図書館に残っているが、今この情景は義塾では見られない。こうした50年代の図書館空間とその中で提供されるサービスはそれまでに利用者と図書館員が確立したわけだが、利用者はその結界内で情報の収集あるいは知識の習得に動んでいた。

60年代に入って義塾図書館はその結界の外周に向けて展開し始める。その後の展開で皮相に現れたものはさまざまであった。たとえば、図書館資料の増加・増殖・多様化、各種の情報受容機器・装置の導入、コンピュータシステムの導入、多様なサービスメニューの提供、図書館施設の拡張。そしてその背後では、図書館職員の利用者サービス技能の拡張と向上、海外を含む学外学術図書館や情報センターとの連携などなど。そしてこれらの根底に、書物と建物だけを素材とした古い型から脱皮するために、①利用者の資料へのアクセスを確保し、これをさらに向上せしめる、②サービス提供の方策に関する基本構想をシステム思考に基づき内部機能・構造を体系・精巧化する、③利用者の資料アクセスを“館”を越えて提供する、などが図書館運営方針として確認されていた。

2. '正味' と '風袋'

この間のことは93年のメディアネット発足の経緯を報告するに当たり筆者がKULIC 26号²⁾に総括しているが、今にして思えば、これらのことは当たり前のことであろう。しかし義塾の図書館サービスが優れていたのは、その基盤にこうした

基本認識があったことである。ひとつは“資料”観である。資料の命は中味であり、その中味に生命を与える（命を与え、生かし方を制御）のが図書、雑誌、地図、マイクロフィルム、レコード、映画フィルム、ビデオテープ、CD-ROM などと呼ばれている資料媒体であると言う理解、そしてその理解にたつて《情報と情報媒体》と言う見方。そしてそれは「資料」（書物、図書など）と呼ばれようともそう呼ばれていいような没個性なものではなくそれぞれが存在の意味と意義をもっていると言う考え方。そしていまひとつは、力任せに要約すれば、《図書館それ自体を蔵書（＝情報コンテンツ）・施設設備（＝ハードウェア）・サービス³⁾（＝ソフトウェア）・図書館専門職あるいは情報専門職（＝ユーザインタフェース）をシステムコンポネツとする情報メディア》と同定していたことである。そう言う観点からすれば、図書館から情報センター、情報センターからメディアセンターへの展開は自然であるし、また利用教育プログラムが“第二の知識としての情報スキル”を標榜し、いま教育研究支援サービスの先端的メニューとされている機能・構造的背景が理解できよう。

ところで以上四つのコンポネツはこれらのどれひとつ欠落してもそれは成り立たないし、どのひとつが脆弱であってもその構造に歪みを生ずる。

もっとも、たとえそうだとしても図書館あるいはメディアセンターは、現実にはそれらしき働きをする。通常その欠落や脆弱さを補うことを強いられ、しばしばそれ自身の問題を含めて非難を受けるのが利用者との接点に位置する専門職であるが、それはともかく資料あるいは情報を求める利用者にとって第一の要件は、蔵書すなわち“情報コンテンツ”であろう。

せっぱ詰まった情報要求を持つ利用者が最終的に拠り所とするのは、現段階ではやはり資料（印刷物メディア）であろう。施設設備が不備であり、サービスが不行き届きで、係員に頼れないとしても、充実した蔵書があれば当座はなんとかしてその用件は達せられる。これはけして論理的な言い方ではないが、充実した蔵書は、いつかは、

他の要件の整備を促すとも言える。図書館の機能を、利用者の資料アクセスを確保するために、資料を集めてまとめてしまっておき、それをいつでも提供すると言う文言で表現するならば、多少強引だが、蔵書とそれ以外の要素の関係が明瞭になる。つまり主従関係あるいは正味と風袋（外装）の関係は明らかだ。

義塾の蔵書がどのように形成されてきたか『慶應義塾図書館史』にその経過をかいま見ることができる。しかしそれらからその全貌を把握することはできない。蔵書構築と蔵書管理の諸相を明示する事例の数々を採集し、整理する必要がある。‘日用の学問’⁵⁾であれ、学術であれ、それに役立つ情報コンテンツ構築・維持・展開の理念と方法を一般化する試みは基礎事実の採取と蔵書構築論の再編成方法論の検討にいくばくかの時間を必要とするのでここでは放棄するが、今後を期待して筆者の経験⁶⁾からいくつかの事実を以下に回想ふうにまとめてみたい。

3. 拾遺 ‘選書の実相’

◇〈見計らい図書〉の事前選書

義塾図書館の選書は義塾〈社中〉全員参加で行われてきたと言うと奇異に思う人たちが大勢いるだろう。しかし誰がそう決めたと言うわけではないが、筆者の所見はそうである。教員はもとより、非専任の教員や研究者であれ、学生であれ、各自の仕事に必要な資料と教育研究の広い視野から重要な資料だろうと判断したものを図書館に推薦（購入希望の申請）できる。誰が選書するのが最もふさわしいか、選書の意味決定は誰がすべきか、その意思決定の仕組みはどうあるべきかだけでなく、資料収集の裾野を広げないと実効性の高い蔵書構築は望めない。‘全員参加’とはそういう意味である。

専門職であるなしにかかわらず図書館職員もこの中に入るのは当然のことだが、仕事から選書に関して他の人達とは異なった役割を持つ。その役割からいくつかの実務が発生する。なかでも重要なのが事前選書である。実務の内容は、選書担当者（教員・図書館専門職）に選書の対象となる対

象物件を提供するための事前作業、あるいは準備作業である。かつてこの作業は〈見計らい図書〉の収集が中心であったが、筆者は課業として70年から78年まで洋書（英語資料）の事前選書を担当した。作業内容は、国内洋書専門店のアナウンスメントカタログ、“Publishers Weekly”、“Book Sellers”などの出版資料情報誌、“Choice”などの大学図書館選定目録から選書担当者に提供する資料を選ぶことで、具体的には、その中から①三田地区の教育研究主題分野、②義塾図書館の蔵書構築基本方針、③職場で参与観察や直接サービス部門の同僚から採取した利用者の資料要求などを基盤とし、さらに図書予算額・資料利用環境等を考慮して形成した事前選書規準を定めて選別し、これらを取引書店に〈見計らい発注〉することである。書店から提供された見計らい洋書は選書室（現在、三田研究室名誉教授室）に陳列され、常時選書担当者に展示され、担当者はその場で選書作業を行った。

こうした事前選書とその方法は、ひとつには図書館と研究室図書室を統合し70年の三田情報センターの発足と言う当時の状況と、いまひとつには図書館員の選書へのコミットメント促進の意欲と密接にかかわっているが、この間の事情を述べる紙面の余裕がない。

◇ 一括購入

見計らい図書による選書は縮小されたスペースで続いているが、今この方式による選書準備は行われていない。その理由を要約すると、洋書がこれを継続する商品として適さなくなったことに原因がある。一般にわが国の書籍、国内書の多くは委託商品として出版社から取次店、取次店から書店、書店から書店店頭で読者へ、そして持ち込み商品として図書館へ提供されている。〈返本〉が可能なのはそのことに根ざしている。しかし、洋書は原則的には委託商品ではない。したがって本来先の方式での洋書の事前選書は、返本のリスクを書店側が背負っていたからである。70年代に非委託商品である洋書を国内書籍の商慣習に合わせて提供されていたのは、おそらく〔\$=360円〕の背景があったからであろうし、書店の諸経費も低く抑えることができていたからであろう。しか

し円高が進み、1ドル100円程度になると、書店のリスクが大きくなり、積極的に続けることができなくなった。

思うに、この事前選書の作業は筆者自身の技能の向上に極めて有益であった。8年間にほぼ40万点程度の新刊書をブラウズしたであろうか。その1点1点の書誌情報を読みながら、さきに挙げた規準と照合しつつ、これはどんな資料か推察し、そしてそれを選書担当者に提供すべきかどうかを判断した経験は、当たり外れの実感と共に後のキャリアの支えとなった。

事前選書のこうした経験から、義塾の蔵書として選定され受入れられる資料（文学作品を除く）には、書物としてのプロフィール（著作のオーソリティ、主題、文献形式、造本など）の共通性がある、そしてとくにそれは特定の出版社の出版物に顕著である。この経験律が三田情報センターにおける国内書の一括購入制の導入（85年）につながっている⁷⁾。この方式は当初国内出版物に限定したが特定学術出版社の新刊書の一括購入は、重要な〈見落とし資料〉をなくすためにも、また80年代図書予算の充実に伴って急速に受入資料数が増加してきた状況の下で、他のカテゴリーの資料類型で厳選主義で選書に望むためにも、どうしても必要であった。

◇ 稀観書の収集

紙面の制約からここで蔵書の構造を詳細に分析することはできないが、一般にこれを構成する資料類型を粗分類するならば、学術雑誌と共に数量的に大半を占める資料で、エスカルピの言う‘機能書’⁸⁾、それに参考図書（レファレンスブック）と〈原本〉とでも表現すべき資料群に類別できる。事前選書にしても一括購入にしても対象となる資料は‘機能書’に相当し、最多価格帯で一点あたりの価格が3～5千円程度（国内書の場合には1～2千円）の資料で、人文・社会科学分野にあっては各分野のその時々研究成果がとりまとめられたものを中心であった。

ここで〈原本〉と呼んだ資料は教育研究の原典とすべきもので、そのひとつの典型が稀観書である。しかし稀観書が初めからそれとして存在しているわけではなく、すべては機能書ないしは参考

図書としてこの世に生れたものである。最初はそうでなかったものが稀観書となるのは、単にその存在が希少であるが故にではなく、肝心なのは、長い時間の間の学問研究での度重なる利用がそこに優れた価値を付加⁹⁾してきた結果である。それが稀観書の選書の要点でもあるが、その理解がないと、数量の多少は別としても、機能書のように普段に利用されない古びた書物が大学図書館の蔵書に稀観書が架蔵されるにたる根拠を見出すことはできない。

義塾図書館にはそうした価値を有する資料が多く架蔵されているし、また旧館開設以来収集蓄積された機能書群の中にも将来の稀観書が少なくない。歴代の図書館長が蔵書構築にそれぞれの学識下で個別的な収書観を持ち、その時々々の選書を進めてきたが、稀観書収集が義塾の蔵書構築の方針として確立したのは1951年で、当時の野村兼太郎館長の指揮ではじめられ、それ以来収書方針の一つの柱となった。

稀観書収集は野村館長時代後義塾の戦後復興事業への投資が続く間一時的にその実行を休止せざるを得なかったが、75年頃から始まる大学経常費国庫補助を契機に、資料収集財源が整備充実されるようになり、76年アエギデゥスのキリスト教義とアリストテレスの小論文の中世写本(合綴)の受入を出発点として稀観書収集が再開された。その後の稀観書収集は、まず戦前から重要視されてきた西洋経済社会思想史分野の稀観書、野村館長時代に重点が置かれた国史・国文学関係、書誌学資料の補充的収集から徐々に始められたが、新しい分野への展開もあった。その中で特色あるものはいくつか拾い挙げると、科学史・科学思想関連資料、近代博物誌資料、『西洋をきずいた書物』(PMM)¹⁰⁾原典、西洋書誌学資料(古文書学資料、中世写本、インキュナブラ、近世・近代書誌書目など)の収集である。そして緩急の経緯はあっても、慶應図書館蔵書構築の「オリジナルマテリアル収集」¹¹⁾の系譜は、今日の『グーテンベルク四十二行聖書』に繋っている。

稀観書については、高額(一般通念を越えるほど)であるにもかかわらず、学問研究に普段に利用されるものではない、また稀観なるがゆえに厳

重に保管され、教育研究の普段の利用に供されることはない、したがってそれは不急不要なものであると受け止められ、一般にはあまり評判が良くない。こうした批判は、ときとして機能書を含め、蔵書構築のための資料収集全般に拡大されることがある。すなわち、年々増加する十幾万冊の資料はそのすべてが緊急なものではない、受入れられて何年も利用されないものも多いはずである。したがってそれが教育研究に必要なとは言え、極めて投資効率の低い学術資源であるなどと言う。

だが、こうした批判は、選書担当者自身、蔵書が教育研究の伸長とともに充実し相互にそれぞれの伸長を支えることを知り、義塾の蔵書が義塾の教育研究を支えるためにどのように形成されてきたか、その一方で教育研究活動がその必要性からどのような蔵書を求めてきたかを知り、そして野村館長のこの言説、「大学図書館の使命に二つある。一つは学生の攻学に必要な参考書を揃え、その研究の便宜を計り、指導することである。他の一つは、専門家のため善本を揃え、異板を蒐め、原本による根本的検討を可能ならしめることである」¹²⁾の真意を知れば、恐れることはない。

注. 参考文献

- 1) この時代、教職員と図書館学科学学生は現在の正面玄関から入館できた。
- 2) 渋川雅俊。“書物も情報も、そして情報処理も”。KULIC. No. 26. p. 14-18 (1992)
- 3) 各種サービスメニュー、各種利用ガイド、利用規程、目録など利用者の資料と情報の入手に必要な諸装置・手順手続の総体
- 4) 伊東弥之助。慶應義塾図書館史。慶應義塾大学三田情報センター、1972
- 5) 福澤諭吉。学問のすすめ。岩波書店、1980、p. 58 (福澤諭吉選集)
- 6) 筆者は70年三田情報センターテクニカルサービス部収書課係主任(73年課長)を命ぜられ、それ以来本年3月まで、時には資料収集の現場で、時には図書委員会委員として義塾図書館の蔵書構築に参加した。
- 7) 田中美美子。“指定出版社制度による一括購入方法”。KULIC. No. 19. p. 55-62 (1985)
- 8) Escarpit, R. 清水英夫訳。出版革命。日本エディタースクール出版部、1977、p. 27-56

- 9) 澁川雅俊 “稀覯本とマルチメディア(上下)”.
学燈. Vol. 93, No. 2, p. 16-19 (1996. 2), No.
3, p. 31-33 (1996. 3)
- 10) J. カーター, P. H. ムーア編, 西洋書誌研究会
訳, 西洋をきずいた書物. 雄松堂書店, 1977
- 11) 慶應義塾図書館史 Op. cit. p. 224-231
- 12) 慶應義塾図書館善本解題. 慶應義塾図書館, 1958,
p.1

小展示ニュース

<日吉メディアセンター>

平成7年

8月1日～31日

日吉ギャラリー開設記念:メトロポリタン
美術館

9月4日～30日

ステンドグラスとその歴史
——慶應義塾とステンドグラス——

10月2日～31日

映画「ショア」をめぐって

11月6日～25日

中世写本の世界

12月1日～25日

森と湖の国「フィンランド」

平成8年

1月11日～2月10日

復刻「マザーグースの世界」
——オーピーコレクション——(第1期)

2月24日～3月28日

復刻「マザーグースの世界」
——オーピーコレクション——(第2期)

5月8日～30日

世界ことばの旅

6月4日～27日

宮沢賢司 ——生誕100周年——

7月2日～8月29日

近代オリンピック100年

<医学メディアセンター>

1. 常設展示

(於 医学メディアセンター展示ケース)

1.1. シュヴァイツァー自筆書簡

1996. 1. 6 - 1. 31

1.2. シーボルト生誕200年

1996. 2. 7 - 3. 30

1.3. ジェンナーと種痘の歴史

1996. 5. 1 - 6. 30

2. 特別展示

2.1 新年祝賀会展示

(於 新棟11階会議室前)

・シュヴァイツァー自筆書簡

・卒業記念写真帖

(22回、24回、61～65回生の写真帖)

2.2 第65回北里記念式展示(北里講堂ロビー)

・「終始一貫 北里柴」北里柴三郎書

・北島多一胸像

・「非至誠不動 多一書」北島多一書

・「顕微聞幽 多一書」北島多一書

・「獨立自尊 弘堂」林毅陸書

米国の医学図書館におけるレファレンスサービス

いち
市 古 みどり

(医学メディアセンター係主任)

1995年9月下旬渡米。ペンシルベニア州ピッツバーグ大学フォーク医学図書館のレファレンスカウンターで3ヶ月の研修が始まる。まず始めに、レファレンス部門の責任者であるホセインと面接し、今後の研修について話し合う。レファレンスカウンターでの実際の受け答えを柱に、米国医学図書館の実際の業務やテクノロジーを観察し、終了時までには、日本から来ている医学研究者や看護婦を対象にインターネットの講義を実施することを最終目標にしようということになった。

私は医学メディアセンターについての概要を説明し、職員一人一人に挨拶した。用意されたデスクに座ると、そこには電話と2台のコンピュータが用意されていた。さっそく明日からの予定を聞かれ、レファレンスカウンター当番表に私の名前が書き込まれた。

1. フォーク医学図書館のレファレンスカウンター

この図書館では、レファレンス担当の職員が10人、したがって1日あたり1.5時間ほどカウンターのいるだけでよい。

日常のカウンターでの仕事は、医学メディアセンターでの内容と大きな違いはなく、データベース検索方法の指導、資料の所在の確認、外部機関への文献依頼の受付、MEDLINE や Current contents などのデータベースへのリモートアクセス手続きの受付がおもな内容である。

カウンターでは、時間ごとに、受けた内容によって、レファレンス統計が記録される。11月半ばには、より詳細なレファレンス質問に関する調査を行っていた。調査の内容は、電話、カウン

ター、メールで受けたそれぞれの質問を担当した係員が、1件ごとに質問者の所属と質問の内容について調査表に記入していく。質問内容についての分析は、質問のタイプ(場所の指示、所蔵の確認、書誌情報の確認、利用者教育、リモートアクセスの仕方、アカウントの取得方法、ILLのリクエスト、主題検索)、目的(学生・教師の授業の準備、臨床や論文作成、研究助成金のための研究、出版、カレントアウェアネス、患者のケア、自分自身の健康問題、法律、リモートアクセス、発表の準備)、質問の答えに要した時間(1分以内、1-5分、6-10分、11-15分、16-30分、30分以上)、使用した資料(Pittcat というオンライン目録、MEDLINE、その他のデータベース、印刷体の書誌、単行本)を記入し、最後に回答を評価するというものであった。分析結果が出る前に、フォーク図書館を去ってしまったので、どのような結果がまとまったのかは不明であるが、興味深い調査であった。

2. 利用者教育

フォーク医学図書館の利用者教育の内容は、ライブラリーツアー、各種データベース検索に関するもの、インターネットに関するもの、Procite という書誌データマネージメントソフトウェアの使い方やプレゼンテーション用ソフトウェアの一つであるパワーポイントの使い方に関するものなどであった。そのなかには、医師の秘書を対象にしたコースも設けられていた。各ワークショップは図書館の2階にある専用の部屋で行われている。受講者は講師の手順が映し出されるスクリーンを見ながら、一人一台のコンピュータを実際に

海外レポート

使って技術を習得していく。

実際にパソコンの実習をする時間のない人や時間の合わない人のためには、詳細な説明書が用意されている。ある程度コンピュータにさえ馴れている人であれば、これらの説明書で支障なく図書館を効率よく利用できるようになっている。もちろん、これらの内容は、図書館のホームページにも載せられている。

利用者教育は、複数の係員が担当するが、各自ばらばらの内容にならないように、あらかじめ組み立てられたプログラムにのっとって行われる。また、新しくコースを設けたい場合は、メールなどで意見を交換し合い、最終的にはスタッフミーティングで結論が出されるようである。最近の傾向としては、各種アプリケーションのワークショップは、業者に委託して、図書館員は違ったサービスの向上のために労力を費やそうとしているようである。

利用者教育に密接に関係する、リエゾンライブラリアンといわれる図書館員の存在も見逃すことができない。リエゾンとは連携を意味しているが、すなわち医学部ほか看護学部や、歯学部、公衆衛生学部の教員と図書館員とが連携して資料の収集を行ったり、資料の使い方、文献検索の方法などを指導していく活動を行っている。

米国における医学教育では、Problem based learning という方法が注目を集めている。学生は、これまでの受け身的な講義を受けるだけではなく、自ら臨床的な課題に対して問題の解決にあたるという方法であるが、この教育法に医学図書館も協力して、学生の情報収集法の向上に一役かっている。

3. クリニカルメディカルライブラリアン

フォーク医学図書館におけるレファレンスライブラリアンの活動として特筆すべきものの中に、クリニカルメディカルライブラリアンの存在がある。米国におけるこの活動の発端は、1970年代である。医学図書館員が、医師の回診やカンファレ

ンスに同席し、その時に得られた情報をもとに、医師が患者の病気の診断や治療に必要としている文献を的確に探し出して提供することがその主な仕事の内容である。フォーク医学図書館では現在3人の係員が担当している。担当係員は、毎日9時ごろからはじまる内科のカンファレンスに同席する。そこでは、2～3人の医師が担当患者の症例報告をする。症例報告中は、メモをとりながら報告に集中する。専門用語が飛び交い、しかも、ホワイトボードに記録される用語は、省略形と数値が多く、観察者の私にはとても簡単に入りこめる世界ではなかった。参加した係員は図書館に戻ると、さっそく文献検索にとりかかる。ヒットした文献の中から最も的確な論文を取捨選択する真剣な作業がはじまる。この活動について、医師の選ぶ文献と図書館員が選ぶ文献とは大きな差が無く、有意義な活動であることが米国医学図書館協会の雑誌に報告されている¹⁾。

4. 展示と書誌の作成

レファレンス担当者は、一人一人が自分の得意な分野あるいは興味を持って追いかけているテーマを持っている。たとえば、そのテーマは、医学倫理であったりインターネットにおける医学情報の収集や整理であったりする。また、医学部内で行われているセミナーや公開講座などにも、時間が許せば出席して情報を収集する。このような仕事は、展示や書誌の作成に反映されている。図書館の一角にある展示ケースはしばしば図書館員の企画した展示に利用される。私が滞在していた間は、エイズ情報の流れを図式化、立体化した展示を行っていた。さらにこれらの情報を、体系的にまとめあげ、インターネットへの公開に発展させている。たとえば、図1は、エイズ情報のページの一部であるが、54の主題ごとに情報ガイド、フォーク図書館における情報検索法、データベース、インターネット上の主要な情報源、メーリングリスト、ニュースグループ、関係機関、電子ジャーナル、患者情報などをひとまとまりの情報

として提供している。インターネットが普及する以前には、これらの情報は印刷されて図書館のパフレットボックスにおかれていたようである。

5. その他

5.1 サービスの変化

レファレンスカウンターで日常行っているサービスは、日本のサービスとそれほど大きな違いはないと感じたが、ホセインほかスタッフの仕事を観察していたところ、レファレンス質問を受ける

ほか数々のサービスをインターネットで提供できるようなシステムを整えていたようである。私が滞在していたときにはこのシステムは完成していなかったが、現在では、たとえば、図書や雑誌の購入希望(図2)、整理中の図書の閲覧願い、文献検索依頼などの申込書が図書館へ足を運ばずに行うことができるようになっている。

5.2 患者への情報提供

日本の医学図書館の多くは、利用者を医療従事者や学生に限定しているが、米国の公立医学図書館では、利用者を限定していない。したがって、

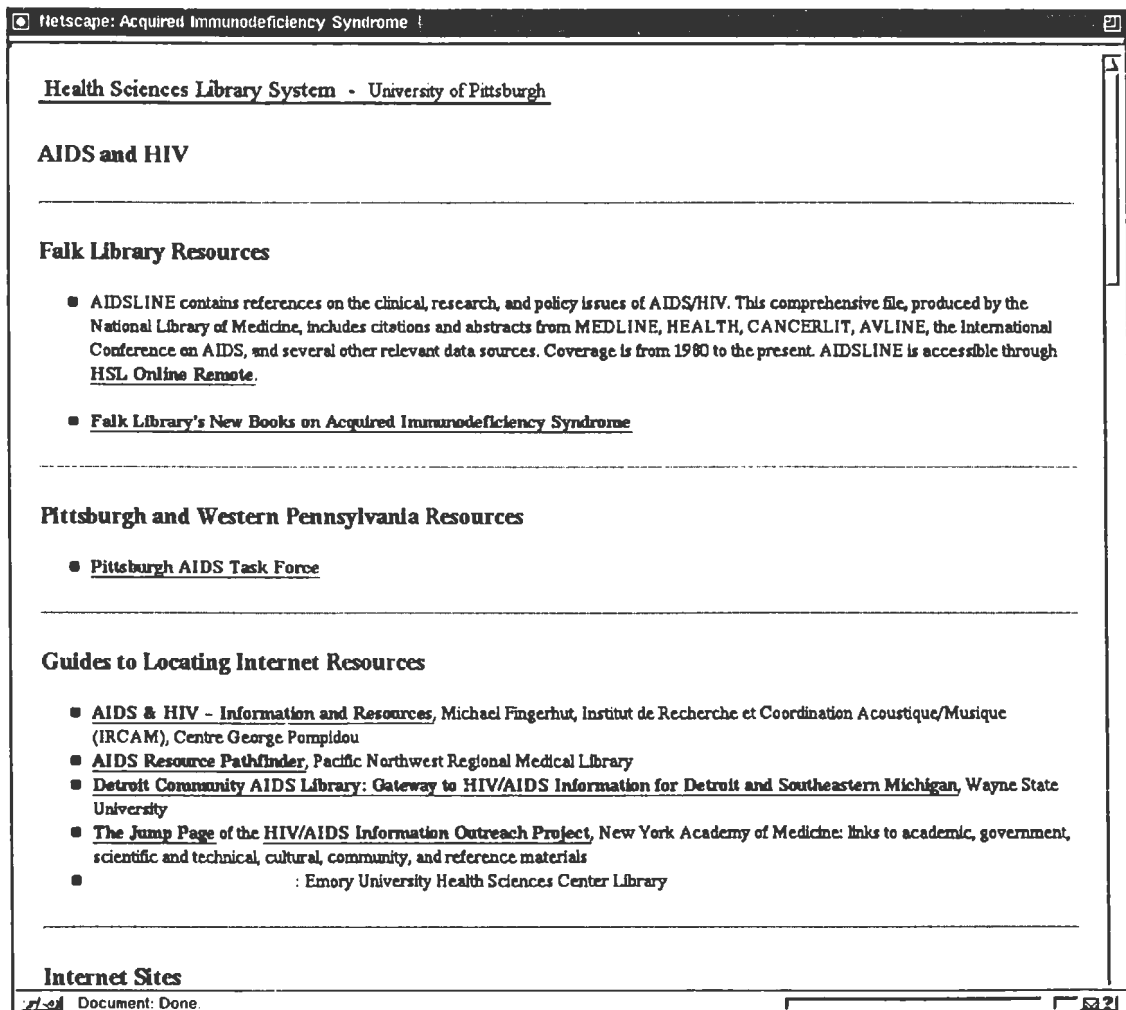


図1 エイズ情報ページの一部

海外レポート

一般の利用者、患者やその家族が図書館を訪れ、必要な情報を集めていく。さらに、専門家以外の利用者のために資料を収集したり、情報検索の道具を揃えている図書館もある。また、体の不自由な人のための机やスロープ、あるいは、目の不自由な人のために作られた活字の大きな利用案内や説明のためのパンフレットが置かれていたりする。図書館員もこうしたサービスに関心を持つ人が多く、メーリングリストなどで活発に意見を交換したり、米国医学図書館協会（MLA）の年次大会では、研究分科会での討議や発表も多くなっている。

5.3 継続教育

医学図書館員の継続教育や OJT は参考にすべき点が多い。これについては、MLA が効果的に機能しているようである。MLA の継続教育コースを受講して単位を重ねることにより、個人の資質の向上はもちろんのこと、よりよいポストを取得できる可能性を持てる。日本とは雇用環境が違うとはいえ、図書館員が常に前向きに仕事に取り組んでいる様子はすばらしい。また、図書館の中では、レファレンス係がレファレンス担当者全員に参考となる情報や、しばしば質問を受ける内容についてレファレンス担当のホームページを作成したり、ミーティングでは、新しい資料の内容の検討や、レファレンス担当者の教育のために作られているビデオを教材に勉強会を行ったりして、新しい知識の獲得を試みていた。ミーティングには担当者全員が出席できるようにするために、人の手配も万全であった。

5.4 図書館長の力

研修中および研修後に訪れた、イエール、コーネル、メリーランド、ジョンズ・ホプキンス、アリゾナ大学の図書館では、館長あるいは、副館長レベルの人と面会することができた。すべて女性でしかも MLA では有名人ばかりである。館長は、人材とお金の獲得、事業の推進に向けての労力をいとわない。常に、大学当局にそのための説得材料を準備している。館長室に通されたらたんに、予算獲得のために業務を分析したグラフを見

Health Sciences Library System - University of Pittsburgh

Journal Purchase Request Form

The Falk Library works to build and maintain a strong health sciences collection. Faculty, students and staff are encouraged to recommend items for purchase. Please complete this form with as much information as possible and submit electronically. You will receive a response to your request and will be notified as to whether or not the item will be purchased.

Bibliographic Information for Item Requested

Title:

Publisher:

Price:

ISSN:

Source of Information:

Additional comments:

Requestor Information

NAME:

Full Internet e-mail address, eg: username@med.pitt.edu
 E-MAIL:

Please select a value from each of the choices below.

AFFILIATED WITH: UPMC and/or School of Medicine

SCHOOL OF: Medicine

STATUS: Faculty

If you have selected Other as a status or need to supply additional information on your affiliation, please enter your affiliation(s) here.

Hours & Telephone Numbers	Health Resources by Subject	Falk Services
New Acquisitions	Service Forms	Internet Guides

Webmaster: falkweb@pitt.edu
 Copyright 1996 Health Sciences Library System. All rights reserved.

図2 図書や雑誌の購入希望フォーム

せてくれたり、組織図を示しながら現在の人員とこれから獲得したい人材について説明してくれた館長の話が印象的であった。ピッツバーグを去るとき、館長のパットに挨拶したところ、米国国立医学図書館のグラント申請の準備で忙しくて、私と話す機会も少なくして申し訳なかったと言われた。

もう何年も前のことになりますが、仕事帰りに澁川さんから「これからどこへ行くんだ？」と聞かれ、「ちょっと英会話」「英語はやっつけよ」と言われたことを今でもよく覚えています。米国滞在中は、手紙やメール、さらに何人かのかたの訪問を受けたほか、医学メディアセンターの皆さんには大変迷惑をかけたばかりでなくお世話になりました。おかげで、私の一つの目標であった、米国の医学図書館での研修を無事にしかも有意義に終えることができました。ここに感謝し、また新たな目標ができたことを報告しておきます。

参 考 文 献

- 1) Kuller, A. B. "Quality filtering of the clinical literature by librarians and physicians." *Bulletin of the Medical Library Association*. vol. 81, p. 38-43 (1993)

小展示ニュース

〈三田メディアセンター〉

平成7年

10月16日～31日

茶室起絵図展

11月6日～22日

浮世絵にみる江戸名勝展；高橋誠一郎コレクション

「浮世絵六種」と三田周辺の風景を中心に

12月11日～22日

写本・音楽・映画によるアーサー王伝説

平成8年

1月16日～2月29日

遠藤周作展—文化勲章受賞記念—

3月4日～31日

ローマン・アルファベット芸術の変遷

—From Palaeography to Calligraphy—

4月10日～5月10日

平成7年度新収稀観書展

6月5日～22日

清親：光と影の絵師

6月27日～7月13日

ウィリアム・モリス：没後100年

7月25日～8月19日

高校教科書に見るクラシックス

変革期にあるアメリカの大学図書館システム

おち あい けい いち
落 合 啓 一

(三田メディアセンター課長代理)

1. はじめに

慶應義塾の職員海外長期研修で、カリフォルニア大学バークレー校に1年間、米国における図書館システムについて調査・研究を行うことができた。

そのためにいくつかの大学図書館で実際に稼働しているシステムについての調査することとしたが、慶應の全蔵書冊数約330万冊以上の蔵書冊数を持つ図書館のみを対象とした。

2. 現 状

表1は蔵書数330万冊以上(1995年 ARL 統計)の大学図書館35校とその本館が使用しているシステムである。

近年、システムのライトサイジング化、UNIX化が言われているが、現状においては、この表からも分かる通り、大規模大学図書館ではIBM汎用機上で動作するNOTISが主流を占めている。この中でUNIX上で機能しているシステムはINNOPAC、UNICORN、HORIZONの3システムであり、35校中6校である。INNOPACの場合現在のバージョンではまだホスト集中型で、クライアント・サーバー型のUNIXシステムは3校を数えるに過ぎない。このうちスタンフォード大学はこの夏に移行したばかりで、安定運用には達しておらず、また同大学の蔵書量に対しパワー不足であるため、他のシステムの補助が必要な段階である。シカゴ大学では今年の初めに新システムに移行したが、まだ実験段階を出ていないという状態での見切り発車の傾向がある。従って、UNIX上で動くクライアント・サーバー型の図書

館システムは、大規模図書館では今年になってようやく端緒についたという状況である。

インターネットを介したOPACは全ての大学で提供されており、WWWを通じて検索可能であるが、telnetまたはtn3270経由のものが多い。一部Z39.50を利用して検索できる大学も現れてきている。これらはLCのZ39.50ゲートウェイ(<http://lcweb.loc.gov/z3950/>)を通して見ることができる。

3. 現在の動き

現状ではいまだ汎用機上のシステムが主流を占めているが、ライトサイジング化、UNIX化の流れは確実なものである。この夏のALA総会の展示においても、各システムベンダーともUNIX上で動く次世代システムを発表している。DEC社のVAX/MVS上で動くDRA、独自のOSを持つGEACも同様にUNIX上で動くシステムを発表している。

米国における次世代図書館システムのキーワードは標準化、クライアント・サーバー化、統合化である。もちろん、既にこれらのことは現在のシステムにもかなり取り入れられているが、その能力を一段と向上させたものが現れてきている。そしてこのような商用ベースのシステムの能力が向上するにつれ、商用システムに移行する館が増え、自館開発のシステムは次第に消えつつある傾向にある。以下に現在の動きをいくつかあげてみたい。

(1) 標準化・規格化

米国においては様々な面で規格化が進んでおり、これについてはNISO(National Information

海外レポート

Standards Organization) が制定を行っている。NISO の前身は Z39委員会であり、ここで制定された規格は Z39.** として出されており、この中では情報検索の定義とそのプロトコルを定義した Z39.50 が特に有名で、昨年第3版がリリースされた。NISO では約60の規格が制定されており、また10以上の規格が検討されている。詳しくは NISO の URL、<http://www.suncompsvc.com/niso/main.htm> を参照していただきたい。これらの規格化は図書館システムに強い影響を及ぼしており、各システムベンダー、あるいは図書館ではこれらの規格をシステムに積極的に反映させるよう努力をしている。

(2) クライアント・サーバー化

ネットワーク技術の進歩と端末として使用するマシンの高性能化によって、いままでホストマシンに全て依存していた作業を端末側で分担させるクライアント・サーバー型のシステムが現れてきた。一例としては検索結果のソート等の作業をクライアント側のマシンが行うというようなものがある。

(3) 統合化

図書館システムの統合化というと、以前は目録、閲覧、受入等の図書館業務を一つのシステムで行うことを指していたが、最近ではそれらのことは図書館システムとしては基本的なレベルのものであり、図書館がコンピュータを介して提供する全てのサービスを一つのシステムとして統合することを指すようになってきている。つまり、自館の目録情報以外にも CD-ROM、あるいはホストコンピュータに搭載された MEDLINE や INSPEC 等のファイルも共通の OPAC インターフェイスを用いることによって OPAC 端末で検索可能なものとしている。

4. 商用システム化

アメリカの大規模図書館では次第に自館開発によるシステムを断念し、商用システムに切り替えつつある。リサーチトライアングルのデューク、

ノースカロライナ、ノースカロライナ工科大学では2年前に DRA に、シカゴ大学では今年初めに HORIZON システムに、スタンフォード大学でもつい最近、NOTIS に独自に大規模に手を入れた SOCRATES を UNICORN に切り替えた。また、カリフォルニア大学ロサンゼルス校も独自の ORION を放棄し、DRA システムに移行することになった。ハーバード大学も次期システムは商用システムを採用する方向で検討しており、わずかにカリフォルニア大学バークレー校の GLADIS、ペンシルバニア州立大学の LIAS が残るに過ぎない。LIAS の方は技術的には最新の技術を取り入れることに成功しており、標準化の面で商用システムをリードしている部分もあるが、GLADIS の方はいまだに Z39.50 の組み込みも終了しておらず、若干開発に行き詰まりを見せているように感じられた。

5. ローカル情報化

OCLC、RLIN といった書誌ユーティリティの充実と規格化によって MARC レベルの書誌・所蔵情報はこれに準拠した形となり、OPAC では各館におけるローカルな所蔵情報（貸出状況、資料の到着状況であるとか製本状況）が重要視されるようになって来ている。カリフォルニア大学では Melvyl という全カリフォルニア大学をカバーする目録情報システムがあるが、Melvyl は各図書館におけるローカルな所蔵情報を反映し得ないため、バークレー校では GLADIS、ロサンゼルス校では ORION、アーウィン、リバーサイド、サンディエゴ、サンフランシスコ、サンタクルーズ校では INNOPAC を採用するようになり、図書館目録情報としての意義においてはカリフォルニア大学内における地位は低下しているようである。

6. 最後に

この様に米国の大学図書館システムは現在変革

海外レポート

表 1 アメリカの大規模図書館の蔵書数と図書館システム

大 学 名	全蔵書冊数	システム名	基本システム	OS	外部からの OPAC 接続方法		
					telnet	tn 3270	Z 39.50
Harbard	13,143,330	HOLLIS	*NOTIS	IBM	○	○	
Yale	9,599,371	ORBIS	NOTIS	IBM	○	○	
U. Illinois, URBANA	8,665,814	MILO	NOTIS	IBM	○	○	○
U. California, Berkeley	8,242,196	GLADIS	GLADIS	TANDEM	○		
Texas	7,176,889	UTCAT	NOTIS	IBM		○	○
Michigan	6,774,515	MIRLYN	NOTIS	IBM	○	○	○
Tront (Canada)	6,713,029	—	DRA	DEC	○		○
Columbia	6,664,748	CLIO Plus	NOTIS	IBM	○		
U. California, Los Angels	6,606,361	ORION	ORION	IBM		○	
Stanford	6,549,725	Socrates	UNICORN	UNIX	○		○
Chicago	5,854,014	LibInfo	HORIZON	UNIX	○		
Cornell	5,835,235	—	NOTIS	IBM	○	○	○
Indiana	5,677,326	IUCAT	NOTIS	IBM	○	○	○
Wisconsin	5,652,885	Madcat	NOTIS	IBM	○		○
Washington	5,471,784	UWCAT	NOTIS	IBM	○		
Princeton	5,292,949	—	NOTIS	IBM	○		
Minnesota	5,241,590	LUMINA	NOTIS	IBM		○	○
Alberta (Canada)	4,968,292	NEOS	DRA	DEC	○		○
Ohio State	4,968,292	OSCAR	IINOPAC	UNIX	○		○
Duke	4,415,525	—	DRA	DEC	○		○
Pennsylvania	4,324,225	Franklin	NOTIS	IBM	○		
North Carolina	4,263,684	—	DRA	DEC	○		○
Arizona	4,225,022	SABIO	IINOPAC	UNIX	○		○
Virginia	4,165,805	VIRGO	NOTIS	IBM	○	○	
Michigan State	3,972,396	MAGIC	NOTIS	IBM	○	○	○
Northwestern	3,775,526	NUcat	NOTIS	IBM		○	○
Iowa	3,665,496	OASIS	NOTIS	IBM	○		○
British Columbia (Canada)	3,647,548	UBICLUB	DRA	DEC	○		
Pennsylvania State	3,632,652	LIAS	LIAS	DEC	○		○
Pittsburgh	3,627,100	Pitt Cat	NOTIS	IBM		○	
Rutgers	3,480,920	IRIS	GEAC	GEAC	○		
New York	3,385,458	Bob Cat	GEAC	GEAC	○		
Kansas	3,379,453	OCAT	NOTIS	IBM	○		
Southern California	3,303,938	Homer	UNICORN	UNIX	○		
Georgia	3,303,268	GALIN	NOTIS	IBM	○	○	

期を迎えているといえる。傾向としては今まで圧倒的なシェアを持っていた NOTIS の市場が DRA や UNICORN といったよりネットワーク志向の高いシステムに浸食されつつあるところである。利用者サービスを向上させるために共通インターフェイスを用いて自館の目録情報以外の情報を統合して提供しようという趨勢も確実なもの

で、これはマルチデータベース同時検索に発展しつつある。また標準化の進展により、書店等との情報交換、ILL のシステム内への取り込みも進んできている。

標準化の面で立ち遅れている日本では今後は一大学レベルを越えた問題が立ちはだかっているように感じられた。

資料 I

メディアネット・メディアセンターに関する書誌 1995.8~1996.7

“マルチメディア化進む図書館：問われる使う側の能力”。東京読売新聞。1995.8.20, 朝刊, 13面
“インターネットの実験工房・慶大湘南藤沢キャンパスの一日”。朝日新聞。1996.7.22, 朝刊, 31面
穴道勉。“電子図書館あるいは図書館の電子化? : 慶應大学湘南藤沢キャンパスを訪れて”。鳥取大学医学図

書館ニュース。Vol.27, No.3, p.1-4 (1996.5)
金子章道。“塾コンピュータ網近く医学部にも開通”。慶應義塾医学部新聞。No.541, p.1 (1996.7.20)
和田幸。“加盟館紹介：慶應義塾大学医学メディアセンター”。医学図書館。Vol.42, No.3, p.269-270 (1995.9)

資料 II

スタッフによる論文発表・研究発表 1995.8~1996.7

〔論文発表〕

〔三田〕

藤井康子。“レファレンスサービス：図書館における情報サービス（書評）”。図書館雑誌。Vol.89, No.9, p.773 (1995.9)
廣田とし子。“文献の探索とデータベースの利用”。卒業論文の手引。新版。慶應義塾大学通信教育部編。東京、慶應通信、1995, p.19-39。
廣田とし子。“文科系学生のための文献調査ガイド（書評）”。専門図書館。No.156, p.47-48 (1995.11)
廣田とし子。“大学図書館における電子情報源の利用者教育調査”。Library and Information Science。No.33, p.83-98 (1996.3)
廣田とし子。“特集「大学図書館と専門図書館」を組むにあたって”。専門図書館。No.159, p.1-2 (1996.7)
廣田とし子。“平成8年度全国研究集会に参加して”。専門図書館。No.159, p.32-34 (1996.7)
廣田とし子。“大学図書館の情報基盤としてのインターネット：First Searchの導入を一例として”。情報の科学と技術。Vol.46, No.7, p.412-415 (1996.7)
加藤好郎。“特集 阪神・淡路大震災と図書館”。図書館年鑑。1996, p.270 (1996)
村上篤太郎。“合宿研修に参加して”。鳥。No.106, p.9-10 (1995.12)

村上篤太郎。“大学におけるプレゼンテーション：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの場合”。情報の科学と技術。Vol.46, No.4, p.220-226 (1996.4)
斎藤勉。“平成6年度版『財務状況の概況』を解説する”。大学時報。Vol.45, No.247, p.106-115 (1996.3.20)
澁川雅俊。“図書館とコンピュータ”。西日本文化。No.318, p.31-33 (1996.1)
澁川雅俊。“情報資源化する慶應義塾写真”。三田評論。No.977, p.108-111 (1996.2)
澁川雅俊。“稀覯本とマルチメディア上”。学燈。Vol.93, No.2, p.16-19 (1996.2)
澁川雅俊。“稀覯本とマルチメディア下”。学燈。Vol.93, No.3, p.31-33 (1996.3)
白石克。悠悠逍遥江戸名所。東京、小学館、1995, 399p。
山下光雄他編。腎臓病食品交換表：治療食の基準。第6版。東京、医歯薬出版、1996, 142p。
山下光雄。“日本中世料理書の研究 古今調味集 1”。別府大学短期大学紀要。No.15, p.1-17 (1996.1)
山下光雄。“日本中世料理書の研究 古今調味集 2”。広島文教女子大学紀要。Vol.30, p.1-21 (1995.12)
山下光雄。“日本中世料理書の研究 古今調味集 3”。蘭女子短期大学紀要。No.38, p.1-32 (1996.2)

- 山下光雄. “日本古典料理の研究 9. しゃくはいぜんよろづのしつけ”. 梅花女子短期大学紀要. No.44, p. 55-67 (1996.3)
- 山下光雄. “スポーツと栄養 1 新しい時代はまずリエンジニアリングが必要となる”. 病院・レストラン. Vol.4, No.1, p.34-35 (1996.1)
- 山下光雄. “スポーツと栄養 2 栄養士はクライアントと共通の言葉で”. 病院・レストラン. Vol.4, No.2, p.34-35 (1996.2)
- 山下光雄. “スポーツと栄養 3 栄養指導の第一歩はバランスを考えること”. 病院・レストラン. Vol.4, No.3, p.34-35 (1996.3)
- 梁瀬三千代他編. 情報探索ガイドブック: 情報と文献の森の道案内. 東京. 勁草書房, 1995, 389p.
- 梁瀬三千代. “大学図書館における CD-ROM の利用者教育”. 図書館雑誌. Vol.90, No.5, p.298-299 (1996.6)
- [日 吉]
- 天野善雄、廣田とし子、金子康樹、木下和彦. “コンピュータを活用した利用案内システムの構築について”. 塾監局紀要. No.22, p.42-46 (1995.9)
- 平尾行蔵. “鬼をくすぐった話”. 三田評論. No.977, p.119 (1996.2)
- 石黒敦子. “図書館から”. 慶應通信. No.570, p.7 (1995.9)
- 石黒敦子. “新規加盟館紹介: 慶應義塾大学日吉メディアセンター”. 神図協会報. No.174, p.5 (1995.10)
- 石原智子. “「学問のすすめ」にもいろいろ種類があります”. レファレンス研究分科会ニュース. No.95-11, p.6-7 (1996.4.13)
- [矢 上]
- 原田彩子. “新任者自己紹介”. 矢上台ニュース. No.121, p.12 (1996.7.29)
- 森下樹美代. “新任者自己紹介”. 矢上台ニュース. No.121, p.12 (1996.7.29)
- 清野早苗. “日本原子力研究所東海研究所科学技術分科会バスツアー”. Newsletter せんときょう・かんと. No.140, p.24 (1995.11)
- [信濃町]
- 平吹佳世子. “文献の超整理法”. 臨床栄養. Vol.88, No.4, p.394-397 (1996.4)
- 市古みどり. “初めての文献検索入門 1”. Lisa. Vol.2, No.10, p.68-71 (1995.10)
- 市古みどり. “初めての文献検索入門 2”. Lisa. Vol.2, No.11, p.78-82 (1995.11)
- 市古みどり. “最近のアメリカ図書館事情”. Lisa. Vol.3, No.6, p.590-593 (1996.6)
- 市古みどり. “医学図書館でのインターネットの活用”. 情報の科学と技術. Vol.46, No.6, p.379-381 (1996.6)
- 市古みどり. 21世紀の医学図書館. 東京, 日本医学図書館協会, 1996.5, 15p.
- 市古みどり. “医学資料”. 情報探索ガイドブック: 情報と文献の森の道案内. 情報探索ガイドブック編集委員会編. 東京, 勁草書房, 1995.9, p.201-215.
- 佐久間公子. “Book Reviews: 患者の悩み Q&A300: 外来診療を活かすために”. 医学図書館. Vol.42, No.4, p.497-498 (1995.12)
- 和田幸一. “加盟館紹介: 慶應義塾大学医学メディアセンター”. 医学図書館. Vol.42, No.3, p.269-270 (1995.9)
- [研究発表]
- [三 田]
- 廣田とし子. “大学図書館におけるインターネットの活用事例”. 神奈川県内大学図書館相互協力協議会実務担当者会. 1995.11.7, 横浜市立大学
- 廣田とし子. “大学図書館の情報基盤としてのインターネット”. 神奈川県図書館協会職員研修会. 1996.6.25, 鶴見大学図書館
- 石黒敦子. “大学図書館とレファレンス: 主として人文・社会科学”. 平成7年度専門図書館協議会関西地区女性スタッフ交流研究会講演会. 1995.11.30, 大阪商工会議所
- 加藤好郎. “図書館員の教育システムについて: アメリカの現状と日本の現状そして今後の展望”. 私立大学図書館協会パブリック・サービス研究分科会. 1995.8.6, 麗澤大学セミナーハウス
- 加藤好郎. “三田メディアセンターのリエンジニアリング”. 早慶合同合宿研修題目講演. 1995.10.5, 渋谷生協コーポ
- 村上篤太郎. “コンテンツとしてのデジタル情報構築と図書館員のあり方”. 第13回医学情報サービス研究大会. 1996.6.29, 愛知県ガンセンター
- 新倉利江子. “テクニカル・サービス部門のリエンジニアリング: 慶應義塾大学の場合”. 第57回私立大学図書館協会総会・研究大会. 1996.7.26, 仙台国際セン

ター

澁川雅俊，“開放進化型大学と利用教育”，第9回21世紀への大学図書館国際シンポジウム，1996.3.6，京都外国語大学

栗瀬三千代，“総合図書館におけるarsの実際とその課題”，アートドキュメンテーション研究会 ars-wg. 1996.7.27，女子美術短期大学図書館

[矢上]

長島敏樹，“LANを利用したCD-ROMの利用活性化”，神奈川県資料室研究会平成8年度6月例会，1996.6.21，神奈川県立川崎図書館

館田鶴子，“医学図書館における蔵書構築”，日本医学図書館協会第2回医学図書館研究会継続教育コース，1995.11.15，東京大学

[信濃町]

市古みどり，“研究のための文献検索：CD-ROMを用いた検索法”，第4回日本看護学教育学会ワークショップ，1995.8.3，順天堂大学有山記念館

市古みどり，“アメリカの最近の図書館事情：最近訪問した図書館で気づいたことを中心に”，第2回医学図書館員研修会，1995.8.17，自治医科大学地域医療情報研修センター

市古みどり，“インターネットと図書館情報”，第5回日本コンピュータサイエンス学会学術集会，1996.3.24，国立がんセンター研究所セミナールーム

和田幸一，“慶應義塾大学医学メディアセンターにおける選書ツール：インターネットの利用を中心に”，第2回医学図書館研究会，1995.11.13，東京大学医学図書館

展示会 予告

「ANATOMIA : ダヴィンチから解剖図譜の歩み」

平成9年1月27日(月)～2月1日(土) 10:00—19:00 (最終日は17:00まで)

丸善 日本橋店 4F ギャラリー

慶應義塾図書館・北里記念医学図書館の蔵書の中、近世ヨーロッパから明治前期までの解剖図譜・画像など約80点を、展示し解説いたします。

主な展示資料としては、ヴェサリウス『人体の構造』1543。グイーディ『外科学—ギリシャ語からラテン語に』1544。エティエンヌ『人体解剖図譜』1546。フック『ミクログラフシア』1665。マルピーギ『植物解剖学』

1675-79。ハラー『解剖図集』1743-56。アルピヌス『人体の骨格・筋肉図譜』1747。デュヴェルネ『頭部解剖図』1748。クリュヴェイエ『病理解剖学』1829-42。山脇東洋『臓志』1759。河口信任『解屍編』1771。杉田玄白『解体新書』1774。南小柿寧一『解剖存真図』肉筆。宇田川玄真『医範提綱』1805。などの初版・原典が挙げられます。

資料 III

年次統計資料 <平成7年度>

I. 図書費 <平成7年度実績及8年度予算>

各メディアセンター 内 訳	平成7年度実績 <単位：円>			平成8年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田メディアセンター	741,909,937	18,940,026	760,849,963	715,296	20,342	735,638
図書館	413,421,349	18,940,026	432,361,375	368,093	20,342	388,435
学部*	328,488,588	—	328,488,588	347,203	—	347,203
(私大研究設備相当額)	(26,846,000)	—	**	—	—	**
日吉メディアセンター	172,452,937	4,954,267	177,407,204	176,765	5,087	181,852
図書館	66,109,937	2,987,389	69,097,326	67,763	5,087	72,850
学部*	106,343,000	1,966,878	108,309,878	109,002	—	109,002
(私大研究設備相当額)	(6,926,288)	—	**	—	—	**
医学メディアセンター	157,209,100	7,524,022	164,733,122	161,140	10,480	171,620
医学メディアセンター	157,209,100	7,524,022	164,733,122	161,140	10,480	171,620
理工学メディアセンター	171,085,730	3,818,760	174,904,490	176,310	4,202	180,512
理工学メディアセンター	170,585,730	3,818,760	174,404,490	176,310	4,202	180,512
指定寄付金	500,000	—	500,000	—	—	**
(私大研究設備相当額)	(1,500,000)	—	**	—	—	**
湘南藤沢メディアセンター	180,024,717	26,288,654	206,313,371	180,000	27,350	207,350
湘南藤沢メディアセンター	180,024,717	26,288,654	206,313,371	180,000	27,350	207,350
合 計	1,422,682,421	61,525,729	1,484,208,150	1,409,511	67,461	1,476,972

注) * 特別図書費は含まず。

** () 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時に手当したものの。

II-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

内 訳 各メディアセンター		単 行 本			製 本 雑 誌			非 図 書 資 料	合 計
		和	洋	計	和	洋	計		
年 間 受 入 冊 数	三田メディアセンター	29,314	28,986	58,300	7,201	7,191	14,392	5,763	78,455
	図 書 館	(23,142)	(14,952)	(38,094)	(4,561)	(2,416)	(6,977)	(1,833)	(46,904)
	学 部	(6,172)	(14,034)	(20,206)	(2,640)	(4,775)	(7,415)	(3,930)	(31,551)
	日吉メディアセンター	13,463	5,442	18,905	1,624	2,225	3,849	1,338	24,092
	図 書 館	(10,914)	(769)	(11,683)	(926)	(126)	(1,052)	(382)	(13,117)
	学 部	(2,549)	(4,673)	(7,222)	(698)	(2,099)	(2,797)	(956)	(10,975)
医学メディアセンター	2,142	1,392	3,534	2,297	5,344	7,641	1,469	12,644	
理工学メディアセンター	2,679	1,182	3,861	1,988	5,585	7,573	399	11,833	
湘南藤沢 メディアセンター	8,550	6,864	15,414	2,672	2,476	5,148	1,753	22,315	
合 計		56,148	43,866	100,014	15,782	22,821	38,603	10,722	149,339
所 蔵 冊 数 累 計	三田メディアセンター	722,553	799,094	1,521,647	198,815	200,113	398,928	92,341	2,012,916
	図 書 館	(500,905)	(455,659)	(956,564)	(121,101)	(73,955)	(195,056)	(53,570)	(1,205,190)
	学 部	(221,648)	(343,435)	(565,083)	(77,714)	(126,158)	(203,872)	(38,771)	(807,726)
	日吉メディアセンター	321,732	165,712	487,444	41,991	52,282	94,273	17,181	598,898
	図 書 館	(239,224)	(25,981)	(265,205)	(27,200)	(2,039)	(29,239)	(5,867)	(300,311)
	学 部	(82,508)	(139,731)	(222,239)	(14,791)	(50,243)	(65,034)	(11,314)	(298,587)
医学メディアセンター	40,228	41,829	82,057	61,007	127,148	188,155	5,950	276,162	
理工学メディアセンター	59,748	34,562	94,310	42,957	121,974	164,931	1,699	260,940	
湘南藤沢 メディアセンター	85,783	69,459	155,242	20,674	15,559	36,233	13,241	204,716	
合 計		1,230,044	1,110,656	2,340,700	365,444	517,076	882,520	130,412	3,353,632

注) 三田メディアセンター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

Ⅱ-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 各メディアセンター	カレン ト			ノンカレン ト			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター 図書館 学部	5,878 (2,549) (3,329)	4,579 (1,116) (3,463)	10,457 (3,665) (6,792)	5,627 (3,461) (2,166)	3,340 (1,718) (1,622)	8,967 (5,179) (3,788)	19,424 (8,844) (10,580)
日吉メディアセンター 図書館 学部	1,082 (651) (431)	906 (87) (819)	1,988 (738) (1,250)	751 (326) (425)	1,113 (29) (1,084)	1,864 (355) (1,509)	3,852 (1,093) (2,759)
医学メディアセンター	1,621	1,974	3,595	1,071	1,606	2,677	6,272
理工学メディアセンター	1,191	1,649	2,840	3,049	5,256	8,305	11,145
湘南藤沢 メディアセンター	1,117	1,285	2,402	389	252	641	3,043
合計	10,889	10,393	21,282	10,887	11,567	22,454	43,736

参考データ：非図書資料

内 訳		種 別	マイクロ資料 CD-ROM	A-V 資料	合 計	
年 間 新 規	三田メディアセンター	タイトル数	251	54	305	
		筒 数	5,133	630	5,763	
	日吉メディアセンター	タイトル数	113	132	245	
		筒 数	788	550	1,338	
	医学メディアセンター	タイトル数	71	134	205	
		筒 数	958	511	1,469	
	理工学メディアセンター	タイトル数	183	25	208	
		筒 数	323	76	399	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	112	162	274	
		筒 数	1,368	385	1,753	
	累 計	三田メディアセンター	タイトル数	1,981	8,082	10,063
			筒 数	77,493	14,848	92,341
日吉メディアセンター		タイトル数	745	3,354	4,099	
		筒 数	9,465	7,716	17,181	
医学メディアセンター		タイトル数	106	1,551	1,657	
		筒 数	1,991	3,959	5,950	
理工学メディアセンター		タイトル数	282	163	445	
		筒 数	1,319	380	1,699	
湘南藤沢メディアセンター		タイトル数	546	1,741	2,287	
		筒 数	10,344	2,897	13,241	

Ⅲ-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内 訳 各メディアセンター	館 外 貸 出				館 内 閲 覧		前年度比 館外貸出(計)
	教 職 員	学 生	そ の 他	計	一般図書	貴重書	
三田メディアセンター	17,977	176,496	11,299	205,772	*	795	1.05
日吉メディアセンター	9,304	138,534	7,167	155,005	*	—	1.07
医学メディアセンター	61,757	24,958	21	86,736	*	—	1.05
理工学メディアセンター	2,542	53,256	28	55,826	*	—	1.09
湘南藤沢メディアセンター	2,780	66,425	760	69,965	*	—	1.13
合 計	94,360	459,669	19,275	573,304	*	795	1.07

*開架のため実数不明。

Ⅲ-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内 訳 各メディアセンター	依頼をうけた(貸)			依頼した(借)			合 計
	国 内	国 外	計	国 内	国 外	計	
三田メディアセンター	2,650	15	2,665	1,038	414	1,452	4,117
日吉メディアセンター	747	0	747	202	24	226	973
医学メディアセンター	18,760	245	19,005	3,520	125	3,645	22,650
理工学メディアセンター	23,040	0	23,040	1,405	35	1,440	24,480
湘南藤沢メディアセンター	303	0	303	324	10	334	637
合 計	45,500	260	45,760	6,489	608	7,097	52,857

参考データ：早慶 ILL

内 訳 各メディアセンター	貸	借
三田メディアセンター	760	297
日吉メディアセンター	66	51
医学メディアセンター	599	4
理工学メディアセンター	734	356
湘南藤沢メディアセンター	21	64
合 計	2,180	772

Ⅲ-3 利用統計 <複写サービス>

内 訳 各メディアセンター	種 別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	3,063	43,199	968	20,282	4,031	63,481
	簡易印刷	174	152,683	0	0	174	152,683
	OHP・スライド作製	0	0	0	0	0	0
	電子コピー (セルフ式)	—	—	—	—	—	4,325,493
	マイクロフィルム	3	497	21	10,184	24	10,681
日吉メディアセンター	OHP・スライド作製	—	33	—	—	—	33
	電子コピー (セルフ式)	—	—	—	—	—	1,385,498
	マイクロフィルム	122	2,980	—	—	122	2,980
医学メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	57,291	352,822	85,006	495,450	142,297	848,272
	OHP・スライド作製	500	2,123	—	—	500	2,123
理工学メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	5,306	101,417	22,148	196,275	27,454	297,692
	O H P	739	3,017	—	—	739	3,017
	電子コピー (セルフ式)	—	796,813	646	18,115	—	814,928
	マイクロフィルム	76	1,090	3	98	79	1,188
湘南藤沢 メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	152	959	240	1,266	392	2,225
	簡易印刷	1,079	1,621,985	—	—	1,079	1,621,985
	OHP・スライド作製	9	3,145	—	—	9	3,145
	電子コピー (セルフ式)	—	743,900	—	—	—	743,900
	マイクロフィルム	—	3,505	—	—	—	3,505

参考データ：電子コピー枚数

内 訳 各メディアセンター	オペレーター付	セルフ式	合 計
三田メディアセンター	63,481	4,325,493	4,388,974
日吉メディアセンター	—	1,385,498	1,385,498
医学メディアセンター	848,272	—	848,272
理工学メディアセンター	297,692	814,928	1,112,620
湘南藤沢メディアセンター	2,225	743,900	746,125
合 計	1,211,670	6,485,179	7,696,849

Ⅲ-4 利用統計 <レファレンス・サービス>

利用者別

種別 各メディアセンター	学内者		学外者	合計
	教職員	学生		
三田メディアセンター	1,648	9,695	3,017	14,360
日吉メディアセンター	2,011	5,090	438	7,539
医学メディアセンター	3,142	580	2,565	6,287
理工学メディアセンター	986	3,945	3,121	8,052
湘南藤沢メディアセンター	349	3,693	98	4,140
合計	8,136	23,003	9,239	40,378

業務内容別

種別 各メディアセンター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
三田メディアセンター	7,694	583	6,078	5	14,360
日吉メディアセンター	1,904	530	5,103	2	7,539
医学メディアセンター	2,573	1,888	1,825	1	6,287
理工学メディアセンター	4,514	289	3,126	123	8,052
湘南藤沢メディアセンター	340	41	3,746	13	4,140
合計	17,025	3,331	19,878	144	40,378

IV-1 計算機利用統計 <情報システムサービス>

(1) 利用課題数

区 分	M-1700/10 (三 田)		ワークステーション系 (三 田)		M-1600/8 (日 吉)		ワークステーション系 (日 吉)		ワークステーション系 (矢 上)		CNS-ワークステーション系 (SFC)		合 計	
	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生
文 学 部	87	208	11	338	25	26	11	102	—	—	11	6	145	680
経 済 学 部	51	609	14	423	29	250	19	472	—	1	5	15	118	1,770
法 学 部	33	71	5	364	22	30	13	288	—	3	9	8	82	764
商 学 部	49	545	16	308	17	35	13	151	—	—	1	4	96	1,043
医 学 部	18	3	1	3	36	20	5	16	—	—	11	—	71	42
理 工 学 部	53	41	1	29	270	170	17	343	9	56	5	12	355	651
総 合 政 策 学 部	—	19	3	23	—	3	—	9	—	2	64	2,058	67	2,114
環 境 情 報 学 部	—	1	1	19	—	—	—	13	—	3	133	1,893	134	1,929
文 学 研 究 科	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
社 会 学 研 究 科	—	—	—	—	—	13	—	2	—	—	—	—	—	15
政 策 ・ メ デ ィ ア 研 究 科	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	353	—	357
経 営 管 理 研 究 科	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
諸 研 究 所	23	—	12	—	18	—	4	—	5	1	5	1	67	2
設 置 講 座	—	100	—	—	—	155	—	—	—	—	—	—	—	255
諸 学 校	9	2	14	—	10	4	13	47	2	—	42	—	90	53
業 務	503	—	72	—	328	—	10	—	—	—	88	20	1,001	20
情 報 シ ス テ ム サ ー ビ ス	118	—	11	—	82	—	13	—	—	—	4	10	228	10
外 部	16	—	15	—	15	—	4	—	—	—	—	79	50	79
そ の 他	92	56	58	85	129	22	3	19	—	—	3	12	285	194
合 計	1,052	1,655	234	1,592	981	729	125	1,467	16	66	381	4,471	2,789	9,980

※平成7年3月現在

(2) JOB 件数

月	M-1700/10 (三田)	M-1600/8 (日吉)	VPX-220/10 (日吉)
4	15,093	2,393	390
5	16,352	3,974	625
6	17,530	5,405	1,069
7	15,112	2,917	730
8	7,698	1,491	3,624
9	12,603	1,325	
10	22,678	2,319	
11	19,090	3,179	
12	21,818	3,131	
1	14,872	2,581	
2	11,232	1,751	
3	13,663	1,648	
計	187,741	32,114	6,438

※M-1700/10・M-1600/8 はバッチと TSS の合計， VPX-220/10 は NQS ジョブのみ

(3) CPU 時間

月	M-1700/10 (三田)	M-1600/8 (日吉)	VPX-220/10 (日吉)
4	11.2	7.74	11.26
5	16.5	13.71	65.35
6	10.5	27.72	142.59
7	8.6	46.55	116.93
8	6.6	7.68	418.86
9	7.0	8.88	
10	15.5	43.75	
11	14.8	53.90	
12	14.0	20.66	
1	10.3	23.08	
2	8.3	3.48	
3	9.2	2.97	
計	132.5	260.12	754.99

IV-2 計算機利用説明会 <情報システムサービス>

課 題	期 日	場 所	参加人数
三田計算室利用セミナー	5/10	三 田	30 名
TSS 利用説明会 (入門編)	5/11・5/16・10/12	三 田	69 名
電子メール	5/12・5/17・10/5・10/11 10/17	三 田	193 名
MS-Windows (入門編)	5/18・5/30	三 田	58 名
OASYS/Win	5/23・5/31・10/19	三 田	58 名
Loutus 1-2-3 for Windows	5/24・6/2・10/20	三 田	72 名
UNIX (入門編)	5/25・6/6	三 田	51 名
TSS 利用説明会 (初級編)	5/26	三 田	22 名
日経 NEEDS 検索システム	5/29・6/1・10/13	三 田	46 名
SPSS for Windows (ご紹介)	6/7	三 田	20 名
日経 NEEDS 検索システム (新規機能)	10/18	三 田	10 名
UNIX (初心者対象)	10/24・10/25	三 田	52 名
EXCEL for Win	10/26	三 田	21 名
MS-WORD for Win	10/27	三 田	25 名
DB-FRONT	10/31	三 田	10 名
パソコン利用セミナー	5/29	日 吉	10 名
UNIX ワークステーション入門	5/30・10/9	日 吉	46 名
UNIX エディタ使用法 (Emacs)	5/31・10/12	日 吉	40 名
UNIX メール利用法 (mnews 編)	6/1・6/9・10/11	日 吉	62 名
UNIX メール利用法 (mh-e 編)	6/2・6/14・10/13	日 吉	45 名
汎用計算機エディタ使用法 (PFD 編)	6/6	日 吉	1 名
電話回線からの利用法	6/13・6/19	日 吉	9 名
Winsows 入門	10/3	日 吉	26 名
ワープロ入門 (MS-Word)	10/4	日 吉	20 名
表計算とグラフ (MS-Excel)	10/6	日 吉	16 名
パソコン入門 (通信教育部生対象)	7/26・7/27、8/3・8/4	日 吉	98 名
ネットワークモニター講習会	3/15・3/29	日 吉	17 名
スーパーコンピュータ (CONVEX C-4620) 利用説明会	10/16	理 工 学	41 名
並列システム (SP2) 利用講習会	3/29	S F C	12 名

編集後記

平成8年6月より、『MediaNet』の編集長を引き受けることになり、まず雑誌の体裁を整えることにしました。本文中に柱を付け、背文字を入れることにし、目次については、見やすいように工夫をしました。メディアセンターが提供する“情報”の媒体は、活字媒体から電子媒体へと移行しつつあり、それに伴った利用者へのサービスも変化しています。この機関誌が、メディアセンターの歴史の一端を記録するものと位置づけ、その時々派生した事業計画やサービスの拡充などを取り上げることができればと考えています。

第4号では、「ネットワークを利用したサービスの展開」という特集のほかに、日吉メディアセ

ンター、医学メディアセンターの勉強会などを盛り込み、自分たちのスキルを高めるための場を設けていることを報告して頂きました。10月14日、15日に開催された、ゲーテンベルグ聖書收藏記念慶應義塾図書館稀観書展は一般公開され、本学のコレクションをアピールしたものとなりました。本誌では、表紙裏に関連記事を掲載しました。

1455年頃の活版印刷技術時代の書物とデジタル化された資料が交錯する現在、メディアセンターが目指す方向性がどのようなものなのかを、本誌で取り上げることができればと思っています。

(梁瀬三千代)

MediaNet 第4号 1996年11月1日発行

編集 MediaNet 編集会議

発行 慶應義塾大学メディアネット本部

〒108 東京都港区三田 2-15-45

電話 03-3453-4511(内線 2501)

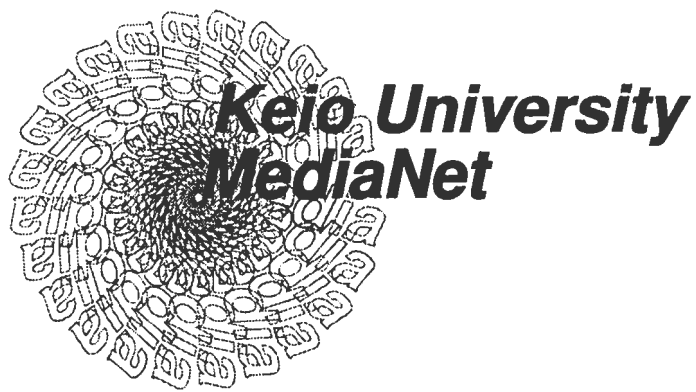
印刷 (有) 梅沢印刷所

MediaNet 編集会議

編集長 梁瀬三千代

編集員 藤井康子 竹内健祐 宮国彰郎 木下和彦

五十嵐由美子 長島敏樹 吉沢亜季子



Mita Media Center

Hiyoshi Media Center

Medical Information and Media Center

Information and Media Center for Science/Technology

Shonan Fujisawa Media Center